

等數人ト各家臣一人ヲ京師ニ留メテ所司代トナス其大權ヲ掌握スルニ及ヒ、
 更ニ前田立以テ所司代トシテ京洛ノ庶政并ニ社寺ノ事ヲ掌ラシム其大阪伏
 見ニ居城ヲ營シ關白ヲ以テ天下ニ令ス其晚年ニ至リ大老奉行ノ職ヲ定ム大
 老ハ徳川家康前田利家浮田秀家毛利輝元上杉景勝等ヲ以テ之ニ補ス世ニ五
 大老ト曰フ軍國ノ政ヲ參決スル職ナリ奉行ハ淺野長政長東正家増田長盛石
 田三成前田立以テ之ニ補ス五大老ト併稱シテ十人衆ト曰フ大事ハ大老
 之ヲ決シ小事ハ奉行ノ決ス又外ニ中老三人ヲ置キ生駒親正中村一氏堀尾
 吉晴ヲ以テ之ニ補シ三中老ト曰フ大老奉行議互ニ協ハサル時ニ調和スル職
 ナリ其他右筆奏者詰衆以下ノ職アリ太閤記、秀吉贈、慶長年中、
ト書記、武家名目抄、參取、徳川家康征夷大
 將軍トナリ豊臣氏ニ代リ鎌倉室町ノ故例ニ從ヒ幕府ヲ江戸ニ開キ天下ニ令
 スルコト殆ト三百年職制廢置分合一ナラス八代吉宗ヲ經十一代家齊ニ至テ
 稍大成セリ其重職ヲ大老ト曰フ機務ヲ總攝ス但シ則關ノ職トス之ニ亞クテ
 老中ト曰フ大政ヲ執行ス次ヲ若年寄ト曰フ旗下ノ諸士ヲ管シテ大政ニ預ル
 老中若年寄ノ參直スル所ヲ御用部屋ト稱ス幕府ノ政事悉ク決ス其下ニ大目
 付目付寺社奉行町奉行勘定奉行アリ之ヲ三奉行ト稱シ頗ル重職タリ又評定
 所アリ所謂裁判廳ナリ其諸職多ケレトモ事江戸ニ係ルヲ以テ之ヲ略セリ諸

職ニハ世襲アリ遷代アリ祿高萬石以上ヲ大名ト云ヒ以下ヲ旗下ト曰フ老中
 若年寄所司代城代側用人寺社奉行等大名ヲ以テ之ニ補シ餘ハ悉ク旗下ノ士
 ナ採用ス徳川實記、御營秘録、明
其御祿、吏、數、大、概、順、是レ徳川幕府ノ職制ナリ、
 王制已ニ衰フト雖モ徳川幕府ノ世ヲ終ルマテ朝廷ニ於テハ百官ヲ備置セツ
 ルコト常ニ舊制ノ如シ然リト雖モ唯虛銜ニシテ其職務ナシ其朝廷ノ常務ハ
 關白之ヲ綜攬シ議奏傳奏其機務ヲ掌トリ傳奏ハ幕府ニ咨問シ其承認ヲ得テ
 之ニ任スルヲ例トス以上公卿ヲ以テ之ニ補ス其次ニ職事方アリ即チ古ヘノ
 藏人所ニテ其餘波ヲ行ヘリ公家ヲ以テ之ニ充ツ次ニ藏人非藏人等アリ之ヲ
 表方ノ職官トス其内方ニ屬スル職員ハ即チ幕府ヨリ置ク所ニシテ禁裏附武
 家衆二人幕府旗下ノ士ヲ以テ之ニ充ツ一人ニ與力十人同心四十人ヲ附ス御
 賄方頭モ江戸ヨリ來任ス御使番頭アリ此内ヨリ御勘使御膳番御修理職御鍵
 番御板元吟味役御奏者番等アリ又御執次衆アリ仙洞ニハ後院上北面下北面
 等アリ後宮ニハ御世話卿非常御附方アリ公家ヲ以テ之ニ補ス其他大凡禁裏
 ニ同シ親王家ニハ諸太夫侍等アリ法親王ニハ院家別當院室坊官侍用人等ア
 リ御料ヲ支配スルニハ禁裏御所御代官アリ是武家專權時代朝廷職員ニ係ル
 大略ナリ同上明覽、京
幕職員圖書、

今上天皇慶應三年、大將軍德川慶喜、大政ヲ奉還ス。此ニ於テ、天皇萬機ヲ親裁シ、大政朝廷ヨリ出ツ、乃々古今ニ徵シ、内外ニ考ヘ、大ニ職制ヲ改ム。攝政、關白、國事係議奏、傳奏、征夷大將軍、幕府ノ諸職、京都守護職、所司代、町奉行、禁裏附、諸職等ヲ廢シ、總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク。時ニ十二月九日ナリ、已ニシテ、參與ヲ上下ニ分テ、上參與ハ、公卿諸侯之ニ任シ、下參與ハ、士族以下之ニ任ス。明治元年正月、三職ヲ八課ニ分テ、以テ大政ヲ掌理ス。

總裁局 總裁 副總裁 輔弼 顧問 辨事 史官

神祇事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

內國事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

外國事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

軍防事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

會計事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

刑法事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

制度事務局 督 輔 權輔 判事 權判事

總裁ハ萬機ヲ總ヘ、一切ノ事務ヲ裁決シ、議定ハ、事務ヲ分督シ、議事ヲ決定ス、參與ハ、事務ニ參與シ、各課ヲ分掌ス。總裁局ノ外、各局ノ事務ハ、各分掌アリ、尋

テ貢士、徵士ノ制ヲ立ツ。徵士ハ諸藩ノ士及ヒ都鄙人物ヲ拔撰シ、參與職ニ任スルモノトシ、貢士ハ大藩ハ三人、中藩ハ二人、小藩ハ一人ヲ撰ヒ、下ノ議事所ニ出サシム。是維新第一回ノ制ナリ、其官等各差アリ之ヲ略ス、其年閏四月三職八局ヲ廢シ、太政官七官ヲ置キ、其官制ヲ定ム、

議政官 上局 下局 議定 參與 史官 書記 筆生

下局 議長 議員 貢士ヲ以テ之ニ充ツ

日誌局 知司事 判司事 權判司事

行政官 輔相 正 辨事 史官

神祇官 知官事 副知官事 正 判官事

會計官 知官事 副知官事 正 判官事

出納司 知司事 正 判司事

用度司 以下皆同上

驛遞司

管繕司

稅銀司

貨幣司

民政司

軍務官 知官事 副知官事 正判官事

海軍局 一等海軍將 二等海軍將 三等海軍將

陸軍局 一等陸軍將 二等陸軍將 三等陸軍將

築造司 知司事 正判司事

兵船司 以下同上

兵器司

馬政司

外國官 知官事 副知官事 正判官事 一等譯官

刑法官 知官事 副知官事 正判官事

監察司 知司事 正判司事

拘獄司 以下同上

捕亡司

地方三官

府 知府事 正判府事

藩

縣 一等知縣事 二等知縣事 三等知縣事

二等判縣事 三等判縣事

是レ維新第二ノ官制ナリ、此時舊來ノ官名ヲ存シ、別ニ此職制ヲ立テ、以テ實務ニ當ラシム、此ヨリ幾回ノ廢置分合アリ、同二年四月民部省ヲ立テ、五月彈正臺ヲ立テ、六月藩知事ヲ置キ、諸侯ノ藩籍返上ヲ許ス、七月更ニ官制ヲ改正シ、左ノ太政官ノ制ニ復シ、舊來ノ官衙ノ名ヲ立テ、舊來ノ官職ノ名ヲ以テ、實務ヲ行ハシム、

神祇官 伯 大副 少副 正大祐 正少祐 正大小史

太政官 右左 大臣 大納言 參議 大辨 中辨 正太史 正小史

民部省 卿 大輔 小輔 正大丞 正少丞 以下諸省 皆同

大藏省

兵部省

刑部省

宮内省

寮 頭 權頭 正助 正允

司 正 權正

待詔院

集議院 長官 次官 判官 權判官

大學校 別當 大監 少監 大博士 中博士 少博士 大丞 少丞

彈正臺 尹 大弼 少弼 大忠 少忠 大巡察

皇太后官職 大夫 亮 大進 少進 大巡

皇后官職 亮 大進 少進 大巡

春宮坊

府 知事 大參事 少參事

藩 知事 大參事 少參事

縣 知事 權知事 大參事

留守官 長官 次官 判官 權判官 以下

宣教使

開拓使

按察使

是レ維新第三回ノ官制ニシテ此ニ於テ養老ノ舊制ニ基キ時ニ從ヒ宜ナ制シ、
 大ニ更定スル所アリ蓋シ平安京ノ官制ハ初メ養老ノ令制ニ依リ嵯峨帝ノ時、
 藏人所檢非違使ノ創置ヨリ稍其變更ヲ生シ攝政關白ノ大權ヲ專ラニセシヨ
 リ大ニ紊レ其後ハ武臣ノ爲ニ實權ヲ失ヒ以テ八百餘年ヲ經然レトモ其名ハ
 依然トシテ存在シ一日モ廢スルコトナク朝廷ノ上秩然治朝ノ如シ此ニ至リ
 乾綱一振百度維新再ヒ其實權ヲ行フノ盛世ニ際セリ豈ニ盛ナラヌヤ此ヨリ
 益改正變更シテ以テ今日ニ及ヘリ太政紀要、明治
 史要、職官表、

平安通志卷之二十一

平安通志卷之二十二

湯本文彦等編

第二編

法制志

上古ノ世、風俗醇樸、人民敦厚、上明德ヲ以テ下ニ臨ミ、下忠信ヲ以テ上ニ事フ、政令簡易、固ヨリ法制科條ノ記スヘキアルコトナシ、其之アルハ實ニ大化革新ヲ始メトス、是ヨリ先天造自然ノ則ニ從ヒ、時ニ詔勅ヲ發シ、政令ヲ實施シ、躬ヲ以テ下ヲ率ヰ、萬姓熙々、識ヲス知ヲス、帝ノ則ニ從ヒ以テ雍々ノ化ヲ被リシカ、聖德太子朝政ヲ攝スルニ及ヒ、頗ル制作アリ、初メテ憲法ヲ定ム、然レトモ其事タル訓誡ニ屬シ、未ダ以テ國法ト爲スニ足ラス、大化革新ニ及ヒ、制度初テ立テ、所謂法治ノ體制始マレリ、南都ニ及ヒ、法制益備ハル、所謂近江朝廷ノ律令、大寶律令、養老律令ノ如キ是ナリ、平安京ノ法制ハ、大化革新ヲ基トシ、南都ノ制作ニ因リシ者ニシテ、其律令ハ養老ノ制作ナリ、其後弘仁ニ及ヒ、格アリ式アリ、律令格式備ハリテ、政典始メテ完シ、蓋シ政典ヲ律令格式ノ四部ト定メシハ、李唐ノ制ニ效ヒシ者ニシテ、李唐ハ楊隋ニ基キ、楊隋ハ宇文周ニ基キ、宇文周ハ姬周ノ制度、即チ三代ノ良制ニ則リシ者ナリ、律ハ刑書ナリ、令ハ制定ノ法ナリ、格ハ例格

ニシテ時宜ヲ制スル者ナリ式ハ式法ナリ此四者アリテ萬法兼該シテ泄ルコトナシ平安京トナリテ格ハ弘仁貞觀延喜三代ノ撰アリ式亦之ニ同シ律ニハ疏アリ令ニハ義解アリ以テ其義ヲ解釋ス皆大臣ノ勅ヲ奉シ時ノ名儒法家ヲ集メ撰述セシ所ナリ其他彈正臺ニハ彈例アリ勘解由使ニハ交替式アリ按察使ニハ十六條例アリ其他單行ノ法制亦少カラス其規畫周到細大遺サス然觀ルヘシ唯惜ム後世亂離殘闕今日ニ至リ其書全存スルモノ甚タ少ナキチ蓋シ法制ヲ實行セシハ延喜天曆以前ニシテ其後ハ概ネ私家權門ノ法ヲ無スル姦匪凶徒ノ暴ヲ肆ニスル之カ爲メニ陵遲不振ニ陥リ殆ト有名無實ノ徒法トナレリ朝廷已ニ大權ヲ失ヒ大臣亦其職ヲ親ヲセス經綸ノ務法制ノ事自ラ一ノ職業トナリテ大江坂上中原三善小槻諸氏ノ如キ其職ヲ世ニシ小槻氏ハ左右太史ヲ世襲シ之ヲ官務家ト稱セリ夫レ官務ハ官務ナリ何ソ小槻氏ノ一家ニ限ランヤ然ルニ之ヲ稱シテ官務家ト曰フ益官務ノ濫ナリシヲ證スヘシ王政已ニ衰フルニ及ヒ院政ノ行ハルヤ院宣ヲ以テ天下ニ號令ス亦一時ノ勢ヲ制スルアタハス時ニ法制ノ發行アルモ天下ニ實行スルアタハス此ヨリ勅府政權ヲ執リ朝廷己定ノ法制ハ全ク文具ニ屬セリ勅府ノ法制ハ王室ノ繁褥複雜ノ弊ヲ矯メ直截簡易ヲ主トシ一時ノ宜ヲ制シタリ是レ武家制法ハ即

ナ王朝ノ法制ヲ掌リシ大江中原ノ徒カ幕府ノ爲メニ制定セシ所ニシテ亦一種ノ新體ヲ作リシ者ト謂フヘシ北條氏ハ貞永式目ヲ作りテ之ヲ法制ノ基トシ足利氏ハ建武式目ヲ草シ以テ政令ノ因據トナセリ然レトモ粗簡ニシテ武斷ノ科條タルニ過キス況ヤ應仁亂後天下騷亂ノ極ニ陥ルヤ織田豐臣二氏ニ及ヒ時ニ發行スル所アルモ多クハ一時ノ達令ニ過キス復法制ノ記スヘキナシ德川家康大阪ヲ亡スニ及ヒ關白二條照實ト謀リ禁裏并ニ公卿諸法度十七條ヲ定ム是レ蓋シ武家ニテ朝廷ノ法制ヲ立テシ始ナルヘシ是ヨリ先キ朝廷式微武臣ノ制スル所トナルト雖トモ皆明文ノ法制ヲ加ヘシモノナシ此ニ及ヒ勅府ノ勢ヲ以テ法制ヲ立テ朝廷ヲ制シ強テ之ニ遵ハシムルニ至レリ亦以テ天下ノ變ヲ見ルヘシ此時南禪寺長老崇傳林道春德川氏ノ顧問トナリ命ヲ奉シ此法案ヲ草セリ此ト同時ニ定メタル武家諸法度諸山諸宗諸法度等モ皆崇傳道春ノ草スル所ナリ此ヨリ德川氏江戸ニ於テ法制ヲ立テ天下ヲ統御スル二百十餘年一紙ノ觸書三百諸侯ヲ聳動セリ其末路ニ及ヒ綱紀振ハス法令叢脞以テ大權ヲ奉還スルニ及ヘリ明治維新乾坤一振シ七百餘年ノ久シキヲ經テ天下再ヒ天子ノ親政ヲ仰クヲ得タリ此ヨリ古今ノ宜ヲ制シ内外ノ長ヲ資リ良制美法彬々トシテ出テ以テ今日ノ盛ヲ致セリ今其大要ヲ掲ケ以テ

法制志ヲ作ル

平安京ノ初メ、法制ハ皆舊來ノ成法ニ仍リ、之ヲ用フ、即チ近江朝廷ノ法律ニ基キ、大寶養老ノ修定ヲ經テ、完成セシ者ナリ、按スルニ、我國法律ハ、太古ニ於テ已ニ存セシ如クナルモ、其詳ナルコト得テ考フヘカラス、其史上ニ散見スル者ニツキ之ヲ論センニ、蓋シ其罪ヲ別テ天罪國罪ト曰ヒ、輕重ニ從テ贖物ヲ徵ス、之ヲ祓除ト曰フ、罪ノ疑シキハ、探湯アリテ之ヲ決ス、其刑ニ數種アリ、或ハ妻子部曲ヲ收没シ、或ハ姓ヲ貶シ、職ヲ褫ヒ、其身ヲ使役スル等、皆臨時ニ之ヲ處分セリ、古事記日本紀、推古帝ノ朝、聖德太子政ヲ攝シテ、憲法十七條ヲ定ム、制法ノ條規アル之ヲ始トス、然レトモ概ネ訓誡ニシテ法典ニアラス、大化革新ニ及ヒ、隋唐ノ制ヲ斟酌シテ、庶般ノ法度ヲ創定ス、日本天智帝內臣中臣鎌足ニ命シテ、舊章ヲ損益シ、律令ヲ撰定シ、二十二卷ト爲シ、之ヲ天下ニ頒行セシム、之ヲ近江朝廷ノ令ト曰フ、弘仁格式序文武帝、刑部親王藤原不比等ニ勅シテ、律六卷令十一卷ヲ撰ハシム、大寶元年ニ至テ成ル、之ヲ大寶令ト曰フ、六月詔シテ天下ニ頒行シ、新令ニ據リ政ヲ爲サシメ、又明法博士ヲ諸道ニ遣シ、新令ヲ講セシム、二年二月新律ヲ天下ニ頒行シ、時々詔シテ諸司ヲ戒シメ、法令ヲ實行セシム、續日本紀元正帝養老二年、又不比等ニ勅シ、更ニ大寶令ヲ修選シ十卷トス、之ヲ養老令ト曰フ、弘仁格序本朝書

其大寶ニ成ル所ノモノハ、之ヲ古令古律ト稱ス、本朝書更ニ修纂シテ、令三十三篇九百五十五條、令集律十二篇ト爲ス、律目録此ニ於テ法制大ニ備ハレリ、其律令ノ目次ハ左ノ如シ、

令十卷

- 第一 官位 職員 後宮 第二 神祇 僧尼 第三 田戶 第四 賦役 學 第五 選叙 考課 職制
- 第六 官衛 軍防 第七 儀制 禁制 第八 衣服 第九 倉庫 醫疾 假寧 第十 關市

律十卷

- 第一 名例上 第二 名例下 第三 雜禁 第四 戶婚 第五 賊盜 第六 賊盜
- 第七 關訟 第八 詐誣 第九 雜 第十 捕亡 斷獄

中世亂離相踵キ、篇目殘闕シテ、令ハ倉庫醫疾ヲ亡ヒ、律ハ名例上衛禁職制賊盜ヲ存スルノミ、令義天下ノ刑律ハ、總テ刑部省之ヲ管ス、其被管ニ贖贖司囚獄司アリ、獄ハ左右京ニアリ、衛府追捕警察ノ事ヲ掌リ、彈正臺糾彈ノ事ヲ掌ル、其後檢非違使立テ、刑部彈正衛府ノ權之ニ移ル、事ハ官制志ニアリ、其刑律ノ法之ヲ五等ニ分テ、笞杖徒流死ト曰フ、各贖銅ノ制アリ、死罪ニ絞斬ノ二種アリ、特ニ八虐六議ノ法ヲ設ク、八虐トハ、謀反謀大逆謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義ニシ

テ其罪皇室ニ對シ、又倫理ニ悖戾スル者ナリ、六議トハ議親議故、議賢、議能、議功、議貴ニシテ、帝室ノ親故、及ヒ賢良、藝能、或ハ勳勞アリ、若クハ尊貴ナルモノハ、特ニ其罪科ヲ輕減センカ爲ニ議奏スルヲ得ルヲ謂フ、又官吏及官位、勳位ヲ帶スル者ノ爲メニ、官當除名、免官、免所居官等ノ制ヲ設ク、律疏、法曹、重要抄、桓武帝延曆十年、詔シテ吉備眞備、大倭長岡カ刪定スル所ノ律令二十四條ヲ頒行セシム、本紀、十一年、新彈例八十三條ヲ彈正臺ニ下ス、十六年、詔シテ曰ク、時ヲ觀教ヲ施スハ、國ヲ有ツ、彝範ニシテ、事ヲ量リ、規ヲ建ツルハ、政ヲナス要務ナリ、今彈正尹神王等奏スル所ノ刪定令格四十五條、折衷斟酌、極テ愜當ナリ、宜シク有司ニ下シ、悉ク遵用セシムヘシト、類聚、國史、二十年、公卿ノ奏ニ據テ、祓除ノ法ヲ制ス、祓除ハ神事ニ關シテ、犯科アルモノヲ懲戒スルモノナリ、類聚、三、代格、二十二年、勘解由使菅野眞道等交替式一卷ヲ撰ヒ、國司交替ノ事ヲ記シテ、之ヲ上ル、勅シテ諸國ニ頒タシム、交符式、弘、仁、格式序、是年眞道等又官曹事類三十卷外官事類十一卷ヲ撰ヒ、之ヲ上ル、本朝、法家、目錄、和氣清麻呂モ亦民部省例二十卷ヲ撰フ、日本後紀、和氣清麻呂傳、初メ隋唐ノ制ニ據テ、法制ヲ定メ、律令格式ヲ以テ、馭民ノ政典トス、故ニ弘仁格ノ序ニ曰ク、律以懲肅爲宗、令以勸誡爲本、格則量時立制、式則補闕拾遺、四者相須、足以垂範、ト、令ハ國家ノ制度、法典ノ基本、格ハ詔勅法令ノ準行シテ、例格トナルヘキ者、式ハ百官有司

ノ常ニ守ルヘキ所ノ定式ナリ、律ハ此制法ヲ違犯シ、罪惡ニ陷ル者ヲ處スル所ノ刑法ナリ、奈良ノ朝已ニ律令ノ撰アレトモ、未ダ格式ノ設アラズ、桓武帝心ヲ治國ニ留メ、曾テ律令ヲ刪定セシメ、之ヲ頒行スト、雖モ、格式ニ至テハ、未ダ編錄ニ及ハス、其末年ニ及ヒ、藤原内麻呂、菅野眞道等ニ詔シテ、之ヲ撰定セシム、書未タ成ルニ及ハス、會、帝崩シテ罷ム、弘仁、格序、平城帝大同二年、憲法十五條ヲ頒ナリ、日本後紀、嵯峨帝弘仁三年、公卿奏シテ、令條ノ事ニ便ナラサル所ヲ刊定センコトヲ請フ、之ヲ許ス、類聚、國史、六年、諸國死刑ノ決奏必ス歲終ニアリ、其文書ノ國ニ到ル春初ニ入ルヲ以テ、詔シテ十月ノ初ニ斷奏セシム、日本後紀、類聚、三代格、十一年、藤原冬嗣、藤原葛野麻呂等ニ詔シテ、先緒ヲ承ケ、格式ヲ修撰セシム、乃ケ官符ヲ採リ、遺例ヲ摭ヒ、商量損益シ、上ハ大寶元年ヨリ起リ、下ハ弘仁十年ニ至リ、格十卷式四十卷ヲ撰定ス、此ニ及ヒ、四法始テ備ハレリ、弘仁、格式序、同十二年、内裏式ノ撰アリ、是亦冬嗣ノ撰スル所ナリ、式、内裏、天長承和ノ間、弘仁格式ヲ補正シ、相繼テ頒行ス、類聚、十、二年、刑法斷例十條ヲ定ム、日本後紀、初メ律令ノ撰アルヤ、年代已ニ遠ク、諸博士相承ケ教授スレトモ、文簡ニ義深ク、情理通シカタシ、說者皆先儒ノ舊說ニ據テ、問答私記、互ニ異同ヲナシ、後學ノ輩、論決シ易カラス、淳和帝天長三年、明法博士額田今足奏シテ曰ク、當今ノ博士ニ命シ、先儒ノ說ヲ纂メ、迂說ヲ棄テ、正義ヲ採リ、勅

シテ卷帙トナシ、以テ訓釋ニ備ヘ、後學ノ徒ヲシテ解シ易カラシメント、勅シテ之ニ從ヒ、右大臣清原夏野等ヲシテ、明法ノ徒ト辨論質議之ヲ評定セシメ、十年ニ至テ書成ル、名ケテ令義解ト曰フ、其解タル簡明正確、義理正核、法典ノ標準タリ、仁明帝嘉祥二年、京師ヲ巡幸シテ、一舍前ニ至ル、問テ囚獄司タルヲ知リ、乃テ詔ヲ降シテ、悉ク獄中ノ囚人ヲ免ス、群臣皆萬歳ト呼フ、當時ノ政已ニ此ノ如シ、僧善愷登美直名ノ爭訟ヲ判シ、紀伊守伴宿禰龍男對馬ノ人直氏成ノ犯科ヲ治スルカ如キハ、皆刑ノ適用ヲ誤リ、律令ノ明文ニ悖戾シ、法度稍弛ヒタリ、後日本即クニ及ヒ、稍矯正スル所アレトモ、其宿弊ヲ正スニ及ハス、三代實錄貞觀七年、南淵年名等左右檢非違使式一卷ヲ進ル、本朝法家文書目録九年、勘解由使新定内外官交替式一卷ヲ撰テ之ヲ上ル、享祿本類聚三傳格、内外官交替式、十一年、藤原氏宗等ニ詔シテ、貞觀格ヲ撰ハシメ、上ハ弘仁ニ接シテ、取捨損益シ、定メテ十二卷トナス、十三年、氏宗等又式二十卷ヲ上リ、並ニ勅シテ頒行ス、三代實錄帝性仁恕ニシテ尤モ佛法ヲ信シ、刑ヲ用フルコト太々寛ナリ、其刃殺毆殺認告放火等、悉ク死ヲ減ス、唯伴善男ノ獄ヲ治スルニ當リ、議者或ハ罪ノ疑ハシキアリト謂フト雖トモ、帝斷然終ニ寛假セス、時人或ハ稱シテ仁者ノ勇トナス、三代實錄醍醐帝延喜七年、藤原時平等

貞觀十一年ヨリ延喜七年ニ至ル詔勅官符ヲ撰集シテ之ヲ上ル、合シテ十二卷之ヲ延喜格ト曰フ、延喜格序、本朝法家文書目録十四年、三善清行上言ス、諸國ノ檢非違使ハ、境内ノ姦濫ヲ糾シ、民間ノ兇邪ヲ禁スルヲ掌リ、國宰ノ爪牙トナリ、兆庶ノ衝策タリ、而ルニ今此職ニ任スル者、皆本國百姓ノ賸勞料ヲ納ル、者ナリ、徒ニ公俸ヲ費シ、差役ニ堪エス、空シク其名ヲ帶ス、伏シテ望ムラクハ、明法學生ヲ監試シテ、此職ニ任シ、國中ノ追捕及ヒ斷罪ハ、一切之ニ委任セント請フ、本朝文粹二十一年、勘解由使、内外官交替式一卷ヲ撰テ、之ヲ上ル、内外官交替式、本朝文粹延長五年、藤原忠平等、勅ヲ奉シテ、式五十卷ヲ撰フ、格十二卷ヲ併セテ、之ヲ延喜格式ト曰フ、延喜格式延喜儀式十卷、又貞觀儀式延喜儀式各十卷ヲ撰フ、又天長格抄三十卷アリ、上表延曆十一年ヨリ天長十一年ニ至ル、共ニ散亡シテ傳ラヌ、此後新儀式アリ、弘仁貞觀延喜ノ格ヲ類聚シテ、類聚三代格ト曰フ、其書合シテ三十卷アリシカ、本朝文粹今散亡シテ、僅ニ其第一卷第三卷第四卷第五卷第七卷第八卷第十二卷第十目五卷第十卷ト、享祿本五冊、第二卷、第四卷、第六卷、第七卷、第十卷ナ存スルノミ、式ハ、弘仁貞觀ノ撰ハ、散亡シテ傳ハラヌ、幸ニ延喜式五十卷今ニ現存シ、學者因テ以テ當時ノ法制ヲ知ルヲ得タリ、因テ延喜格ト延喜式ノ目ヲ左ニ掲ク、

延喜格一部十卷、十一卷、并序

延喜式一部五十卷

第一 神祇一、四	第二 神祇二、四	第三 神祇三、	第四 神祇四、伊勢大神宮、	第五 神祇五、
第六 神祇六、	第七 神祇七、陸	第八 神祇八、	第九 神祇九、	第十 神祇十、
第十一 太政	第十二 中務、内記、監	第十三 中宮、大舍	第十四 縫殿	第十五 内
第十六 陰陽	第十七 内匠	第十八 式部	第十九 式部	第二十 式部
第二十一 治部、雅樂、立書、諸禮、	第二十二 民部	第二十三 兵部	第二十四 刑部、列	第二十五 主計
第二十六 主稅	第二十七 主稅	第二十八 兵部	第二十九 刑部、列	第三十 大藏、
第三十一 典類	第三十二 大膳	第三十三 大膳	第三十四 木工	第三十五 大炊
第三十六 典類	第三十七 大膳	第三十八 正觀、	第三十九 造酒、采	第四十 一 彈正
第三十八 典類	第三十九 大宮	第四十 勘解	第四十一 左 右	第四十二 一 彈正
第四十 典類	第四十一 大宮	第四十二 勘解	第四十三 左 右	第四十四 一 彈正
第四十二 典類	第四十三 大宮	第四十四 勘解	第四十五 左 右	第四十六 一 彈正
第四十四 典類	第四十五 大宮	第四十六 勘解	第四十七 左 右	第四十八 一 彈正
第四十六 典類	第四十七 大宮	第四十八 勘解	第四十九 左 右	第五十 一 彈正

延曆以來法制ノ撰著大ニ進ミ、此外官私ノ書頗ル多シ、其目ヲ舉クレハ、事抄五卷、次事抄五卷、新抄五卷、續新抄五卷アリ、弘仁二年ヨリ貞觀三年ニ至ル、蓋シ格ノ類ナルヘシ、其書今亡ス、惟宗直本令集解三十卷、律集解三十卷ヲ著ハス、令集

解幸ニ今ニ存セリ、又令釋七卷、律附釋十卷、律疏三十卷アリ、律疏僅ニ存スルノミ、又法曹至要抄、金玉掌中抄、法曹類林、政事要畧、外記應例等ノ書頗ル多シ、又儀式ニ係ル者ハ、北山抄、西宮抄、江家次第ノ類少カラス、概ネ皆專門ノ人鍊達ノ士各之ヲ記述セシモノニシテ、官撰ニアラスト雖モ、皆文獻ニ備フヘシ、其書タル或ハ二百卷ニ及フモノアリ、惜哉、今散逸シテ存スルモノ少シ、本朝法家目錄、本朝初ノ朝廷法制ヲ重シ、其明法家ニ對スル頗ル厚シ、貞觀中、讚岐永直法律ニ通シ、明法博士トナル、老病ヲ以テ家ニ臥ス、詔シテ曰ク、明法博士ハ律令ノ宗師ナリ、惜ムラクハ齒耆者ニ在リ、正説ヲ傳ヘス、宜シク諸生ヲシテ第ニ就キ之ヲ受ケシムヘシト、永直私第ニ閑臥シ、生徒從テ業ヲ受ケ、式部省門庭ニツキ、竟宴ヲ行フ、法家之ヲ榮トス、三代實錄、初ノ朝廷死刑ヲ行ハサルコト久シ、歲末ニ刑部ヨリ、斷罪ヲ奏スル毎ニ、必ス勅シテ曰ク、死罪一等ヲ減シ、遠流ニ處シ、餘ハ省ノ斷ニ依レト、刑部省ノ政、檢非違使ニ移ルニ及ヒ、是事亦絶エタリ、藤原抄、四宮記、華山帝寬和元年、藤原齊明罪ヲ以テ誅セラレ、獄門ニ梟セラル、日本梟首ノ刑、天慶中、平將門藤原純友等ヲ梟セシヲ始トス、今昔物語、此後多ク叛逆強盜ノ輩ヲ處スルニ此刑ヲ以テス、日本紀略、初メ大寶ノ制、死ハ絞斬ニ止リシハ、是ニ至リテ梟刑アリ、此他時ニ應シ立ツル所ノ者モ少カラス、又髡削ノ刑アリ、三代實錄、手足ヲ

斷スル刑アリ、山槐記、百鍊抄、續古事談左遷ノ刑アリ、大臣納言等ノ罪アル者ヲ太宰權帥ニ
 貶謫シ、權守ニ左降スル等ナリ、續日本紀、續日本官吏懲戒ノ法ニハ、奪俸アリ、朝
 參ヲ停ムルアリ、釐務ヲ止ムルアリ、殿上ノ籍ヲ除クアリ、門籍ヲ封スルアリ、閉
 門ヲ命スルアリ、檢非違使廳鞞ヲ犯者ノ家門ニ懸クルアリテ、其法一ナラス、延喜式、類聚三代格、日本紀、後醍醐
 長保元年、又新制十一條ヲ定ム、抄、日本紀、新然レトモ概テ徒法ノミ、長徳二年、
 藤原伊周其弟隆家ヲシテ花山上皇ヲ射サシメ、矢御衣ニ中ル、僅ニ之ヲ太宰府
 ニ貶シ、隆家ヲ出雲權守ニ左降スルノミ、明年ニ至リ、赦ニ遭テ京師ニ還ル、其縱
 弛此ノ如シ、榮花物語、古事談、日本紀源經成檢非違使別當トナリ、赦ヲ行フニ先テ急ニ重
 囚三人ノ手足ヲ斬ラシム、僧或ハ經成ニ説クニ、應報ノ理ヲ以テス、經成聽カス
 法ヲ正シ、斷罪百人ニ盈ツ、他人之ヲ異トス、古事談、續冷泉圓融ノ後、王綱振ハス、
 百度縱弛、經綸ヲ後ニシ、崇佛ヲ主トシ、慈悲忍辱ノ弊、法規ヲ擧ケテ之ヲ蔑スル
 ニ至ル、淫奔風ヲ爲シ、宮壺尤甚シ、犯姦ノ法、終ニ空文トナリ、盜賊公行、獄ヲ毀テ、
 囚ヲ奪ヒ、或ハ禁省ニ入り、或ハ京坊ヲ燒クモ、之ヲ制スルアタハス、加フルニ佛
 寺ニ度シ、災異ヲ禳フ、必ス大赦ヲ行ヒ、姦匪志ヲ得、罪惡滋甚シ、南都北嶺ノ僧、兵
 ナ擁シ、闕ヲ犯シ、強訟亂妨、至ラサルナシ、上皇ノ尊キヲ以テ、之ヲ如何トモスル

アタハス、鴨川ノ水雙六ノ賽ニ比スルニ至ル、亦甚シト謂フヘシ、日本紀、百鍊抄、古事談、源平
 興福寺ノ僧靜範、成務帝ノ陵ヲ發キテ、寶物ヲ盜ム、實ニ謀大逆ニ當ル、死一
 等ヲ減シ、遠流ニ處ス、當時刑法ノ廢弛此ノ如シ、續扶桑後三條帝相門ノ權ヲ抑
 へ、賞罰ヲ明ニシ、寬猛相濟ヒ、法令稍行ハレ、紀綱頗ル張ル、扶桑略記、續白河帝
 嗣テ立ツ、剛斷果決、頗ル後三條帝ノ風アリ、然レトモ愛憎意ニ任セテ、舊典ニ遵
 ハス、中右記、續讓位後政ヲ院中ニ聽ク、弊政滋甚シ、續其院中ノ命令、之ヲ院宣
 ト謂ヒ、檢非違使ヨリ下スヲ院宣ト謂フ、違フ者ハ共ニ違勅ニ準ス、神皇正統記此時
 武士漸ク威ヲ振ヒ、法ニ違ヒ、命ニ背ク、帝佛法ヲ信シ、殺生ヲ禁ス、平忠盛ノ家人
 某禁ヲ犯ス、捕テ之ヲ詰問ス、某曰ク、忠盛臣ヲシテ日々鮮鳥ヲ捕へ、以テ女御ノ
 膳ニ供セシメ、若シ闕怠セハ、必ス嚴科ニ處ス、武家ノ嚴科ハ、首ヲ刎ヌルヲ謂フ、
 朝制嚴ナリト雖モ、禁獄配流ニ過キス、臣性命ヲ愛惜スルヲ以テ、甘シテ朝制ヲ
 犯スノミト、帝之ヲ聞キ笑テ問ハス、又帝ノ寵臣藤原顯季源義光ト采邑ヲ爭ヒ、
 之ヲ訟フ、帝顯季ニ諭シテ曰ク、若シ正理ヲ以テ之ヲ裁決セハ、彼必ス汝ニ仇セ
 ン、故ニ之ヲ讓テ後難ヲ避クルニ如カスト、顯季命ヲ奉ス、古事談又嘗テ法勝寺ニ
 幸セント欲ス、雨降ル、帝大ニ怒リ、雨ヲ器ニ盛テ獄ニ下ス、時人之ヲ雨ノ禁獄ト
 謂フ、古事談、源平盛衰記二條帝ノ時ニ郭公ヲ獄ニ下ス事アリ、古事談事兒戲ニ類スル此ノ

如シ、鳥羽帝永久七年、新制七條ヲ下ス、朝野詳載後白河帝保元元年、崇徳上皇兵ヲ徴シ、重祚ヲ圖リ、軍敗ル、帝藤原通憲ノ計ヲ用ヒ、上皇ノ黨出テ降ル者ハ、流罪ニ處セント曰フ、其黨之ヲ聞キ、皆出テ降ル、則チ其首魁ヲ斬リ、源義朝ヲシテ其父爲義及ヒ諸弟ヲ殺サシメ、平清盛ヲシテ其叔父忠政ヲ殺サシメ、遂ニ上皇ヲ讚岐ニ徙ス、保元物語、百鍊抄、一代要記嵯峨帝ノ朝藤原仲成ヲ刑シテヨリ以來、三百四十餘年、公卿ノ大辟ニ抵ル者ナシ、是ニ至テ之ヲ諒闇中ニ行フ、世以テ淫刑トナス、保元物語子ヲシテ父ヲ殺シ、姪ヲシテ叔ヲ殺シ、弟ニシテ兄ヲ流ス、實ニ綱常道絶エ、彝倫地ヲ掃フト謂フヘシ、二條帝平治元年、平清盛勅ヲ奉シテ、藤原信賴源義朝ヲ誅スルヤ、天下ノ大權其手ニ歸シ、法皇ヲ幽シ、公卿ヲ殺シ、專横至ラサルナシ、童子三百人ヲ京内ニ縱チ、己ヲ誹議スルモノアラハ、捕テ罰ヲ行フ、京師目ヲ側ツ、源平記、平治物語高倉帝治承三年、新制三十二條ヲ下ス、百鍊抄此後猶制令ノ頒行アリト雖モ、皆空文ニシテ記スルニ足ラス、源賴朝兵ヲ起シテ平氏ヲ滅シ、盡ク其族ヲ殺ス、蓋シ報復ノ私ニ出テ、刑法ノ正ニアラサルナリ、東鑑、源平盛衰記初メ王朝已ニ衰へ、藤原氏大權ヲ專ニシ、天下ノ政事皆私門ニ出ツ、然レトモ其大臣攝關タル者皆其私ヲ營スルニ止リ、經綸ノ業ヲ知ル者ナシ、他姓ノ人ハ、已ニ其出身ノ地ヲ失ヒ、藤原氏ノ鼻息ヲ仰カサレハ、仕進ノ路ヲ得ヘカラサルニ至レリ、然レトモ

法制ノ事ハ、政務ノ要ニシテ、復放棄スヘカラス、是ニ於テ學問ノ士ヲシテ專ラ其事ヲ掌ラシメ、其人モ自ラ其業ヲ專習シ、之ヲ其家業トナシ、以テ門戸ヲ立ル事トナレリ、菅原家大江家ハ、記傳道ヲ傳ヘ、中原清原二氏ハ、太政官ノ外記ノ局務ヲ掌リ、維宗坂上二氏ハ、明法道ヲ傳ヘ、三善氏ハ、算道ヲ傳フルノ類是ナリ、故ニ大臣攝關ハ、政事ノ何物タルヲ知ラサル者多シト雖モ、其科業ノ家ハ、世々其學ヲ講シ、失フコトナシ、賴朝已ニ覇府ヲ鎌倉ニ開キ、大政ヲ統轄スルニ及ヒ、武斷ヲ以テ天下ニ令ス、然レトモ其法制ノ事ニ至テハ、能ク定ムル者ナシ、是ニ於テ專門家ノ京都ニ在リシ者、朝廷ノ爲スヘカラサルヲ知リ、爭テ其文書記録ヲ抱テ鎌倉ニ赴キ、賴朝ヲ佐テ霸基ヲ定メ、幕府ノ法制ヲ立ツ、大江廣元、中原親能、三善康信ノ如キ是ナリ、是ヨリ朝廷益輕ク、復法制ノ記スヘキナシ、玉海、東鑑、百鍊抄文治三年、京都群盜蜂起ス、賴朝ニ命シ、之ヲ追捕セシム、賴朝下河邊行平千葉常胤ヲシテ鎮壓セシム、行平盜ヲ捕ヘ、八人ヲ斬ル、餘盜潛伏ス、追捕ノ權遂ニ武人ニ歸シ、檢非違使其職ヲ失ヘリ、東鑑順徳帝建曆二年、新制二十一個條ヲ頒ツ、後堀河帝嘉祿三年、新制六條ヲ頒ツ、百鍊抄承久以後、北條氏府ヲ六波羅ノ南北ニ開キ、近畿及ヒ西國ヲ管シ、其政務ヲ執ラシム、東鑑事ハ第一編ニ詳ナリ、泰時心ヲ政務ニ留メ、寛喜三年、六波羅ニ令シテ曰ク、強盜殺害人ノ渠魁ハ、斬罪ニ處シ、黨與ハ宜

シク在京鎮西ノ家人守護人ニ付クヘシ、盜犯ノ錢二百文以下ハ倍償スヘシ、重
科ハ其身ヲ禁錮スレトモ、親族ニ及フ勿レト、貞永元年、北條氏時ノ諸家及ヒ
鍊達ノ士ニ命シ、式目五十條ヲ撰フ、之ヲ貞永式目ト曰フ、幕府法制ノ基本ト爲
リ、後世因襲改ムルコトナシ、東鑑、貞永式目、後時ニ臨ミ機ニ應シテ、發布スル所ノ法令
ヲ編錄シ、之ヲ貞永式目、追加新武目、新編追加ト曰フ、貞永式目、追加新又六波羅
成敗ノ法十六條ヲ定ム、東鑑、鎌倉幕府以來、武臣ノ立テタル刑法ノ目、通シテ禁獄
追放、流罪、死罪ノ四種タリ、流罪ニ近中遠ノ差アル古ニ同シ、死罪ハ斬梟磔ノ三
等アリ、其文臣ニハ、特ニ召籠、召怠狀、勅勘、解官、除籍ノ五等ヲ設ケ、武臣ニハ、召禁、
過怠、改易所職、永不召仕、召放所領ノ五等ヲ設ケ、庶人ニハ、剃半鬚、燒印、闕所ノ閏
刑アリ、平治物語、東鑑、貞永式目、追加新四條帝嘉禎元年、北條氏六波羅ニ令シテ曰ク、京師ノ刃
傷殺害ノ武士ニ係ラサル者ハ、宜シク檢非違使廳ノ斷決ニ屬スヘシ、凶黨巨魁
ノ罪狀明白ナル者ハ、宜シク武家ノ處置ニ從フヘシ、黨與ハ皆執ヘテ、關東ニ送
リ、夷島ニ放流セシムヘシト、仁治二年、幕府奏シ、殺害重科等、使廳ノ斷ニ屬スル
者ハ、今後之ヲ六波羅ニ下シテ處決セント請フ、東鑑、後宇多帝建治三年、幕府政務
ノ條々ヲ記シテ六波羅ニ附ス、太田、北條時賴意ヲ政事ニ用ヒ、民ノ冤枉ヲ慮
リ、行脚僧トナリ、四方ヲ巡覽シ、民情ヲ觀察ス、增補、太時賴ノ孫貞時モ、亦躬僧衣

ヲ被テ、四方ヲ遊歴シ、風ヲ察シ、俗ヲ觀、民ノ疾苦ヲ訪フ、前内大臣源通基譴ヲ蒙
リ、京南ニ屏居ス、貞時其居ヲ過キ、幽寂ヲ愛シ、入テ之ヲ問フ、通基具サニ告クル
ニ、實ヲ以テス、貞時曰ク、大臣冤ヲ負フ蓋ソ之ヲ鎌倉ニ告ケテ申理セサルト、曰
ク、君ノ非ヲ彰シテ以テ己ノ枉ヲ伸フルハ、我ノ忍ヒサル所ナリト、貞時鎌倉ニ
還リ、之ヲ朝廷ニ奏シテ其冤ヲ訟フ、後宇多上皇大ニ愍テ、其爵邑ヲ復スト云フ、
太平記後醍醐帝北條氏ヲ滅サント欲シ、首トシテ記錄所ヲ復シ、諸政ヲ聽キ、已ニ
中興ノ業ヲ立テ、決斷所ヲ郁芳門外ニ置キ、雜訴ヲ聽理セシメ、其大事ハ記錄所
ニ於テ之ヲ決ス、太平記、武平間記凡ソ其降附ノ徒ハ、皆寬宥ニ從ヒ、高時ノ一族家臣ニ
非ルヨリハ、悉ク其死ヲ赦シ、一切安堵セシムルコト故ノ如クス、梅松論、元弘三年、御符、然
レトモ未タ久シカラス、政ニ荒怠シ、女謁内奏大ニ行ハレ、政刑紊亂ス、太平記、藤
原公宗大逆ヲ謀リ、事覺レテ誅セラル、源親房之ヲ譏リテ曰ク、公宗ハ外戚ノ親
タリ、位亞相ニ至ル、罪當ニ死ニアタルヘシト、雖モ、宜シク之ヲ誅スヘカラス、是
奉行有司ノ過ナリト、親房一代ノ名臣ヲ以テ、見ル所猶此ノ如シ、神皇正統記當時ノ
事何ソ尤ムルニ足ランヤ、其中興ヲ終ヘサル固ヨリ宜ナリ、足利尊氏已ニ天皇
ヲ幽シ、更ニ霸業ヲ立テント欲ス、僧眞惠是圓等ニ命シ、政事ノ大綱ヲ議定セシ
ム、時ニ建武三年ナリ、依リテ世之ヲ建武式目ト稱ス、然レトモ當時未タ制定シ

テ法律ト爲セルニアラスト云フ其大綱ヲ擧クレハ、一ニ曰ク節儉ヲ尙フ、二ニ曰ク群飲遊佚ヲ禁ス、三ニ曰ク盜賊及ヒ姦盜ノ徒ヲ鎮靜スヘシ、四ニ曰ク私邸ノ點定ヲ停止スヘシ、五ニ曰ク市内ノ閑地ハ本主ニ返シテ造營ヲ許スヘシ、六ニ曰ク無盡錢ノ土倉ヲ興スヘシ、七ニ曰ク諸國ノ守護職ヲ精選スヘシ、八ニ曰ク婦人僧侶ニヨリテ内奏スルヲ禁ス、九ニ曰ク公人ヲ精選スヘシ、十二ニ曰ク賄賂ヲ禁ス、十一ニ曰ク贈遺ノ物ヲ禁ス、十二ニ曰ク近習ヲ任選スヘシ、十三ニ曰ク上下ノ禮節ヲ正スヘシ、十四ニ曰ク德望アル者ヲ優賞スヘシ、十五ニ曰ク下民ノ訴訟ヲ聽斷スヘシ、十六ニ曰ク寺社ノ訴訟宜シク斟酌スヘシ、十七ニ曰ク聽訟ノ日限時刻ヲ定ムヘシ、世ニ之ヲ建武式目ト曰フ、武式目、貞永式目抄以テ永貞式目ト併用シテ政務ヲ執レリ、寬正中、清原常忠管領細川勝元ノ請ニヨリテ、貞永式目ヲ講シ、其孫宗允貞永式目抄ヲ撰ヒ、一條兼良之ヲ講シタルカ如キ、足利氏ノ法制ハ、鎌倉ノ制ヲ沿襲シタルヲ見ルヘシ、貞永式目抄是後時々下ス所ノ令達ヲ編シテ、建武以來追加ト稱ス、又新加制式武政軌範等ノ書アリ、貞永式目抄且ツ訴訟貢稅店舖貸借等ノ令達ヲ、政所ニ揭示ス、之ヲ政所壁書ト謂ヒ、應武以來追加政所ノ壁書訴訟ヲ記錄シタルヲ、政所賦銘引付ト謂フ、貞永式目抄其司法警察ニ關スル職ニ引付侍所、地方頭人、政所等アリ、引付衆ハ、諸訴訟ヲ裁判論決シ、侍所ハ、諸犯ヲ檢斷シ、

兼テ拷訊決罰ヲ行ヒ、地方頭人ハ、京内第宅ニ關スル訴訟ヲ掌リ、政所ハ、金穀田園等民事ニ關スル訴訟ヲ裁理スル職ナリ、武政軌範又吏民ノ訴狀ヲ受ケテ、之ヲ引付衆ニ分賦スルヲ、賦別奉行ト謂フ、沙汰決案、武政軌範其訴訟ヲ裁判スルノ法、主者二人ヲ命ス、一ハ原告人ニ關スル者ニテ、本奉行ト謂ヒ、一ハ被告人ニ關スル者ニテ、合奉行ト謂フ、外ニ參坐陪審以テ、其曲直ヲ證スル者ヲ命ス、之ヲ證人奉行ト謂フ、武政軌範其控訴ヲ受ケテ、冤枉ヲ申理スル者ヲ、越訴奉行ト謂フ、武政軌範事ハ第一編ニ記セリ、義滿ノ時ニ至リ、細川賴之執事トナリ、戒法五章ヲ制シテ、幕僚ヲ戒飾シ、士風大ニ悛マル、嘉吉二年管領畠山持國抽籤ヲ以テ、訴狀ヲ受理スルノ法ヲ定ム、人以テ便トナス、然レトモ當時武臣等、同族相爭ヒ、同僚怨ヲ構ヘ、往々奸邪ヲ逞クスル者アルヲ以テ、法令行ハレズ、長祿寬正ノ際、京師群盜蜂起シ、德政ヲ強請シ、放火抄掠、或ハ禁中ニ濫入シテ、内侍所ノ鈴及ヒ官人ノ衣服ヲ竊取スルニ至ル、幕府捕獲スルコト能ハス、長祿寬正ノ際、人民畏服シテ姦徒稍靜謐セリ、然レトモ將軍義政奢侈ヲ事トシテ、賞罰常ナク、管領相爭ヒ、政所伊勢貞親私曲ヲ恣ニシテ、紀綱壞亂、遂ニ應仁ノ亂ヲ釀成ス、長祿寬正是ヨリ後、天下大ニ亂レ、幕府ハ有名無實トナリ、刑政縱弛、此ニ

至テ極レリ、武家名之ヲ我朝法制紊亂ノ極度トス、既ニシテ織田信長密勅ヲ奉シ、兵ヲ學ケテ京師ニ入ル、法令嚴明ニシテ、部下整肅ナリ、偶一卒アリ、賈店ニ入テ價ヲ爭フ、信長命シテ之ヲ斬ラシム、是ニ於テ京民益其堵ニ安ンス、村井貞勝ヲシテ京師ノ所司代トナシ、其政刑ヲ司ラシム、貞勝能ク其職ニ任シ、都下始メテ政令ノ行ハル、安土日記ヲ見ル、信長日記、豐臣秀吉織田氏ニ代テ、政權ヲ掌握スルヤ、奉行ヲ置キ、庶政ヲ掌リ、訴訟ヲ裁決セシム、然レトモ軍國忽擾、法制ノ記スヘキナシ、武斷ヲ以テ一切ヲ行フノミ、然レトモ社寺ヲ保護シ、田制ヲ改メ、賦稅ヲ制シタルカ如キ、皆後世ノ法トナレリ、其姪秀次ヲ殺シ、秀次ノ子及ヒ婢妾數十人ヲ三條河原ニ刑セシカ如キハ、殘酷無狀、復之ヲ何トカ言ハン、秀吉傳、其晩年ニ及ヒ、大老中老ヲ置キ、五奉行ヲ定メ、大老ニ命シ、壁書六條ヲ定ム、其一ニ曰ク、諸大名等、私ニ嫁娶スルヲ禁ス、二ニ曰ク、大名小名等盟ヲ結ヒ、黨ヲ樹ツルヲ禁ス、三ニ曰ク、鬪爭アテハ、能ク忍フ者ヲ以テ是トナスヘシ、四ニ曰ク、多ク妾ヲ蓄フヲ禁ス、五ニ曰ク、留連シテ酒ヲ飲ムヲ禁ス、六ニ曰ク、大老公卿ノ老者五山ノ長老ヲ除クノ外ハ、輿ニ乗ルヲ禁ス、尋テ追加九條ヲ制ス、一ニ曰ク、公家門跡ノ輩家道ヲ嗜ムヘシ、二ニ曰ク、社寺ノ法、先例ニ遵ヒ、學事ヲ怠ルコト勿レ、三ニ曰ク、賦稅ハ之ヲ三分シ、其二ヲ地頭ノ得分トナシ、其一ヲ人民ニ與フヘシ、四ニ曰ク、

小名ハ嫡妻ノ外、一妾ヲ蓄フヘシ、大名ト雖モ侍妾一兩人ニ過クヘカラス、五ニ曰ク、采祿ノ多寡ニ隨テ、其量ヲ考フヘシ、六ニ曰ク、訴狀ハ十人衆五大老ニ出シテ、其裁決ヲ仰クヘシ、直訴ハ五大老評決ノ上、秀吉ノ命ヲ聞クヘシ、七ニ曰ク、衣服ニ菊桐ノ紋章ヲ着クルヲ禁ス、八ニ曰ク、大酒ヲ禁ス、九ニ曰ク、覆面シテ道路ヲ往來スルヲ禁ス、大坂城中、其京師所司代前田立以ヨリ市民ニ達スル令書ヲ、立以法印下知狀ト謂フ、據本、其事頗ル細密ニシテ、京都後來ノ法トナレルモノアリ、又世ニ太閤式目ナルモノアレト、頗ル疑フヘキ者タリ、本書ニ、德川家康豐臣氏ニ代テ、大柄ヲ執リ、施政ノ法、專ラ鎌倉室町ノ制ニ因ル、德川御實記、附後陽成天皇慶長十一年、新令五條ヲ發行シ、同十八年公家ノ制法五條ヲ定メテ之ヲ頒ツ、附補家、後水尾帝元和元年七月、家康僧崇傳及ヒ林道春ヲシテ法度書ヲ草セシム、之ヲ元和諸法度ト云フ、一ヲ武家諸法度トシ、二ヲ公家諸法度トシ、三ヲ五山以下僧家諸法度トス、其公家諸法度ハ、關白二條昭實ト商議シ、連署シテ之ヲ進ル、關河政事錄、其要ヲ舉クレハ、一ニ曰ク、天子ハ文學ヲ修習スヘシ、二ニ曰ク、親王ハ班三公ノ下ナリ、三公辭表ノ後ハ、之ヲ下ニ列ス、攝籙ハ位次ヲ以テ列ヲ正セヨ、三ニ曰ク、清華ノ大臣辭表ノ後ハ、親王ノ次ニ列スヘシ、四ニ曰ク、攝籙其器ニアラサレハ、職ニ當ルヲ得ス、五ニ曰ク、其器ニアタレハ、老年ニ及フ

ト雖モ攝籙三公ヲ辭スヘカラス、六ニ曰ク、養子ハ同姓ヲ擇フヘシ、七ニ曰ク、武臣ノ位階ハ廷臣ト異ナルヘシ、八ニ曰ク、改元アル時ハ、支那年號ノ吉例ナルヲ撰フヘシ、九ニ曰ク、天皇以下廷臣ノ服飾、定例ニ從テ混スルコトナカレ、十二曰ク、諸家ノ昇進、宜シク舊例ニ遵フヘシ、十一ニ曰ク、關白傳奏奉行職事ノ命ニ違戾スル者ハ、配流ニ處スヘシ、十二ニ曰ク、名例律ニ據テ、罪ノ輕重ヲ考定スヘシ、十三ニ曰ク、攝家ノ門跡ハ、親王門跡ノ次ニ列スヘシ、前官大臣モ亦其次ニ列スヘシ、十四ニ曰ク、門跡院家ノ僧正ニ任スルハ、先規ニ據ルヘシ、十五ニ曰ク、門跡院家ノ僧都以下ニ任スルモ、亦先規ニ據ルヘシ、十六ニ曰ク、紫衣ハ、碩德ヲ撰テ、勅許アルヘシ、十七ニ曰ク、上人ノ號ハ、碩學ノ輩ヲ撰テ授ケラルヘシ、溢ニ競ヒ望ム者アラハ、配流セラルヘシト、其武家法制十三條、五山十刹法制七條、其他妙心寺大德寺眞言宗高野山永平寺總持寺淨土寺淨土西山派等法制トス、概ネ崇傳林道春等旨ヲ承ケ起草セシモノアリ、王朝已ニ衰ヘ、法制廢弛スト雖モ、武家ヨリ朝憲ヲ立シ者ハ、未タ之アラズ、其此アルハ、實ニ德川氏ヲ以テ初トス、亦以テ世變ヲ見ルヘシ、寛永三年、將軍家光中宮御所制法十五條ヲ定ム、南無寺文書、武家此時揭示ノ控書ヲ定メ、之ヲ木札ニ記シ、都邑ノ要所ニ揭示ス、依テ高札ト稱ス、切支丹宗門ヲ禁シ、其告訐褒賞ノ事ヲ記シ、忠孝仁義ヲ勸メ、儉素ヲ尚ヒ、詐

譏、爭鬪、博賭、盜犯、人賣、放火、貨幣ノ賈造、毒藥ノ賣買、商估ノ違濫ヲ禁シ、貨物、運搬、牛馬、車輿ノ賃銀ヲ定ムル等タリ、其條簡ニシテ事該、文少クシテ意廣シ、三百年間天下ノ大法典トナレリ、武家殿、制條明曆三年、家光ノ子家綱新院御所御定目五條ヲ制ス、一ニ曰ク、新院ハ官位并ニ政事ニ關係スヘカラス、二ニ曰ク、新院御所ニ諸藝ノ輩ヲ召シテ見ルヘカラス、三ニ曰ク、上皇并ニ御兄弟ノ外ハ、一切對面スヘカラス、四ニ曰ク、祝日ニ拜賀スル廷臣ハ、新院ノ傳奏ニ刺ヲ通スヘシ、五ニ曰ク、禁中御幸ハ、上皇女院ト同伴ナルニ非サレハ之ヲ許サス、但仙洞女院御所ヘ御幸ハ此限ニアラスト、德川、令考其皇室ニ對スル所ノ法規概ネ此ノ如シ、是豈人臣ノ立ツヘキ所ノ法條ナランヤ、嗚呼亦甚シト謂フヘシ、德川氏ノ初メ、法典編纂ノ擧ナク、時々法令ヲ發スルノミナリシカ、後櫻町帝寛保中、將軍吉宗幕臣ニ命シテ、慶長ヨリ寛保ニ至ル法令ヲ纂修セシメ、五十卷トナシ、之ヲ享保集成ト曰フ、將軍家重ノ時、寛保ヨリ寶曆ニ至ル令達ヲ集テ、三十三卷トシ、之ヲ寶曆編集ト曰フ、將軍家齊ノ時、之ニ繼テ、天明集成五十一卷ヲ撰ヒ、將軍家慶ノ時、天保集成百八卷ヲ撰フ、天保、集又近藤守重ノ編スル所憲教類典百餘卷アリ、集、本是等ノ書ハ、則テ古代ノ格ニ等シキ者ニテ、令式ニ類スル成典アルヲ聞カス、律書ノ如キハ、寛保ノ比、將軍吉宗自ラ刑法ノ書ヲ制シ、老中若年寄寺社奉行勘定奉行

町奉行等ニ命シテ協議制定セシメ之ヲ公事方定書ト稱ス徳川御實 記附録 後櫻町帝
 明和四年ニ至リ之ヲ訂正シ布令ヲ併セテ二卷トナシ科條類典ト曰フ然レト
 モ吏員執務ノ参照ニ備フルノミ科條類典 其刑ヲ立ルニ敲輕 追放、遠島、死罪斬、火、磔
 アリ、其屬罪ニ晒、入墨、闕所、非人、手下ノ四種アリ、士人ニ逼塞、閉門、蟄居、改易、切
 腹ノ閏刑五種アリ、僧徒ニ晒、追院、構ノ閏刑三種アリ、婦女ニ剃髮、奴ノ閏刑二種
 アリ、庶人ニ呵嘖、過料、三閑、手鎖ノ閏刑四種アリ公事方 御定 司法ノ廳、江戸ニアル者
 ナ評定所ト稱シ、老中以下ノ幕吏訴訟ヲ裁判シ、評定所ニ目安箱ヲ置キ、庶民ヲ
 シテ封事ヲ上リ、以テ下情ヲ陳セシム徳川御實 記附録 京師ノ庶政ハ、所司代之ヲ管シ、
 板倉勝重、重宗父子相繼テ之ニ補シ、毎日決斷所ニ出テ、訴訟ヲ聽キ、裁決允當、冤
 枉ナク、都民悅服ス藩 諭 後町奉行二人ヲ置クニ及ビ、毎月十日、東西兩廳ニテ訴
 訟ヲ裁シテ式日ト曰フ、十五日以前ハ東廳之ヲ聽キ、以後ハ西廳之ヲ斷ス京師 御役
所向 正徳中、江戸ノ評定所ニ准シテ、毎月二日町奉行伏見奉行等ヲ所司代ノ邸
 ニ會シ、町奉行等ノ決スル能ハサル訴訟等ヲ裁理ス京師 御承 傳録 元和八年、板倉重宗
 京師ノ制法九條ヲ定メテ、訴訟、商賣、典物、證券、印判、火災、消防ノ事ヲ制シ、并ニ武
 士ヲ隱匿シ、新寺ヲ建ルヲ停メ、耶穌教ヲ嚴禁ス、尋テ又七條ヲ制シ、寛永六年ニ
 至リ、五條ヲ制ス、此三個ノ法令ヲ併セテ二十一個條ト曰フ、明暦元年、所司代牧

野親成制法九條ヲ定ム憲教類典 京師 御承 傳録 先キノ二十一個條ト併セテ之ヲ刊行シテ
 習字帖トナス、刊本今往々坊間ニ存ス、蓋シ市民ヲシテ之ヲ記憶セシメンカ爲
 ナリ據本 大政維新ノ初メ、官制ヲ改メ、刑罰局ヲ立テ、尋テ改テ官ト稱シ、後又改
 メ刑部省トシ、以テ天下ノ法律ヲ掌ラシム、後改メテ司法省ト稱ス、明治元年、天
 皇天神地祇ヲ親祭シ、五事ノ誓約ヲ立テ、萬機公論ニ決スル旨ヲ公布シ、舊幕府
 ノ揭示ヲ廢シ、更メテ五條ヲ揭示ス、其第一榜、一日ク、五倫ノ道ヲ正フスヘシ、二
 日ク、鰥寡孤獨廢疾ノ者ヲ憫ムヘシ、三日ク、人ヲ殺シ、家ヲ燒キ、財ヲ盜ム等ノ事
 ナ爲ス勿レ、第二榜、日ク、黨ヲ樹テ強訴シ、或ハ相率テ田里ノ去ルコト勿レ、第
 三榜、日ク、切支丹邪教ハ、舊ニ仍リテ之ヲ嚴禁ス、以上三榜、永世ノ定法トス、第四
 榜、外國人ニ對シテ暴行ヲナスヲ禁ス、第五榜、逋逃ヲ禁ス、以上一時ノ揭示トス
 是ヲ維新ノ大法トス、此ヨリ古今ヲ稽ヘ、内外ニ照シ、法制ヲ明ニシ、從來隱文ヲ、
 以テ行ヒシ舊慣ヲ廢シ、更ニ天下ニ公布シテ、上下之ニ由ラシムル事トナレリ
 此ヨリ新律綱領ヲ定メ、改定律令ヲ撰シ、諸般ノ法制、彬々トシテ備ハレリ、

平安通志卷之二十二

平安通志卷之二十三

湯本文彦等編

第二編

兵制志

我朝武ヲ以テ國ヲ立ツ故ニ天孫ノ降臨スルヤ寶劍三器ノ一ニ居リ大已貴ノ國土ヲ獻スルヤ奉スルニ平國ノ矛ヲ以テス太祖神武ヲ以テ大業ヲ創立シ兵事ヲ重シ義勇ヲ尙ヒ以テ天下ヲ統御ス列聖率由敢テ或ハ懈ルコトナシ兵威ノ加ハル所海外ヲ讐伏ス夫レ武ヲ尙フハ人心ヲ振作スルヲ要ス人心ヲ振作スルハ忠勇ヲ獎メ節義ヲ尙ヒ儉素ニ慣レシメ驕汰ヲ戒ムルニアリ故ニ勤儉尙武ハ我立國ノ主義ニシテ歴世ノ盛衰隆替未タ替テ之ニ因テ判セスンハアラサルナリ延暦ノ初メ南都ノ弊政ヲ受ケ兵備大ニ弛ミ東夷猖獗王略ヲ侵犯シ時ニ進ミテ東海東山ニ入ル桓武天皇英邁剛武大ニ撻伐ノ師ヲ興シ疆土ヲ開弘セント欲スルノ志アリ此時兵制ハ大寶ノ令ニ仍リ軍國ノ法タリ壯丁ヲ點シ兵ト爲シ軍國ヲ以テ之ヲ教養シ軍毅ヲ置キ之ヲ管シ時ヲ以テ簡鍊ス京ヲ衛ルヲ衛士ト曰ヒ邊ヲ戍ルヲ防人ト曰フ其法頗ル備ハリ具ニ條規アリ然ルニ太平ノ久シキ兵弱ク將怠リ用ヲ爲サス故ヲ以テ初メ將帥人ナク師出

ツルニ功績未タ立タス、帝千里方畧ヲ指授シ、事機宜ニ合ス、然ルニ將師怯懦功
ナクシテ歸ル、乃チ賞罰ヲ明ニシ、將師ヲ簡ヒ、精銳ヲ練リ、器械ヲ繕ヒ、糗糧ヲ時
ヘ、師ヲ興ス十萬、蝦夷ヲ海外ニ驅リ、奥羽全ク鎮定ス、王代ノ兵、此ニ於テ盛ナリ
トス、其謚ヲ奉リテ桓武ト曰フ、良ニ以アル哉、此ヨリ昇平百年、文恬武熙、上下宴
安ニ耽リ、公卿武人ヲ卑視シ、之ト相齒セス、武人ハ兵力ヲ握リ、門地ヲ作シ、宿衛
ヲ怠リ、鄉曲ニ專横ス、三善清行以テ諸國ノ豺狼ニシテ、六軍ノ猛虎ニアラスト
ナス、宜ナルカナ、源平二氏武ヲ以テ家ヲ起シ、互ニ朝廷又攝關ノ爪牙トナル、保
元平治、禍機横裂、平氏兵權ヲ占メ、源氏之ニ繼キ、遂ニ攝關ヲ開キ、大權ヲ掌握シ、
朝廷復兵事ニ關スルヲ得ス、朝廷宿衛ハ、六衛已ニ空名トナリ、其後大番武士院
北面等アリシカ、承久以來是亦殆ト廢セリ、攝關府創立、兵ハ武人豪族ノ專有トナ
リ、遂ニ群雄爭奪割據ノ世トナリ、以テ封建ノ形ヲ成スコト數百年、徳川氏大政
ヲ奉還シ、兵權朝廷ニ歸シ、戊辰ノ役、朝廷藩兵ヲ以テ東北ヲ平定ス、鎮將總督參
謀ヲ置キ、以テ其節制ヲ司レリ、朝廷ノ藩兵ヲ用井シハ、古今獨リ此時アルノミ、
已ニシテ徵兵令ヲ定メ、全國募兵ノ制ヲ立テ、舊來武士ノ常職ヲ解キ、七八百年
來因襲セシ武家ノ兵制、此ニ於テ全ク止ミ、再ヒ古代ノ兵制ニ復シタリ、此ヨリ
兵ヲ陸海二軍ニ別テ、西洋ノ式ニ效ヒ、萬國ノ長ヲ資リ、日操月練、益其實力ヲ養

ヒ、以テ東洋ノ一強國ト稱セララル、ニ至レリ、我國王代兵制ハ李唐ニ效ヒ、軍團
ハ猶彼ノ府兵ノ如シ、亦良制ナリ、其弊ヤ兵弱ニシテ振ハス、故ニ弓馬ニ便ナル
豪族ノ子弟ヲ簡ミ、健兒ヲ置ク、猶唐ノ曠騎ノ如シ、武門武士起リ、雄ヲ四方ニ爭
フ、猶唐ノ藩鎮ノ如シ、其制已ニ同シク、其害亦同シクシテ之ト相伴フ、勢ノ然ラ
シムル所ナリ、然レトモ彼ハ藩鎮ノ爲ニ其天下ヲ亡セシモ、我國ハ則チ攝關府大
權ヲ攝セシニ過キス、以テ數百年ヲ經過シ、大勢已ニ熟スルニ及ヒテハ、三百諸
侯期セスシテ其封土ヲ奉還シ、兵馬ノ大權一朝王室ニ歸シ、遂ニ再ヒ今日ノ盛
ヲ致セリ、是レ萬國ノアラサル所ニシテ、我國體ノミ然ルヲ致ス所ナリ、豈仰テ
其故ヲ思ハサルヘケンヤ、

桓武天皇平安奠都ニ先タツコト二年、勅シテ曰ク、諸國兵士概チ尪弱事ニ堪エ
ス、徒ラニ國司軍毅ノ使役ニ供シ、不虞ノ用ヲナサスト、因テ陸奥出羽佐渡太宰
府等邊要ヲ除ク外、京畿七道諸國ノ兵士ヲ廢シ、健兒ヲ置ク、其數多キハ一國二
百人ニ及ヒ、少キモ三十人ニ下ラス、以テ兵庫鈴藏國府等ノ戍衛ニ充ツ、享隆本
類聚三
代健兒ハ其原始ヲ詳ニセス、聖武帝ノ世既ニ其稱アリ、本紀此ニ至リ之ヲ增置
シ、以テ兵士ニ代フ、兵士徵發ノ制ハ、持統帝ノ世ニ昉マリ、文武帝ノ朝ニ定マル、
但シ上世ハ皆部曲ヲ編制シ、以テ兵ト爲セリ、日本書紀
令義解我國武ヲ以テ國ヲ立ツ、

太古ノ世二神ノ八洲ヲ造ルヤ、晝スルニ瓊矛ヲ以テシ、天孫ノ中州ニ降臨アル
 ヤ、寶劍天位ヲ表ス、内ニハ天物部アリ、外ニハ經津主武雷ノ神アリ、其兵制ノ詳
 ナル、後世得テ知ルヘカラスト、雖トモ蓋シ已ニ備ハレリ、日本書紀、古事記、神
 武帝東征ニ至リ、道臣命大伴部ノ兵ヲ率井、大久米命來目部ノ兵ヲ率井テ、偉勳
 ナ建テ、天下ヲ平定シ、二部ノ兵宮門ヲ衛護ス、後世禁衛是ヨリ始マル、古事記、日
器拾遺、大 日本史、後大伴佐伯二氏左右ノ門衛ヲ掌リ、新撰姓 可美眞手命天物部ノ兵ヲ
 管シ、子孫世々大連トナリテ、兵刑ノ事ヲ掌ル、日本書紀、古事 國縣ニ屯倉ヲ設ク、
 部曲ヲ置キ、屯田ヲ耕シテ糧食ヲ備ヘシム、部曲又品部ト號シ、物部鞆負部ノ類
 ナ朝廷ノ衛兵ト爲シ、其他弓削、矢作、鍛冶等諸部其類甚衆ク、臣連伴造等之ヲ領
 シテ、以テ其職ヲ世ニス、其事アルヤ、天皇三軍ヲ帥井、不庭ヲ征伐シ、時ニ或ハ皇
 子皇后之ニ代ハル、臣連以下各部曲ヲ率井テ統屬ス、之ヲ上世ノ兵制トナス、日
新撰姓、古事記、 孝德帝ノ大化革新、舊來ノ制ヲ革メ、屯倉及ヒ品部ヲ廢シ、兵權一ニ
 朝廷ニ歸ス、此ニ於テ兵制一變ス、天智帝ノ朝、防人烽燧ヲ邊要諸國ニ置キ、天武
 帝最モ意ヲ兵備ニ留ム、持統帝勅シテ、天下毎國ノ人民四分ノ一ヲ點シテ兵ト
 爲シ、武事ヲ訓練セシム、日本書紀 文武帝大寶令ヲ撰ヒ、大ニ兵制ヲ定ム、續日本書紀 元
 正帝養老二年、詔シテ更ニ増損スル所アリ、此ニ至リテ軍制益備ハル、續日本書紀 其

衛兵ハ、衛門府、左右衛士府、左右兵衛府アリ、總稱シテ五衛府ト曰フ、日本書紀 兵部省
 ハ天下ノ兵政ヲ掌リ、被管ニ兵馬、造兵、鼓吹、主船、主鷹ノ五司アリ、其兵ヲ養フハ、
 諸國ニ軍團ヲ置ク、凡ソ軍ニハ大毅一人、小毅二人、一千人ヲ領ス、六百人以上ハ、
 大毅小毅各一人、五百人以下ハ、毅一人、二百人ニ校尉一人アリ、一百人ニ旅師一
 人、五十人ニ隊正一人、十人ヲ火ト爲シ、五人ヲ伍ト爲シ、弓馬ニ便ナルモノヲ騎
 兵トシ、餘ヲ步兵トス、大毅小毅ハ部内散位勳位庶人ノ武藝稱スヘキモノヲ取
 リ、校尉以下ハ庶人ノ弓馬ニ便ナルモノヲ取レリ、凡ソ兵士ハ、戸内三丁毎ニ一
 丁ヲ取ルヲ準トシ、一國ノ丁ヲ通算シ、其三分ノ一ヲ取ル、凡ソ兵士火別ニ六駄
 馬ヲ養ヒ、紺布、幕、銅盃、小釜、鋏、劍、碓、斧、小斧、鑿、鎌、鉗ヲ具シ、隊ニ火鑽、熟艾、手鋸ヲ具
 シ、人毎ニ弓一張、弓絃袋一、別絃二、征箭五十隻、胡籥、太刀、刀子、藪帽、飯袋、脛巾、鞋、水
 桶、鹽桶、皆一ヲ備ヘ、並ニ軍國庫ニ藏ス、凡ソ兵士京ニ向フモノヲ衛士ト曰ヒ、邊
 ナ守ルモノヲ防人ト曰フ、其上番衛士ハ一年、防ハ三年、郷ニ還ルニ及ヒ、國內ノ
 上番ヲ免スルモ亦此ニ同シ、其衛士一日上一日下、日毎ニ本府弓馬、用刀、弄槍、發
 弩、拋石ヲ教習セシメ、午時ニ至リテ放還ス、下日ト雖トモ、私ニ三十里外ニ行ク
 コトヲ得ス、其上番ノ歲ハ、重服ト雖トモ、下番スルコトヲ得ス、凡ソ衛士京ニ向
 ヒ、防人津ニ赴ク、皆國司ヲシテ親シク自ヲ部領セシム、衛士京ニ至レハ、兵部戎

具ヲ檢閲シ、當府ニ分配ス、防人津ヨリ發スル、專使ヲシテ部領セシメ、太宰府ニ付ス、凡ソ兵衛ハ内六位以下八位以上ノ嫡子、及ヒ郡司ノ子弟、強幹弓馬ニ便ナルモノヲ簡取シ、郡毎ニ一人ヲ貢セシメ、以テ之ニ充ツ、凡ソ將帥ノ出征スル、兵一萬人以上一萬二千人ニ至ルヲ一軍ト爲ストキハ、將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、五千人以上九千人ニ至ルヲ一軍ト爲ストキハ、副將軍軍監各一人、錄事二人ヲ減ス、三千人以上四千人ニ至ルヲ一軍ト爲ストキハ、軍曹二人ヲ減ス、三軍ヲ總フル毎ニ、大將軍一人、大將軍出征シ、軍ニ臨ミ、寇ニ對スル時ハ、大毅以下軍令ニ從ハス、及ヒ稽違闕乏スルコトアレハ、死罪以下並ニ專決スルヲ聽ス、又出征ニハ、必ス節刀ヲ授ケ、家ニ歸宿スルヲ得サラシム、出師兵數三千以上ニ滿レハ、侍從ヲ遣ハシ、勅ヲ宣シ、慰勞セシム、其他甲仗、軍器、城堡、烽燧ノ類皆周到、縝密ナラサルハナク、凡百ノ軍防曲サニ事情ヲ盡ス、令儀凡軍團每國ニ二三所或ハ四所ヲ置ク、出雲風土記、享祿、本類聚三代格後廢置分合スル所多シ、衛府モ亦頗ル沿革アリ、聖武帝始メテ中衛府ヲ置キ、五衛府ト通シ、六衛府ト稱ス、淳仁帝授刀衛ヲ置キ、稱德帝改メテ近衛府ト爲ス、本紀當時將士勇健、進ムヲ知リテ退クヲ知ラス、是ヲ以テ常ニ謂フ、額ニハ箭ハ立ツトモ、背ニハ箭ハ立テシト、而シテ大伴佐伯二氏多ク武官ト爲リ、世々内兵ヲ掌リ、最モ能ク部下ヲ訓練シ、常

ニ其徒ニ諭シテ曰ク、海ゆかば水つく、屍山ゆかば草むす、屍大君の邊にこそ死なめのとにはあらし、其忠勇此ノ如シ、兵ノ強盛ナル宜ナル哉、日本書紀、然レトモ爾後四方無事、武備漸ク弛ミ、天平中ヨリ東夷屢叛シ、光仁帝ニ至リテ尤モ甚シ、帝前後鎮守府將軍征東大使等ヲ遣ハシ、之ヲ討ス、諸將怯懦、逗撓シテ功ナシ、乃チ詔ヲ下シテ之ヲ戒飾ス、桓武帝英明ニシテ武ヲ好ミ、日本書紀、西管抄、寬平遠略已ニ大統ヲ承ケ、最モ意ヲ邊事ニ用フ、延曆二年勅シテ曰ク、夷虜常ヲ亂リ、梗ヲ爲シ、未タ已マス、追ヘハ則チ鳥散シ、舍ツレハ則チ蟻聚ス、須ラク兵卒ヲ訓練シ、以テ寇掠ニ備フヘシ、今聞ク、阪東諸國ノ軍役ニ從フモノ、率ネ低弱ニテ戰ニ堪ヘスト、宜シク、阪東八國ニ命シテ、散位郡司ノ子弟及ヒ浮宕等ノ甲兵ニ堪フルモノヲ點シ、國ノ大小ニ隨ヒ、一千ヨリ五百ニ至ルマテ、專ラ用兵ヲ習ハシ、並ニ行裝ヲ治メシムヘシ、而シテ事ニ堪ヘタル國司一人ヲ勅シテ、專知勾當セシメ、如シ非常アラハ、即チ押領奔赴シテ、事機ヲ失ハサレト、是ヨリ連年東征シ、東海、東山、阪東、諸國ノ兵ヲ發シテ、多賀城ニ會ス、九年七道諸國ニ勅シテ、造甲ノ技ニ長スルモノヲ檢録シテ進奏セシメ、本紀十年五位以上並ニ國郡司ヲシテ、甲ヲ造ラシメ、又東海、東山二道ノ諸國ヲシテ、征箭三萬四千五百餘具ヲ作ラシメ、阪東諸國ニ令シテ、軍糧十二萬斛ヲ辨備セシム、本紀帝既ニ大ニ蝦夷ヲ討テ、屢、大臣ヲ

遣シ軍士ヲ簡練シ、戎器ヲ檢校シ、將師ヲ勉勵戒飾フル者甚至レリ、且前後徵發
 スル所ノ兵數、及弓箭糗糧ノ類、勝ケテ數フヘカラス、然レトモ將士逗撓シテ、戰
 功未タ舉ラス、是ヲ以テ益、兵備ヲ修メ、軍制ヲ釐シ、十三年大伴宿禰弟麻呂坂上
 大宿禰田村麻呂ヲ擧ケ、遂ニ虜酋ヲ擒斬シ、夷疆ヲ開拓シ、是ヨリ醜類迹ヲ遠サ
 ケ、蝦夷ノ患始テ熄ム、日本紀、日本後紀、類聚十四年太政官ノ奏ニ依リテ、壹岐
 對馬ヲ除ク外、邊要諸國ノ防人ヲ廢シ、兵士ヲ差シテ常戍ニ配ス、日本後紀、類聚十五
 年諸國ニ令シテ、武藝ノ衆ニ秀テタル者ヲ擧ケシム、類聚是歲詔シテ山城河内
 兩國ノ便所ヲ量リ、烽燧ヲ置カシメ、尋テ大和モ亦之ヲ置カシム、日本後紀、類聚十八
 年ニ至リ、諸國ノ烽候ヲ廢シ、唯太宰府管内ノミ、舊ニ依リテ之ヲ置ク、二十年勅
 シテ、左右京職ノ健兒ヲ廢シ、兵士各二百四十人ヲ置ク、初京師諸國ト共ニ健兒
 ナ置ク、然レトモ行幸ノ前驅、官城ノ護衛、管内ノ巡檢等、掌ル所諸國ト同シカラ
 サルヲ以テ、廢シテ舊制ニ依ル、二十一年長門國ハ太宰府ト境ヲ接シ、警虞邊要
 ノ諸國ト異ルコトナキヲ以テ、舊ニ依リ兵士五百人ヲ置カシム、日本後紀、類聚二十
 三年壹岐島防人ノ糧運漕艱苦ナルヲ以テ、太宰府管内六國ノ防人二十人ヲ廢
 シ、代フルニ島兵三百人ヲ以テシ、分番配置シテ給糧ニ勞セサラシム、二十四年
 公卿ノ奏ニ依リ、衛門府衛士府ノ衛士ヲ減ス、日本後紀平城帝大同二年近衛府ヲ左

近衛府ト稱シ、中衛府ヲ右近衛府ト稱ス、日本後紀、類聚三年衛門府ヲ廢シテ、左
 右衛士府ニ併セ、號シテ左右衛府ト曰フ、且ツ左右近衛府左右兵衛府各四百
 人ヲ減シテ三百人ト爲ス、日本後紀、類聚是ヨリ六衛府竟ニ永制ト爲ル、凡六衛兵數
 時々増減アリト雖モ、常額大率二千七百四十餘人ト云フ、延喜式嵯峨帝弘仁二年
 諸國ニ令シテ、武藝アル人年三十以下ナルヲ進メシメ、以テ左右近衛ニ補ス、又
 詔シテ左右衛士兵衛等舊數ニ復セシム、日本後紀散位大伴宿禰眞木麻呂、右兵庫頭
 佐伯宿禰金山奏シテ、衛士舊名ニ仍リ、改メテ衛門ト爲サシト請フ、之ニ從フ、日本後紀
 三年兵衛府異オアルモノ、府毎ニ四人ヲ撰ヒ、近衛ニ准シテ別祿ノ月糧ヲ給
 ス、左近衛大將藤原朝臣内麻呂、右近衛大將巨勢朝臣野足上表シテ曰ク、左近衛
 從前數ニ依リテ長直シ、職掌既ニ重ク、儀式亦殊ナリ、晝夜警衛シテ禁中ヲ離レ
 ス、常ニ宮省ニアリ、周ク出入ヲ知ル、大同中左右府トナリ、即チ長直ヲ停メ、一ニ
 番上ニ從フ、是ヨリ上番下番、遞ニ去リ遞ニ來リ、當番ノ直ヲ苟守シテ、永久ノ法
 ナ願ミス、坐作進退稍、其儀ヲ忘ル、臣等猥リニ庸虛ヲ以テ簪紱ニ預ルヲ得、職宿
 衛ヲ司リ、身禁兵ヲ統フ、請フ左右近衛府每府其驍勇ノモノ五十人ヲ簡ヒ、舊ニ
 依リテ長直シ、自餘ハ相副ヘ、又番上セシメント、之ヲ許ス、日本後紀十年左右京職ノ
 兵士ヲシテ仗ヲ帶セシム、日本後紀、類聚三代德宗初、檢非違使ヲ置キ、以テ京中ヲ巡檢シ、

犯盜ヲ逮捕拷決スルコトヲ掌ラシム、淳和帝ノ時ニ迨ヒテ職務漸ク繁ク、其屬
看督長ノ如キ、差科一ニ非ラス、間暇アルコトナシ、類聚三仁明帝立ツニ及ヒ、盜
賊漸ク起ルヲ以テ、勅シテ彈正臺檢非違使配置異ナリト雖トモ、而カモ亂彈皆
同シ、但犯人逃走スルニ至リテハ、彈正追捕ニ堪ヘス、今後犯人當ニ追捕スヘキ
モノアラハ、臺使相通シ、檢非違使ヲシテ追捕セシメ、立テ、永例ト爲サシム、日、撰
本是ヨリ檢非違使兵權ヲ執リ、朝制寢、陵遲セリ、然レトモ大柄未タ失ハス、六衛
皆備ハル、故ニ其内難アルモ、衛兵ヲ以テ之ヲ平ラケ、易キコト掌ヲ反スカ如シ、
職原抄、類聚三代格大意、文德帝齊衡二年、制シテ大和檢非違使伊勢朝臣諸繼ニ、三笏ヲ把ラシ
ム、天安元年攝津人岸田朝臣全繼ニ、兵仗ヲ帶シ、笏ヲ把ルヲ許シ、國中ノ非違ヲ
檢セシム、文德清和帝ノ時、上總、下總、能登、佐渡諸國、皆檢非違使ヲ置キ、並ニ劍ヲ
帶シ、笏ヲ把ラシム、武藏ノ如キハ、則テ每郡各一人ヲ置クニ至ル、出雲、伯耆、因幡
等國吏、皆帶劍ヲ許ス、貞觀七年制シテ諸衛府ノ仕丁衛士ノ日功長年錢二十文
ヲ收メシム、三代實錄、八年諸國ノ健兒才器ナク、非常ノ用ニ適セサルヲ以テ、國司ヲ
シテ之ヲ精選シ、試練ヲ加ヘシム、時ニ新羅西邊ヲ覬覦スルヲ以テ、屢命シテ太
宰山陰諸國ノ兵備ヲ修メシメ、十一年夷俘ヲ配置シテ警急ニ備ヘ、十二年太宰
府管内ヲシテ、烽ヲ舉ケ、燧ヲ焚キテ、以テ不虞ニ備ヘシム、三代實錄、平陸其他斥

候ヲ嚴ニシ、且勁弩ヲ調習シ、其師タルニ堪ヘタル者ヲ點定上進セシム、是後沿
海諸國皆爭ヒ奏請シテ、弩師ヲ置ク、三代實錄蓋シ當時弩ヲ以テ、防海第一ノ利器ト
爲セリ、本朝然レトモ貞觀ヨリ後武備漸ク弛ヒ、兵卒低弱ニシテ用ニ中ラス、群
盜隙ニ因リテ並ヒ起リ、大ニ海陸ノ患ヲ爲シ、朝廷屢勅ヲ下シ、諸國司ヲシテ案
捕セシム、國司皆苟且事ヲ處シ、驅逐ヲ務メス、即テ衛府ノ官人ヲ遣シ、逮捕セシ
ムルモ、亦復功ナシ、國司或ハ夷俘ヲ差シ、盜賊ヲ防備ス、而シテ夷俘兵ヲ弄シ、更
ニ驕暴ヲ恣ニシ、陽成帝ノ時ニ至リ、俘囚ノ患益起ル、三代實錄宇多帝寬平中、瀧口武
者ヲ置キ、武藝ヲ善クスル者ヲ以テ之ニ充ツ、西宮記、職原瀧口モ亦宿衛ノ兵ナ
リ、是ヨリ先キ東宮モ亦衛兵ヲ置キ、帶刀ト曰フ、並ニ源平諸氏ノ武士ヲ以テ之
ト爲ス、延喜式、職原初メ承和中衛府ノ舍人等橫濫稍甚シク、官吏ヲ凌辱シ、或ハ
市廛ニ雜居シ、恒ニ商賈ヲ惱シ、貞觀中ニ迨ヒ、府管モ亦多ク暴ヲ爲シ、人馬ヲ強
雇シ、或ハ騎者ヲ摔倒シ、行李ヲ斫墮ス、其舍人ニ至リテハ、士庶神宴ヲ設クル毎
ニ恣ニ其家ニ入り、酒食ヲ貪リ、被物ヲ責メ、恐喝強奪、群賊ニ異ナルナシ、朝廷屢
之ヲ禁スレトモ、止ムルコト能ハス、三代實錄、類聚且當時賣官行ハル、ヲ以テ、諸
國豪民等、半ハ六衛府舍人等ニ補シ、一タヒ府牒ヲ受ケ、即テ宿衛ト稱シ、田疇ヲ
橫占シ、正稅ヲ輸サス、或ハ黨類ヲ聚メ、府官ヲ陵轢シ、人其暴力ヲ憚リ、敢テ誰何

スルモノナシ、本朝文種、今昔物語、類聚三代格 醍醐帝延喜十四年、三善清行上書シテ曰ク、六衛府ノ舍人、結番護衛ヲ以テ務ト爲シ、當番ハ宿直シテ、他番ハ休沐ス、若シ機急アラハ、彼此ヲ論セス、皆宜シク奔赴スヘシ、然ルニ其舍人諸國ニ散落シ、或ハ千里郵驛ノ外、百日行程ノ地ニ在リ、豈ニ名ヲ門籍ヲ編シ、分番宿衛スルヲ得ンヤ、此皆部内ノ強豪、民間ノ兇暴ナルモノナリ、國司法ニ據リ罪ヲ勘フレハ、則テ駿奔シテ京ニ入り、貨賂ヲ行ヒ宿衛ヲ買ヒ、或ハ徒黨ヲ率テ劫シ、或ハ老拳ヲ奮テ官長ヲ撃ツ、其蠹害太甚シ、夫衛卒ヲ撰ヒ置クハ、以テ警急ニ備フルナリ、今京畿ヲ離レテ旬服ニ在リ、一旦緩急アラハ、將タ何ノ用フル所アラソ、實ニ是諸國ノ豺狼ニシテ、曾テ六軍ノ猛虎ニ非サルナリ、請フ諸衛府ノ舍人、既ニ已ニ充補セハ、本國ニ歸住スルヲ得サラシメン、若シ其歸ルモノハ、暇日ヲ限り、府牒ヲ取り、國衙ニ送り、限外留連スルコトヲ得サラシメン、其懈緩ニシテ還ラサル者ハ、國宰宜シク職ヲ解キ、狀ヲ錄シ本府ニ牒送スヘシ、又曰ク、檢非違使ハ、境内ノ姦濫ヲ糾シ、民間ノ邪惡ヲ禁スルヲ掌ル、則テ國宰ノ爪牙、兆庶ノ衝策ト謂フヘキナリ、而ルニ今皆本國百姓贖勞料ヲ納ムル者ヲ以テ之ト爲ス、徒ニ公俸ヲ費シテ、差役ニ堪ヘス、猶畫餅ノ食スヘカラサルカ如ク、木吏ノ言フ能ハサルカコトシ、請フ明法學生ヲ監試シテ此職ニ任シ、國中ノ追捕及斷罪一切之ニ委セン

ト、本朝文種 其言鑿々トシテ當日ノ病ニ中ル、延長五年ニ至リ延喜式成ル、其兵制モ亦舊法ニ遵ヒ之ヲ緣飾ス、凡近衛兵衛ハ、本府簡試シ、兵部省及ヒ式部ノ位子留省勳位弓馬ニ便習セル者ヲ奏聞シテ之ニ補ス、若蔭子孫ノ情願スル者亦之ニ準ス、其外考及白丁ノ異能アル者ハ、京職諸國狀ヲ具シテ官ニ申シ、官衛府ニ下シテ之ヲ試ミ、並ニ及第ヲ得ハ、勅シテ覆試セシメ、然ル後之ニ補ス、凡ソ武藝優長、志氣勇壯ニシテ死生ヲ顧ミス、一以テ百ニ當ルモノハ、號シテ異能ト爲シ、並ニ別祿ヲ給ス、近衛府番長八人、近衛六百人、駕輿丁百人、衛門府番長二人、門部一百人、兵衛府番長四人、兵衛四百人、凡衛士ノ交替ハ三年ヲ限トシ、其替人京ニ至ラハ、兵部身材強壯ニシテ用井ルヘキモノヲ試練シ、並ニ戎器ヲ閱シ、帶仗セシメテ二府ニ分配ス、其宮城門ヲ守リ及ヒ在京ノ非違ヲ檢校シ、行夜シテ人ヲ捉フル等ノ事、皆衛府之ヲ掌ル、凡軍殺ハ、國司勇健ナルモノヲ詮擬シテ之ニ補ス、其見任ノ少毅大毅ニ轉任シ、其身佹弱武藝ニ堪エサルモノハ、國司解任シ、狀ヲ具シ官ニ申シテ簿ヲ除カシム、其他健兒牧監射田器仗等ノ制、條令尤モ具ハル延喜式 然レトモ未タ行下スルニ及ハスシテ帝崩ス、初メ昌泰延喜ノ間ヨリ、京畿及ヒ諸國盜賊羣起シテ、或ハ守介ヲ殺ス、東國尤モ甚シ、朱雀帝ノ時ニ及ヒ、南海賊船多キコト千餘艘ニ至ル、遂ニ天慶ノ亂ヲ馴致ス、扶桑略記、日本紀略 朝廷乃テ參議藤

原忠文ヲ征討大將軍トシ、平將門ヲ討テ、右少將小野好古ヲ追捕使長官トシ、藤原純友ヲ討タシム。日本紀符ヲ東海東山ニ下シ、勇悍ノ士ヲ募リ、許スニ朱紫ノ官爵ヲ以テス、既ニシテ藤原秀郷平貞盛將門ヲ擊テ之ヲ斬リ、源經基又純友ヲ討シテ功アリ。扶桑略記、古事記、日本紀村上帝天曆四年、下總守藤原有行言ス、坂東諸國凶類甚衆ク、人ヲ殺シ物ヲ掠メ、日夜絶エス、請フ天慶九年ノ符ニ准シテ、國司押領使ヲ帶シ、且ツ隨身兵三十人ヲ給ハラント、之ヲ許ス、其後美作伯耆出雲等ノ諸國皆押領使ヲ置キ、部内ノ姦盜ヲ逮捕セシム、十年近江國言ス、國三道ヲ帶ヒ稱シテ要害ト爲ス、姦盜橫行シテ息マサルヲ以テ、故ニ前宰武藝ノ用ヰルヘキ者ヲ撰ヒ、請テ追捕使ト爲ス、而シテ其人或ハ死シ或ハ老タリ、今代リ補スヘキ者ヲ擇フニ、甲可公是茂忠廉ニシテ撓マス、文武用ヰルニ足ル、請フ先例ニ准シ、命シテ追捕使ト爲シ、以テ部内ヲ肅靜セント、之ヲ許ス。朝野群載冷泉帝以後、藤原氏外威ヲ以テ政ヲ執リ、驕侈ヲ事トシ、海内凋弊シ、羣盜益起リ、輦轂ノ下人ヲ戕ヒ物ヲ掠メ、或ハ白刃ヲ露シ、宮廷ニ入ルニ至ル、而シテ朝廷僅ニ檢非違使ニ命シ之ヲ索捕スルノヨ、日本紀、朝野群載、小右記、今昔物語圓融帝天延三年、諸國大ニ糧米ヲ輸サ、ルヲ以テ、衛府官人羣起シテ弓箭ヲ持テ、陽明門ヲ守リ之ヲ訴フ、乃テ勅シテ在京ノ國司ヲ召シ之ヲ裁決ス、貞元元年命シテ武備ヲ戒飾シ、諸衛ノ佐舍人及ヒ五位

以下ノ武勇ニ堪ヘタルモノヲシテ西京ノ盜賊ヲ索捕セシム、天曆ヨリ後、諸衛ノ舍人暴戾尤モ甚シク、院ノ下人及ヒ親王ノ家人ト爭鬪シ、或ハ群ヲナシテ橫行シ、凶惡制スヘカラス、日本紀天元五年ニ至リ、其橫溢已マス、任意出入スルヲ以テ、舍人ヲ加差シ、諸陣ニ宿直セシム、又檢非違使ニ勅シテ其不良ノ徒ヲ糾察セシム、小右記初メ律令ノ制、武官ノ外ハ兵仗ヲ帶スルヲ禁ス、貞觀中ヨリ往々之ヲ犯スモノアルヲ以テ之ヲ戒メ、村上帝亦之ヲ禁遏セシム、レトモ行ハレス、天延三年更ニ嚴禁ス、法曹至要抄華山帝ノ初メ、藤原義懷等輔翼ノ任ニ當リ、政頗ル嚴明ナリ、太宰府私ニ兵仗ヲ帶スルモノ、之ヲ聞キ懾服シ、復一人ノ禁ヲ犯スモノアルナシ、大鏡、江談抄明年衛府ノ官人瀧口帶刀等、懈怠闕直ニ坐シ、任ヲ奪ハレ、譴セラル、モ一條帝ノ時、衛府ノ官人瀧口帶刀等、懈怠闕直ニ坐シ、任ヲ奪ハレ、譴セラル、モノ甚タ衆シ、日本紀、小右記、外記、日記長和四年、勅シテ諸衛官人自今以後闕直三ニ至ルモノハ、重ク之ヲ罪セシム、小右記後一條帝寬仁三年、女眞九州ニ寇ス、太宰權帥藤原隆家兵備ヲ飾ヘ、要害ヲ守リ、拒戰シテ之ヲ却ク、小右記、朝野群載、大鏡是時天子垂拱シ、相家權ヲ專ラニシ、朝廷行フ所ノ武事、僅ニ競馬駒率騎射相撲等ノ類ニ過キス、公卿縉紳率ネ皆風流爛雅衽席ニ沈溺シ、兵務ヲ知ラス、衛兵ノ掌ル所、警衛扈從ニ止マルノミ、其恒例朝儀ノ間ニ當リ、呼名進退ノ儀容大ニ整フト雖トモ、然レト

モ兵威益衰ヘタリ、日本紀略、榮華物語、小右記、大書、初メ宰吏ノ子孫京師ヨリ徙リテ國郡ニ貫
 スルモノ、大率帝王神明ノ胄ニ係リ、其族編氓ニ同シカラス、號シテ住人ト爲ス、
 所謂諸國ノ武士即チ是ナリ、當時干戈ヲ執リ、王職ニ供スルモノ、衛府ノ官人ニ
 アラサレハ、則チ皆國郡ノ住人ナリ、大日本史、王政ノ衰ヘシヨリ、諸國ノ武士爭ヒテ
 莊園ヲ占メ、其土地ヲ有ス、其大ナルモノヲ大名ト曰ヒ、高家ト曰ヒ、小ナルモノ
 ナ小名ト曰ヒ、黨ト曰フ、皆其子弟僕隸ヲ養ヒテ私兵ト爲ス、之チ家子郎黨ト曰
 ヒ、或ハ家人ト稱ス、互ニ弓馬ニ仗リ雄長ヲ爭ヒ、權勢漸ク盛ナリ、而シテ源平二
 氏最モ強大ナリ、諸家系圖、源平盛衰記、源滿仲平良文ノ如キ皆郎黨數百人アリ、平維茂
 藤原諸任ト闘ヒ、徵發スル所ノ兵士三千人ニ至ル、今昔物語、源賴光卑官ニアル時、猶
 馬三十匹ヲ攝政兼家ニ遺ル、其兵馬ノ富此ノ如シ、日本紀略、而シテ相家常ニ之チ引
 テ己ノ爪牙ト爲シ、威福ヲ逞クシ、武將モ亦甘シテ之カ願使ニ從ヒ、藉テ以テ自
 ラ榮トス、古事談、大鏡、續古事談、故チ以テ公卿之チ輕慢シ、概ネ目シテ武者ト爲シ、與ニ齒
 スルチ屑シトセス、然レトモ變故アルニ至テハ、公卿ノ力辨スル能ハス、一切之
 ナ武士ニ委ス、小右記、源賴抄、古事談、今昔物語、而シテ源賴光賴義義家ノ如キ、皆驍勇絶倫
 騎射無雙ニシテ、事ニ遇ヒ險危ヲ顧ミス、叛賊ヲ討平シ、至ル所大功ヲ成ス、今昔物語、乃
 長元中、平忠常反ス、檢非違使平直方中原成道ヲ遣シテ之チ討ス、克メス、乃

チ賴信ニ勅ス、賴信坂東諸國ノ兵ヲ率井、討テ之チ平ク、日本紀略、當時所在ノ人
 民盜賊ヲ防備シ、及僧徒ノ忿訟スル者、皆武士ノ力ヲ藉リ以テ其事ヲ濟ス、而シ
 テ武士動スレハ輒武兵ヲ弄シ私闘ス、朝廷制スル能ハス、今昔物語、賴義相模守タル
 ニ及ヒ、坂東ノ武士多ク其門客ト爲リ、而シテ拒捍ノ徒モ亦之ニ服從スルコト
 奴僕ノ如シ、後冷泉帝ノ時、賴義安倍賴時ヲ征シ、義家清原武衡家衡ヲ討シ、前後
 十二年ニシテ之チ鎮平シ、大ニ恩威ヲ施シ、關東士民悉ク服ス、陸奥誌、建長三年、合戰記、今昔物語、
 故ニ諸國ノ百姓田畝公驗ヲ以テ義家ニ屬スルニ至ル、百鍊抄、義家嘗テ藤原賴宗
 ノ第二詣リ、碁ヲ圍ム、衆アリ賊ヲ逐フ、賊南庭ニ入ル、義家ノ從者呼テ曰、八幡公
 此ニアリト、賊乃チ刀ヲ投シテ縛ニ就ク、俄ニシテ郎黨數十人群至シ、賊ヲ擁シ
 テ去ル、十訓抄、左衛門尉平致經關白賴通ニ事フ、賴通命シテ僧ヲ三井寺ニ護送セ
 シム、致經胡籙ヲ負ヒ徒歩シテ從フ、俄ニシテ其郎黨馬ヲ牽キ弓箭ヲ帶シ、前後
 陸續トシテ至ル、寺ニ及フ比ヒ、衆數十人ニ至ル、今昔物語、藤原顯季嘗テ源義光ニ德
 アリ、其夜行スル毎ニ必ス兵卒來リ從フ、警衛甚ダ謹ム、之チ問ヘハ、乃チ義光ノ
 兵ナリ、當時武士自ラ家兵ヲ養ヒ、恒ニ心ヲ武備ニ用井ルコト此ノ如シ、古事談、十訓抄、
 故ニ平時武技ヲ鍛練シ、士氣ヲ養成スルヲ以テ、戰ニ臨ミ死ヲ輕ンシ、進ムチ知
 リテ退クチ知ラス、單騎接戰ノ功チ好ミ、家系及ヒ祖先ノ勳績威名ヲ誇稱シ、敵

手ヲ撰ヒ賤卒ト刃ヲ交フルヲ屑シトセス其兵法ハ概ネ孫吳ノ術韜略ノ書ヲ
學フ源義家ノ大江匡房ニ就キテ兵法ヲ學ヒ後三年ノ役ニ行雁ノ列ヲ亂ルヲ
見テ伏兵アルヲ察シタルノ類ナリ古今著聞集平家築城法ハ古代木ヲ聯ネテ
柵落ト爲セシカ中代戰亂多キニ及ヒ自ラ其工ヲ進メ樓櫓ヲ起シ壘塹ヲ設ケ
木戸ヲ作ルニ至ル日本紀唐書陸奧話記白河帝承曆三年延曆寺ノ僧徒群起シ
テ感神院ニ入り關ニ詣リ事ヲ訴ヘントス諸衛官人檢非違使ニ勅シテ之ヲ禦
カシム扶桑鳥羽帝天仁元年僧徒數千人神輿ヲ奉シ京ニ入ル勅シテ檢非違使
及ヒ源平ノ兵士數万ヲ遣ハシ之ヲ禦カシム當時僧徒暴惡已ニ甚シク朝廷ノ
處分稍意ニ滿タサルコトアレハ輒チ甲ヲ撰シ兵ヲ執リ關ニ詣リ強訴ス加之
盜賊滋起リ人ヲ殺シ物ヲ掠メ或ハ諸國ノ貢調ヲ奪フ朝廷檢非違使ヲ遣シ追
捕セシム然レトモ能ク禁遏スルナシ中右檢非違使承和ヨリ後漸ク兵權ヲ執
リ頗ル要職タリ類聚三代外威權ヲ專ニスルニ及ヒ其門族ニ非サルモノハ高
官ニ列スルヲ得ス大鏡榮故ニ權勢ヲ喜フ者或ハ檢非違使タラシコトヲ求ム
神皇正統記 是ニ至リ法皇政ヲ院中ニ聽キ乃チ專ラ檢非違使ヲ任用シ源平諸氏ノ
武士多ク之ニ當ル院宣應宣ヲ以テ天下ニ號令シ違フ者ハ罪違勅ニ準ス神皇
記中右記 是ニ於テ使廳ノ權大ニ起ル法皇又上下北面ヲ置キ材武ヲ撰用シ以

テ警衛ニ備フ應屢勅シテ諸國武士ノ源平二氏ニ屬スルヲ禁ス其意蓋シ兵
權ヲ收ムルニ在リ神皇正統記然レトモ其使廳ニ專任スルヲ以テ衛府彈正刑
部京職皆其職ヲ失ヒ舊制紊亂シ朝廷益衰ヘ大柄遂ニ武門ニ歸ス職原抄源氏宗族最モ多ク兵威既ニ盛ンナリ而シテ義家ノ子義親暴悍國郡ヲ剽掠
ス堀河帝嘉承二年因幡守平正盛勅ヲ奉シ討ケテ之ヲ斬ル功ヲ以テ但馬守ニ
遷リ其子弟皆衛府官ニ任セラル正盛法皇ニ事ヘ遽ニ寵擢セラル後屢追捕ヲ
以テ賞ヲ受ク崇徳帝ノ時ニ至リ其子忠盛海賊ヲ捕ヘテ功アリ内昇殿ヲ聽サ
ル平氏ノ興ル實ニ此ニ基ス中右是時ニ當リテ源平二氏蓋シ兩雄ト稱ス源平
保元ノ亂兩皇皆兩氏ニ依賴シ後白河帝源義朝平清盛ニ藉リテ以テ大ニ克
ツコトヲ獲タリ保元平治ノ亂清盛義朝ヲ滅シ悉ク源氏ノ宗族ヲ殲シ遂ニ太
政大臣ニ拜セラル是ニ於テ平氏大ニ興ル蓋シ身ヲ武臣ニ起シ極官ニ昇ルモ
ノ清盛ヲ以テ始メトス其子重盛宗盛左右近衛大將ニ列シ當時武官ヲ帶スル
者皆其子弟門族ニアラサルハナシ重盛寬仁ニシテ衆ヲ得嘗テ其父ノ暴行ヲ
止メント欲シ權ニ兵士ヲ徵ス頃刻ニシテ集マルモノ數萬人ニ及フト云フ平
物語源平然レトモ清盛ノ晚年其兵衰フ源平蓋シ當時海内無事平氏ノ武士等縉
紳遊惰ノ風ニ感染シ武事ヲ講セサルニ因ル安徳帝治承四年源賴朝及ヒ行家

義仲等以仁王ノ令旨ヲ奉シ兵ヲ起シ平氏ヲ滅サント圖ル坂東ノ將士悉ク賴朝ニ歸シ數月ヲ出テスシテ其衆二十萬人ニ及フ清盛孫惟盛ヲ遣ハシテ之ヲ討メシム戰ハスシテ逃ケ還ル既ニシテ清盛薨ス宗盛更ニ兵十餘萬ヲ發シテ義仲ヲ撃テ大ニ敗ル義仲五萬人ヲ以テ京師ニ入ル宗盛乘輿ヲ奉シテ西ニ奔ル既ニシテ義仲京中ヲ暴掠ス後白河法皇檢非違使平知康ヲシテ之ヲ討メシム其兵上下北面ヲ除ク外募ニ應スルモノハ唯延曆園城二寺ノ僧及ヒ京師無賴ノ徒ノミ故ニ竟ニ大ニ敗呶ス賴朝乃テ弟範賴義經ヲ遣ハシ義仲ヲ討シ之ヲ斬ル尋テ平氏ヲ討メシム義經最モ善ク兵ヲ用井遂ニ平氏ヲ西海ニ殲ス平源盛表記、平家物語、東鑑後鳥羽帝文治元年賴朝奏請シテ諸國ニ守護地頭ヲ置キ家人ヲ以テ之ニ補シ自ラ六十六國總追捕使ト爲リ諸國段毎ニ糧米五升ヲ賦課ス是ニ於テ兵馬ノ權盡ク賴朝ニ歸シ天下ノ形勢一變ス東鑑、神皇正統記、太平記賴朝乃テ幕府ヲ鎌倉ニ開キ侍所ヲ置キ別當ヲ以テ長官ト爲シ軍機ニ參預シ將士ノ黜陟ヲ掌ラシム東鑑、武家名目抄、職官志稿初メ朝廷諸國ノ武士ヲ徵シ京師ニ宿衛セシメ大番ト稱ス交替三年ヲ以テ限トナス武士之ニ苦シム賴朝兵權ヲ執ルニ及ヒテ其腹心ヲ遣ハシ大番ヲ徵發シ京師ヲ護衛セシメ因テ奏請シテ三年ヲ減シテ六月ト爲ス武士皆之ヲ德トス東鑑、承久記檢非違使ノ權此ニ至リテ竟ニ衰フ其罪人ヲ追

捕スルニ當リテ罪人詭キテ武士ト稱シ以テ之ヲ嚇スレハ則テ使廳手ヲ束ネテ敢テ誰何スルコトナシ其時人ニ輕ンセラルコト此ノ如シ而シテ武人ノ威望益熾ナリ承久記、應永抄、增補後鳥羽上皇關東ヲ滅シ以テ大權ヲ收メント欲シ始メテ西面ノ武士ヲ置キ騎射ニ長シ材力アルモノヲ選ヒ之ヲ用フ承久記、增補仲恭帝承久三年上皇遂ニ兵ヲ擧ケ以テ北條義時ヲ討ス然レトモ兵權既ニ失ス故ニ官軍ノ徵ニ赴クモノ六萬人ニ過キス而シテ義時ノ子泰時單騎鎌倉ヲ發スレハ則テ關東ノ兵士雲合響應シテ十九萬人ノ多キニ至ル故ヲ以テ官軍一敗三帝播遷公卿戮辱セラルヲ致ス東鑑、承久記、增補泰時因テ京師ニ留リ府ヲ六波羅ニ開キ大番ヲシテ禁内ヲ守護セシメ鎮西ノ武士ヲシテ箒屋ヲ守ラシム箒屋トハ兵士ヲ巷街ノ要所ニ配置シ以テ京中ヲ警備セシメ夜ハ則テ箒火ヲ燒キ以テ宿衛ス故ニ此稱アリ東鑑、武家名目抄四條帝文曆元年大番士ヲ結番シテ十二番トナシ北條九代記二年大番士ニ令シテ交替遲緩ヲ致シ其當番ニ遲ルコト一月ナル者ハ更ニ宿衛二月ヲ増シテ之ヲ償ハシム貞永式目抄後深草帝寶治元年大番ノ交直六月ヲ減シテ三月ト爲ス東鑑、龜山帝文永五年元賊三萬對馬壹岐太宰府ニ寇シ後屢使ヲ遣シテ通交ヲ求ム、關東評定傳、北條九代記是ニ於テ幕府九州ニ探題ヲ置キ軍政ヲ總督シ帝王年記鎮西大番ノ士ヲ遣歸シ以テ元寇ニ備ヘ在京ノ武士ヲシ

テ之ニ代ラシム、北條九代記 是ヨリ後鎮西武士ノ大番ヲ免除ス、貞永式目抄 弘安四年、胡元大舉シテ太宰府ヲ犯ス、鎮西擊テ之ヲ破リ、千餘人ヲ殺獲ス、會風濤大ニ起リ、夷艦覆没ス、我兵勢ニ乘シ掩撃シテ之ヲ殲ス、北條九代記、關東評定傳、八幡忠實傳 後醍醐帝北條氏ヲ滅シ、中興ノ業ヲ成スニ迫ヒ、軍令配置觀ルヘキモノアリ、皇子成良親王ヲ征夷大將軍ニ任シ、鎌倉ニ置キ、輔クルニ足利氏ヲ以テシ、又義良親王ヲ陸奥ニ遣ハシ、北畠顯家ヲ鎮守府將軍トナシ、結城氏ト共ニ之ヲ輔佐セシメ、京師ニハ則テ武者所ヲ置キ、衛護ニ充テ、結番シテ六隊トナシ、新田氏ノ族ヲ以テ頭人ニ補シ、諸國ニ國司及ヒ守護地頭ヲ置キ、廷臣ヲ以テ國司ト爲シ、武臣ヲ以テ守護ニ補シ、行政兵備ヲ兼掌セシム、建武年間記、梅松論、神皇正統記、太平記、中興傳 然レトモ政令乖戾、内言多ク行ハレ、其武士ヲ遇スル大ニ人意ニ慊セス、故ニ藤原藤房論シテ曰ク、元弘ノ亂、天下ノ兵士爭ヒテ官軍ニ屬スルモノハ他ナシ、斬滅ノ功ヲ以テ封土ノ賞ヲ得ント欲セルナリ、今公家被官ノ外、未タ恩賚ヲ被フス、血戰ノ士遂ニ訴牒ヲ捨テ國ニ歸ルモノ、實ニ忠功ノ賞ナク、政事ノ公ナラサルヲ恨ミテナリ、且ツ守護權ヲ失ヒ、在廳ノ官人等横ニ威福ヲ爲ス、所謂將軍ノ家人ハ源賴朝ヨリ世々相承ケ、武士ノ榮號ト爲ス、今悉ク之ヲ停メ、大名高家編民ニ儕輩セラル、其咨嗟怨憤スルモノ幾千萬人ナルヲ知ラス、今若シ武將衆望ヲ負フモノ、時政ヲ睥

睨シ、隙ニ乘シテ兵ヲ起サハ、則テ天下ノ士簞食壺漿シテ之ニ赴カント、猶水ノ卑キニ就クカ如クナラント、既ニシテ足利尊氏反シ、天下ノ武士靡然トシテ之ニ從フ、皆藤房ノ言ノ如シ、太平記 乃チ皇子宗良親王ヲ征東大將軍ニ、懷良親王ヲ征西將軍ニ任シ、以テ之ヲ討ス、李花集、太平記 當時諸皇子皆材武、能ク軍ヲ行ル、新田義貞大族ヲ以テ、其兵最モ強ク、楠正成兵ヲ用井ル最モ紀律アリ、子弟王ニ勤メ、世々忠烈ヲ墜サス、其他忠臣義士爭ヒテ賊ニ抗シ、骸ヲ草澤ニ横フ、然レトモ時運已ニ去リ、復如何トモナスヘカラス、尊氏既ニ逆ヲ爲シ、群下統率スヘカラス、故ニ北朝ヲ擁立シ、以テ其志ヲ逞クス、是ヨリ後、悖逆相踵キ、海内大ニ亂ル、太平記 後小松帝ニ及ヒ、南北合一シ、征夷大將軍足利義滿強族山名氏清大内義弘等ヲ討滅シ、以テ倔強ノ徒ヲ懾伏ス、應永記、明德記、賴之記、難太平記 是ニ於テ軍政ヲ修飾シ、紀律ヲ嚴肅ニシ、將軍親ヲ軍國ノ政ヲ總攝シ、侍所兵刑ノ事ヲ管シ、諸國ニ守護地頭ヲ置ク、鎌倉ノ時ノ如シ、而シテ管領以下皆守護ヲ帶シテ之ヲ世襲シ、天下事アルニ當リテハ、皆徵發ニ應シ、以テ征討ニ從フ、武家名目抄、職官志稿 應仁ノ亂、諸國ノ守護各部下ノ兵ヲ率井テ、東西兩陣ニ屬ス、東陣十六萬人、西陣十一萬人ト號ス、戰鬪十一年ノ久シキニ涉リ、應仁記 其禍延テ天下ニ及ヒ、是ヨリ諸國ノ大名各割據シテ兵ヲ交ヘ、殆ト寧日ナシ、足利季世記 故ニ士民益、武技ヲ講究シ、騎射、搏力、弄槍ノ諸術

益精妙ヲ加ヘ、遂ニ各流派ヲ立テ以テ其技ヲ傳フ、又諸國ヲ歷遊シテ武技ヲ售
 リ、勝負ヲ試ミテ、師弟ノ約ヲナス、稱シテ武者修行ト謂フ、其徒甚タ衆シ、尾記、武
 藝小傳、後奈良帝天文十二年、葡萄牙始メテ鳥銃ヲ傳フ、其後鳥銃諸國ニ傳播シ、
 將軍義輝ノ如キ、自ヲ硝藥ノ法ヲ研究シ、工ニ命シ銃ヲ製セシム、尋テ大砲モ亦
 傳ハル、南浦集、北條九代記、甲
 陽軍鑑、史散、顯實考、豐、是ニ於テ築城軍陣ノ法モ亦大ニ變ス、織田信長ノ
 安土ニ城クヤ、石ヲ疊ミ基ヲ高クシ、上ニ五層ノ樓櫓ヲ建テ、高大壯麗ヲ極ム、之
 ナ天守ト謂フ、松永久秀志貴山ノ城ニ多聞ヲ築ク、多聞トハ城上ノ長屋ニシテ
 以テ敵ヲ防遏スヘシ、安土日記、信長
 記、外交志稿、其後諸國之ニ倣フ、凡ソ城堡ニハ、本丸、出丸、
 根城、附城等ヲ設ケ、防勢守備ト爲ス、其法多ク西洋ニ基ケリ、渡輪軍記、根井
 日記、宗長手記、織田
 氏ノ軍制ハ、軍奉行、目付、使番、小姓衆、馬廻衆、弓衆、鐵砲衆、走衆等アリ、水軍ニ船奉
 行アリ、而シテ守城ノ職ハ城代、城番アリ、安土日記、信長
 記、武家名目抄、信長記、總見記、軍規嚴肅ニシテ、向フ所
 功アリ、然レトモ事業未タ成ヲス、半途ニシテ殞ル、信長記、總見記、後陽成帝天正十五年、
 豐臣秀吉已ニ關白ト爲リ、大權ヲ執ル、三十七國ノ兵二十餘萬人ヲ發シテ、島津
 義久ヲ九州ニ討ス、十八年諸道ノ兵二十六萬人ヲ以テ、北條氏政ヲ相模ニ攻メ、
 之ヲ滅シ、勢ニ乘シテ奥羽ヲ服ス、是ニ於テ海内始メテ一統ス、秀吉傳、太閤記、其軍政ハ
 大老アリ奉行アリテ、以テ軍國ノ庶務ヲ總管シ、黃母衣衆七隊ニ分ケテ、以テ親

兵ト爲ス、其出征スルヤ、更ニ軍奉行、目付、鐵砲頭、鐵砲衆、弓頭、弓衆、步行衆等ヲ命
 シ、水軍ニハ海賊衆、船奉行等ヲ置キ、輜重ニハ兵糧奉行、小荷駄奉行等ヲ命ス、太閤記、天正記、清正記、一編
 家記、九月記、紀州戰、向記、文祿元年、秀吉諸將ヲ遣ハシテ朝鮮ヲ征ス、本營ヲ肥前
 國名護屋ニ置キ、自ヲ臨ミテ軍事ヲ指揮ス、前備、後備、弓鐵砲衆、馬廻衆等十萬餘
 人之ニ從フ、浮田秀家ヲ總督トシ、増田長盛、石田三成、大谷吉隆ヲ參謀トナシ、加
 藤清正、小西行長之カ先鋒タリ、陸兵ヲ分ケテ八軍トナシ、別ニ水軍ヲ置キ、九鬼
 嘉隆、藤堂高虎等ヲシテ之ヲ將トシ、全軍合セテ二十萬餘人、軍容ノ盛ナル前
 古未タ曾テアラサル所ナリ、其兵艦ハ常陸ヨリ九州ニ至リ、秋田ヨリ中國ニ至
 ル、沿海諸國十萬石毎ニ大艦二艘ヲ課シ、海濱百戸毎ニ水夫十人ヲ徵シ、兵士ハ
 四國九州ハ一萬石毎ニ六百人、中國紀伊ハ五百人、五畿内ハ四百人、江尾、濃、勢ハ
 三百五十人、駿、遠、參、豆ハ三百人、伊豆以東ハ二百人、若狹、能登ノ間三百人、越後、出
 羽ハ二百人ヲ課シ、之ヲ徵發ス、太閤
 記、諸軍海ヲ涉リ、累戰シテ朝鮮ノ諸城ヲ陷レ、
 屢、明ノ援兵ヲ敗ル、秀吉薨シ、我兵皆罷メ還ル、秀吉傳、太閤記、慶長五年、關原ノ役、東西ノ
 兵幾ト三十萬人、旗鼓相當リ、格闘血戰、雌雄ヲ兩陣ノ間ニ決ス、我國ノ兵事此ニ
 於テ盛ンナリトス、關原
 記、德川家康已ニ征夷大將軍ト爲リ、軍國ノ諸政ヲ總攬シ、
 其子秀忠職ヲ繼キ、後水尾帝慶長十九年、天下ノ兵ヲ擧ケ、豐臣秀賴ヲ大阪城ニ

攻メ、明年再ヒ攻メテ、竟ニ豊臣氏ヲ滅ス。徳川御實記、大三川志、是ニ於テ二條城ニ大番二隊ヲ置キ、毎年四月交替シテ京畿ヲ警備セシム。明氏傳、元和元年、家康、武家ノ制法十三條ヲ定メ、新ニ城郭ヲ築クヲ禁シ、其居城ヲ修補スルモノト雖トモ必ス之ヲ稟請セシム。武家殿制、凡ソ封邑万石以下ヲ旗下ト曰ヒ、幕府直隸ノ士トナス、萬石以上ヲ大名ト曰フ、皆一國若シクハ一城ヲ領ス、之ヲ分ケテ譜代外様ノ二ト爲ス、其軍制將軍出征スレハ、大名皆之ニ從フ、老中其指揮ニ任シ、若年寄旗下ニ將トシ、大番頭之カ先鋒トナリ、先手弓銃頭之ニ屬ス、而シテ書院番、小性組、新番、小十人歩士以テ親衛トナシ、百人組、持弓、持筒頭之ニ屬ス、將軍事アレハ、老中或ハ若年寄ニ命シ代リテ出征セシム、稱シテ目代ト謂フ、老中ハ大目付之ヲ監シ、若年寄ハ目付之ヲ監ス、元和二年、軍役ヲ定メ、東武、寛永十一年、更ニ之ヲ改ム、其制十萬石ニ百五十騎、鐵砲三百五十挺、鎗百五十本、弓六十挺、旗二十本ヲ出サシメ、以下之ニ准シテ差アリ、十二年、將軍家光、武家ノ法制ヲ改定シ、五百石以上ノ大船ヲ造ルヲ禁ス、類典、當時武技漸ク徒法ニ傾キ、兵學ニ甲州流、越後流、山鹿流等アリ、射術ニ小笠原、日置、吉田等ノ諸流アリ、其他馭馬、搏力、弄槍、柔術、砲術等、流派ノ多キ勝ケテ數フヘカラス、然レトモ其法益密ニシテ其實益亡フ、武家小傳、式術、流、嬉遊笑覽、正徳享保ノ際、將軍吉宗、諸士ヲシテ馭馬ノ法ヲ蘭人ニ學ハシ

メ、又和蘭ニ命シテ大砲數門ヲ鑄造セシメ、光格帝ノ時、魯西亞屢蝦夷ヲ抄掠ス、是ニ於テ幕府ノ閣老松平定信、邊海防衛ノ事ヲ議ス、陸軍、時ニ仙臺ノ人林子平外夷窺視ノ念ヲ察シ、其邊海ニ寇スルヲ憂ヒ、海國兵談ヲ著ハン、大ニ軍防ヲ論シ、切ニ舊法陳套已ニ用ヲ爲サス、海外ノ大勢ヲ察シ、兵制ヲ釐革セサルヘカラサルヲ述フ、幕府省セス、反テ譎張幻ヲ爲スモノトシ、之ヲ禁錮シ、其身ヲ終フ、兵談、事實、編、軒、偶、記、仁孝帝ノ時、長崎ノ人高島四郎太夫、火技ヲ研究シ、蘭人ニ就キ砲術ヲ學ヒ、大ニ洋式ヲ唱フ、秋帆、先、生、是ヨリ先キ、幕府田付井上二流ノ砲術ヲ用井、二氏ノ子孫世々之ヲ修ム、明氏傳、是ニ至リテ旗下江川太郎左衛門ニ命シ、四郎太夫ニ就キテ之ヲ傳習セシム、秋帆、先、生、是時ニ當リテ洋艦屢來航シ、沿海頻リニ警シム、是ニ於テ幕府稍意ヲ海防ニ留ムルニ至レリ、嘉永二年、特ニ五島盛成松前爲吉ヲシテ領内肥前五島、蝦夷松前ニ新城ヲ築カシム、類典、六年、亞米利加ノ軍艦浦賀ニ來リ、強ヒテ交通ヲ請フ、是ニ於テ天下駭然、海防ノ議ヲ獻スルモノ陸續トシテ出ツ、幕府モ亦兵制ノ遂ニ改メサルヘカラサルヲ覺リ、始メテ大船製造ノ禁ヲ解ク、製艦ノ説是ヨリ大ニ起ル、是歲江戸品川海ニ砲臺十一所ヲ築キ、後大阪、安治、木津ノ兩川口及ヒ箱館、類典、紀伊ノ加田、淡路ノ由良、播磨ノ明石、肥前ノ長崎ニ築ク、又旗下ノ士ニ命シテ甲仗ヲ備ヘシメ、水、

明治年 大名ヲシテ大砲ヲ造ラシム、明年ニ至ルマテ其鑄造スル所千三百七十
四門ニ及ヘリト云フ、陸軍 歴史 安政元年軍艦及ヒ船舶ノ旗章ヲ定メテ日章ヲ用井
シム、海軍 歴史、嘉永明治 歴史 是年魯西亞ノ兵艦攝津ノ海濱ニ突入シ、沿岸頗ル戒嚴
ス、乃チ近江彦根藩主井伊直弼ニ命シ、京師ヲ警備セシメ、本能寺ニ屯セシム、小濱
郡山二藩ノ兵ヲ以テ之ニ屬シ、篠山、淀、膳所、高槻ノ諸藩ヲシテ京都ノ七口ヲ警
守セシム、嘉永明治年 同 陸、近事記 帝深ク外患ヲ憂ヒ、常ニ意ヲ邊防ニ用井、勅シテ諸國寺
院ノ梵鐘ヲ以テ大砲小銃ヲ鑄造シ、沿海樞要ノ地ニ配シ、不虞ニ備ヘシム、實本 記
然レトモ知恩院輪王寺ノ兩宮之ヲ峻拒セシナリ、行フコトヲ果サス、平太 表、嘉永明 治年間 同
二年諸司代脇坂安宅奏請シテ、初メテ兵ヲ嵯峨野ニ調練ス、尋テ彦根
小濱郡山ノ諸衛モ亦之ニ倣フ、後以テ例ト爲ス、今日抄、近 事記 五年幕府諸侯ニ命シ
テ寨ヲ沓掛、八幡、鷹峰ニ起シ、又武庫、大阪、堺、津等ノ要地ヲ守ラシメ、以テ益京師
ノ警備ヲ固クス、抄、今日 是時攘夷ノ說盛ニ起リ、幕府モ亦意ヲ武備ニ用井、軍制ノ
釐革ヲ務メ、江戸ニ講武所軍艦教授所、練兵所等ヲ設ケ、軍艦數隻ヲ購入シ、幕臣
藩臣ノ强健ナルモノヲ撰ヒ、蘭人ニ就キテ操練ノ術ヲ傳習セシメ、更ニ學生ヲ
西洋ニ派シ、以テ海軍ノ兵法ヲ學ハシム、文久二年ニ至リ、始メテ陸軍海軍ヲ置
キ、總裁ヲ補シ、陸軍ハ步騎砲ノ三兵ヲ以テ之ヲ編制シ、皆銃隊トナシ、一ニ洋式

ニ摸ス、凡ソ兵士八年十七以上四十五以下ヲ採リ、五年ヲ期シ役ニ就カシム、其
他改革スル所甚タ多シ、海軍 歴史、陸軍 歴史、嘉永明治年間 同 是ヨリ先キ、兵學者流大抵孫吳ニ本
ツキ、其兵理ニ於ケル頗ル見ルヘキカ如シト雖トモ、行軍作戰ノ法、器械甲兵ノ
製ニ至リテハ、舊套ヲ株守シ、概チ兒戲ニ同シ、武備小傳、武 術 流傳 此ニ於テ實用ヲ尙ヒ、
時宜ニ合シ、兵制一變ス、明治昭代陸海軍ノ旺盛實ニ此ニ基ス、海軍 歴史、陸軍 歴史、是歲京 師ニ守護職ヲ置キ、會津藩主松平容保ヲ以テ之ニ補ス、昭 治元年 同 三年七月、容
保兵ヲ宮城門外ニ練ス、帝雨ヲ犯シ親臨シテ之ヲ觀ル、時ニ外患日ニ深ク、跋扈
請要至ラサル所ナシ、朝廷屢、攘夷ノ議ヲ下シ、天下ノ志士憤懣シ、身ヲ國事ニ委
スルモノ多シ、然レトモ幕府邊巡外、夷ヲ懼レ、事ヲ發スルアタハス、已ニシテ癸
亥ノ變アリ、甲子ノ亂アリ、京師騷擾ス、尋テ幕府征長ノ師ヲ起シ、諸藩ヲシテ赴
キ伐タシム、此時長兵已ニ洋式ニ倣ヒ、軍制稍備ハル、是ヲ以テ討兵頻リニ敗シ、
遂ニ功ヲ奏スルアタハスシテ罷ム、幕府 紀事 慶應三年、將軍德川慶喜大政ヲ奉還シ、
是ヨリ軍國ノ政朝廷ヨリ出ツ、明治元年正月慶喜入京ス、會前驅會津桑名二藩
ノ兵薩長二藩ノ兵ト戰フ、敗レテ慶喜以下關東ニ奔ル、是ニ於テ勅シテ大ニ征
討ノ師ヲ興シ、有栖川熾仁親王ヲ以テ征東大總督ト爲シ、錦旗節刀ヲ賜ヒ、尋テ
車駕親征シテ大阪ニ次ス、慶喜乃チ降ヲ請ヒ、奧羽繼キテ平ヲク、初メ文久元治

ノ際、勅シテ兵ヲ諸藩ニ徵シ、輦下ニ置キ、國事係三條實美ニ命シ之ヲ管セシメ、
稱シテ親兵ト曰フ、延元以來五百年、此ニ至リテ朝廷徵兵ヲ置ク、然レトモ數年
ナラスシテ勅シテ之ヲ罷ム、是ヲ以テ戊辰ノ役、皆諸藩ノ兵ヲ用フ、王政維新諸
藩版籍ヲ奉還スルニ及ヒ、勅シテ士ノ常職ヲ解ク、中世軍團ノ制廢シ、武門武士
初メテ起ル、爾來七八百年、武ヲ以テ業ト爲セシモノ、一朝悉ク廢セラレ、是ニ於
テ兵制大ニ變ス、明治史要、嘉永、明治年間條 初メ軍防事務官ヲ置キ、以テ海陸ノ軍政ヲ掌ラ
シメ、後改テ軍務官ト稱シ、又兵部省ト改メ、又分ナテ陸軍海軍ノ二省ト爲ス、徵
兵ノ法モ亦屢更正アリ、國民ヲ舉ケテ皆服役ノ義務ヲ帶ハシム、其編制、兵式、器
械、服裝ノ如キ、概ネ歐米ノ法ヲ參斟シ、其他陸海軍ノ學校製造所等ノ設ケ備ハ
ラサルナク、兵制益整ヒ、武威大ニ振フ、明治史要、法令、全書、國勢一覽

平安通志卷之二十三

平安通志卷之二十四

湯本文彦等編

第二編

禮儀志

平安朝廷ノ儀制禮文ハ、大津寧樂ノ朝廷ノ制定ニ準由セリ、嵯峨帝弘仁中内裏
式ヲ定メ、又弘仁貞觀、延喜三代各儀式ノ撰定アリ、此ニ及ヒ朝廷ノ儀制禮文益
備ハリ、揖讓ノ禮、進退ノ儀、鋪設裝飾ノ節文ニ至ルマテ、粲然觀ルヘシ、蓋シ我朝
ノ禮、此ニ於テ盛ナリトス、其後文物益華ニ、式法愈密ニシテ、漸ク實ヲ棄テ、華
ニ就クノ弊ヲ生シ、本ヲ忘レ末ヲ逐フノ憾多シ、三代撰スル所ノ儀式ヲ見テ之
ヲ知ルヘシ、是ヨリ故家名族家々其式ヲ傳ヘ、一種ノ故實ヲ作シ、舊例故格、株守
變セス、以テ各、其一家ノ書ヲ傳フ、朝廷ノ大儀ハ、一家ノ私乘ニ存スル勢トナレ
リ、此間ニ及ヒ佛法益盛ニ、陰陽家流亦大ニ其力ヲ逞クシ、經綸ノ大業ヲ後ニシ、
唯禮式ノ末節ヲ事トシ、祈禳禁忌ヲ以テ禮ノ主要トシ、竟ニ其大本ヲ喪フ、蓋シ
朝廷ノ大禮ハ、登極ノ禮、大嘗ノ典、及ヒ元朔拜賀ノ式ヲ最トシ、年中ノ恒例、臨時
ノ儀式、其目誠ニ多シ、王政衰微ニ及ヒテモ、猶登極ノ禮ハ、必ス之ヲ大極殿ニ行
ヒ、大故アルニアラサレハ、之ヲ廢スルコトナシ、大極殿已ニ廢スルニ及ヒテハ、

太政官廳ニ行ヒ、官廳亦廢スルニ及ヒ、紫宸殿ニ於テ之ヲ行ヒ、足利氏ノ季世、王室式微、供御殆ト乏シキノ時ニ當リテモ、猶百万經營、必ス此式ヲ修メラレタリ、順德帝躬ヲ禁祕抄ヲ撰シ、朝廷ノ事ヲ叙シ、後醍醐帝ハ建武年中行事ヲ作り、廢典ヲ修舉セシメラル、王室典禮ヲ重ンセラル、ノ旨ヲ見ルヘシ、徳川氏ノ時ニ及ヒ、廢ヲ興シ絶ヲ繼キ、頗ル修舉スル所アリト雖トモ、虛文徒禮ニ過キスシテ、所謂告朔ノ餼羊ニ止マルノミ、此時後水尾帝英明復古ノ志アリ、徳川氏ノ方ニ盛ナル、勢如何トモスヘカラス、因リテ年中行事ヲ著ハシ、其事ヲ記シ、且ツ曰ク、徳川將軍撥亂反正、朝廷ヲ興復ス、然レトモ之ヲ寬正ノ時ニ比スレハ、猶及ハサルコト遠シ、則テ舊儀ノ存スル其レ幾何ソヤト、以テ叡旨ノ在ル所ト、幕府ノ興復セシ程度トヲ察スヘシ、其後水戸義公禮儀類典ヲ撰シ、之ヲ朝廷ニ獻スルニ及ヒ、古來ノ禮文燦然トシテ考フヘシ、王政維新ニ及ヒ、時ニ因リ宜ヲ制シ、儀式頗ル革マリ、古來ノ制ニヨル者アリ、一時ノ宜ニ適スル者アリ、我朝ノ禮式此ニ於テ一變セリ、武家ノ禮ハ、鎌倉北條已ニ草定スト雖トモ、其式未タ備ハラヌ、足利氏ニ及ヒ、伊勢小笠原二氏ニ命シ、古今ヲ折シ、武家禮法ヲ作ラシム、武禮ヲ主トシ、其他五禮ニ至ルマテ備ハラサルナシ、其說傳ヘテ今ニ至レリ、其音樂舞曲ハ、太古ニ始マリ、歌詠ト同シク行ハレタリ、三韓ヲ服シ、隋唐ニ通スルニ及ヒ、彼

樂曲ヲ取リテ之ヲ用非、音樂ノ道大ニ開ク、是ニ於テ古樂アリ、新樂アリ、外國ノ樂アリ、其類甚多シ、是ヨリ歷朝相仍リ、更ニ新曲ヲ製シ之ヲ用ユ、乾綱不振ヨリ、音樂ハ播紳ノ專習トナリ、世々其譜ヲ傳ヘテ、以テ大事トナセリ、後世俗曲起リ、里謠行ハレ、雅俗ニ兩分シ、以テ今日ニ至レリ、維新以來、教育ノ上ニ音樂ヲ加ヘ、西洋ノ樂譜ヲ以テ我國謠ニ合シ、以テ子弟ヲ教養スルニ至ル、又軍樂アリ、西洋ノ軍樂ヲ取リ之ヲ用ユ、然レトモ朝廷ノ大禮ニハ、雅樂ヲ奏スル猶古制ノ如シト云フ、

我國禮儀ニ貴フ所ノ者ハ、祭祀ヨリ重キハナシ、初メ天照太神ノ天神ニ事フルヤ、親シク神衣ヲ織リ、新穀ヲ供シ、祭祀ノ禮是ヨリ起ル、事ハ祭祀志ニ詳ナリ、而シテ其餘宮室衣服宴饗朝會儀衛ノ制モ、亦皆源神代ニ起リ、神武帝ニ至リテ、元正朝賀即位ノ禮、立皇后立太子ノ制定マレリ、日本書紀、古語拾遺、古事記、舊事本紀、公事根本、應神帝ヨリ以降、文教日ニ興リ、朝廷ノ儀輿服ノ制、蓋シ必ス沿革アリシナラン、而シテ古史能ク詳ニスルナシ、推古帝ノ時始メテ朝禮ヲ改制ス、日本書紀、厩戸皇太子政ヲ輔ケ、始メテ聘ヲ隋國ニ通シ、學生ヲ遣ハシ、留學セシムルコト、唐ニ至リテ絶エス、日本書紀、是後朝廷多ク隋唐ノ禮ヲ採用シ、古俗漸ク變ス、孝德帝大化ノ革新ヲ行ヒ、日本書紀、天智帝更ニ禮儀ヲ制定シ、德風集、大凡ソ即位賀正ノ諸禮皆著シテ承

制ト爲ス本紀日天武帝十年詔シテ禮儀言語法ヲ定メ、跪禮匍匐禮ヲ停メテ立禮
 ナ行ヒ、十二年百僚ニ詔シテ進退威儀ヲ肆ハシム日本書紀文武帝二年朝儀ヲ改メ
 慶雲元年復跪伏ノ禮ヲ停ム、初メ帝令ヲ定メ本紀日朝廷ノ禮儀、皆式部ニ屬ス、婚
 姻、生死、祥瑞、喪葬等ノ事ハ、治部之ヲ領ス、又内禮司ヲ置キ、宮内ノ禮儀ヲ掌ラシ
 ム、凡ソ至尊ノ名號ヨリ、臣民ノ稱謂親等ノ制ニ至ルマテ、皆之ヲ著ス令義是ニ
 於テ文物大ニ備ハル、桓武帝延曆四年正月朔朝ヲ受ケ、始メテ兵衛叫關ノ儀ヲ
 停ム本紀日帝心ヲ典故ニ留メ、嘗テ勅シテ伊勢兩宮ノ儀式ヲ修メ延曆兩太神宮儀式類又
 文ノ未タ備ハラサルヲ憂ヒ、左大臣藤原朝臣内麻呂等ニ詔シ、格式ヲ撰述セシ
 ム、未タ成ラスシテ崩ス弘仁式序、類聚國史嵯峨帝弘仁九年詔シテ朝會儀式ヲ議セシメ、
 多ク唐禮ヲ用フ日本後紀、類聚國史更ニ大納言藤原朝臣冬嗣等ニ詔シテ式四十卷ヲ
 修シ、以テ桓武帝ノ志ヲ終フ弘仁格式序、類聚國史其餘元正ヨリ大雛ニ至ルマテ、歲中ノ
 常典及ヒ臨時軍國ノ儀ヲ採リ、類ヲ以テ區分シ、勅シテ三卷トナス、是ヲ内裏式
 ト爲ス式所、内裏後又儀注ヲ撰ヒ、名ケテ弘仁儀式ト云フ法家文、書目錄淳和帝天長中、右大
 臣清原真人夏野等ニ詔シテ、内裏式ニ就キ、更ニ損益ヲ加ヘ、舊儀ヲ斟酌シ、頗ル
 改定スル所アリ式所、内裏清和帝貞觀中、右大臣藤原朝臣氏宗等ニ詔シテ、弘仁式ヲ
 補正シ、更ニ錄シテ二十卷ト爲シ、貞觀式ト曰フ、其朝會、宴饗、蕃客、祭祀、諸儀、注詳

ニ討論ヲ加ヘ、儀式二十卷ヲ作り、式ト並ヒ行フ類聚國史、醍醐帝延喜五年左大
 臣藤原朝臣時平等ニ詔シテ、朝故ヲ撰集シ、延喜格ト曰フ延喜格序、延喜式序十二年又大
 納言藤原朝臣忠平等ニ詔シテ、延喜式ヲ撰ハシメ、延長中ニ至リ、書成リ之ヲ上
 ル、其祭祀、宴饗ノ禮、朝會、蕃客ノ儀、別ニ集メテ儀式ト爲ス延喜式序、初メ弘仁ノ制、諸
 儀分ナテ四ト爲ス、曰ク大儀、上儀、中儀、小儀、貞觀之ニ因ル内裏式、貞觀式是ニ至リテ、
 改メテ三ト爲ス、曰ク大儀、中儀、小儀、凡ソ元正、即位、受蕃國使表ヲ大儀ト爲シ、元
 日ノ宴會、七日ノ節、大射、新嘗、及ヒ饗賜、蕃客ヲ中儀ト爲シ、告朔、上卯、臨軒、授位、任
 官、踏歌、賭射、騎射、相撲、九日節、出雲國造奏壽詞、冊命皇后皇太子、百官賀表、遣唐使、
 將軍賜節刀ヲ小儀ト爲ス延喜式村上帝ノ時、更ニ儀禮ヲ改制シ、新儀式ト曰フ、帝
 又親ラ儀注ヲ撰シ、清涼記ト曰フ、其後朝綱漸ク弛ミ、復タ官撰スルコトナシ、禮
 儀ノ書概ネ朝臣ノ家ニ成リ、自ラ其家業トナレリ、源高明藤原公任私ニ儀注ヲ
 撰シ、悉ク新儀ヲ用フ、一條帝ヨリ以降、朝典一變シ、白河堀河帝ニ及ヒテ又一變
 ス、是ニ於テ大江匡房次第ヲ撰ヒ、舊儀ヲ損益シ、時ニ隨ヒ宜ナ制ス、是朝禮因革
 ノ大概ナリ江家次、第抄然レトモ佛法盛ニ行ハレテヨリ、葬祭ノ禮先ツ壞レ、讀經、修
 法、朝儀ニ重セラレ日本書紀、類聚國史之ニ加フルニ、雜儀繁興、嵯峨帝花宴ノ節
 ナ設ケシヨリ、仁明帝芳宜花宴ヲ設ケ、清和帝童相撲ヲ行ヒ日本後紀、三代實錄、醍

翻帝前裁合小弓賭射ヲ創シ、日本村上上帝子日遊殘菊宴ヲ行ヒ、菊合、詩合、歌合ヲ
 作シ、日本紀略古今著聞華山帝ノ時、東宮ニ鬪雞ノ戲ヲ設ケ、日本及冷泉帝菖蒲
 根合ヲ行フ、古今著聞凡ソ兩朋ヲ分テ、以テ優劣ヲ角スルヲ合ト謂フ、率ネ皆一時
 ノ宴遊ニシテ永式ニアラスト雖トモ、然レトモ童相撲ハ、儀相撲節ニ準シ、詩合
 ハ臨時祭ニ準シ、三代實錄天德三年、子日遊殘菊ノ宴、並ニ歷朝舉行シテ、竟ニ恒
 例外ノ一宴會ト爲シ、公事往々奢侈ヲ窮極ス、古今著聞而シテ舊來ノ正儀ハ漸ク
 衰替シ、其所謂儀式儀注ナルモノ、大抵皆煩文末節ニシテ、徒ニ儀容ニ拘リ、公卿
 縉紳專ラ虚飾ヲ務メ、大體ヲ知ラス、其常ニ講スル所拜揖步趨ノ末ニ過キス、四
朝野群載鳥羽帝ヨリ後、公卿皆眉ヲ去リ鬚ヲ剪リ、鐵漿齒ヲ染メ、以テ儀貌ヲ
 飾リ、海人風俗偷薄ニシテ、朝廷陵夷シ、保元平治ノ亂ヲ歷テ、宮闕頽圯シ、典禮亦
 多ク行ハレス、神皇正統記壽永以後、亂離相踵キ、百度悉ク隳ル、大禮アル毎ニ、臨時酌
 量シ、附比事ニ從フ、亦皆一切苟且ニシテ、論スルニ足ルモノナシ、代始後醍醐帝
 最モ意ヲ古典ニ留メ、太平記中興ニ及ヒ、故事ヲ採集シ、親ヲ刪定ヲ加フ、是ヲ建武
 年中行事ト爲ス、建武年中行事然レトモ世大亂ニ屬シ、乘輿播遷シテ偏安ニ終ル、
太平記亦何ソ典禮ヲ議スルノ暇アラシヤ、蓋シ朝廷已ニ衰へ、政事武人ニ歸シ、禮
 樂熄ムニ幾シ、然レトモ武人モ亦禮儀ニ非サレハ、以テ天下ヲ治ムヘカヲサル

ナ知ル、故ニ源賴朝元日ノ坩飯入朝喪服等ノ儀ヲ定メ、東武田小笠原諸氏ナシ
 テ、其家法ニ因リ、以テ射禮ヲ定メ、之ヲ後世ニ傳フ、東武田系圖、武田系圖、又以テ天下ノ
 變ヲ觀ルヘシ、足利氏ニ至リテ、更ニ小笠原貞宗等ヲシテ、武家ノ禮節ヲ議定セ
 シ、小笠原系圖、當時最モ茶會ヲ重シ、宴會甚盛ナリ、奢侈相競ヒ、驕淫度ナシ、
 義滿ニ至リテハ、諸事往々乘輿ニ僭擬シ、言フニ忍ヒサルモノ多シ、太平記、足利
件錄、後土御門帝應仁元年京師大ニ亂レ、攝關以下月卿雲客邊土遠境ニ遁走
 シ、朝廷ノ衰頽甚シ、歷仁天皇法皇皆室町第二アリ、池百司朝セス、資用給セサ
 ルヲ以テ、朝制悉ク廢ス、文物制度蕩然地ヲ拂フ、足利家譜、池親長記、長興記、元
長記、和長記、御湯殿日記、織田信長興ルニ及ヒテ、王室ヲ崇敬シ、首ニ皇居ヲ營造シ、朝典ヲ復
 興シ、天正六年始メテ諸節會ヲ舉ク、信長記、國豐臣秀吉尋キテ天下ヲ平定シ、紀
 綱頗ル復ス、後陽成帝又意ヲ舊典ニ留ム、慶長四年二月帝不豫、疾ヲカノ、詔シテ
 舊章ヲ公卿ニ問ヒ、數日再詔シテ故典ヲ檢覈セシム、御湯殿後水尾帝慶長十九
 年十二月德川家康入朝シ、關白信尙ヲ見テ請ヒ曰ク、願クハ祕籍ヲ按シ、以テ朝
 廷ノ舊儀未タ修學セサルモノヲ復セント、乃々元日、白馬、踏歌、節會等七事ヲ復
 興ス、秀、阪、記、後、秘、集、大、元和元年家康更ニ舊制ヲ斟酌シ、朝廷ノ式十七條ヲ作り、之ヲ
 進奏ス、其朝衣ノ班色、諸臣ノ任官ニ至ルマテ、之ヲ規定ス、武家ノ法制ヲ立テ、

朝廷ヲ裁スル此ニ始マル孝亮記、國史實錄帝又上皇ノ意ヲ繼キ嘗テ當時年中行事ヲ撰シ親シク三冊ヲ書シ一ハ禁中ニ藏シ一ハ新院ニ贈リ草稿ヲ留メテ法皇ノ宮ニ置ク當時年中行事蓋シ當時武家ノ恒例三月三日五月五日八月朔九月九日等ノ節アリ而シテ朝廷モ亦專ラ此節ニ據ル當時年中行事中御門帝ノ時ニ至リ朝禮舊典ヲ復スルモノ多シ宗廟記光格帝寛政二年三月詔シテ朝參及ヒ拜賀公事ノ冠服一ニ質素ニ從ハシム亮壽記要スルニ徳川氏ノ世朝廷ノ儀恒例臨時ノ禮舊制ニ復スルモノ頗ル多シ然レトモ幕府政柄ヲ專ニシ箝制至ラサル所ナク天子垂拱一ニ其成ヲ仰キ公卿縉紳モ亦徒ニ尸位ニ供スルニ過キス十三朝明治中興ニ及ヒ百廢俱ニ舉カル乃チ式部寮ヲ宮内ニ置キ大小ノ禮儀ヲ掌ラシメ四方拜紀元節天長節ヲ定メテ三大節ト爲シ天下ヲシテ國旗ヲ掲ケテ祝賀シ業ヲ休シ慶ヲ表セシム而シテ即位享宴山陵國忌ヲ始トシ恒例臨時ノ典舊儀ヲ斟酌シ頗ル改定スル所アリ且ツ外邦ノ交通大ニ開ケテヨリ外客出入益繁ク迎接宴饗ノ禮モ亦時ニ隨ヒ宜チ制シ朝廷ノ儀輿服ノ制完ク備リ善美盡サ、ル所ナシ豈盛ナラスヤ太政官日誌、官報今大小ノ禮儀恒例臨時ノ類ニ依リ次ヲ以テ採録ス、

恒例

朝賀 神武帝元年正月朔攝原官ニ即位シ始メテ四方ノ朝賀ヲ受ク朝賀此ヨリ始マル日本書紀爾後正月元日天皇皇后大極殿ニ御シ群臣ノ賀ヲ受ク當時奏瑞ノ儀アリ内裏式、北山抄諸國ハ國司僚屬郡司等ヲ率井廳ニ向ヒテ朝拜シ訖リテ長官賀ヲ受ク令義醍醐帝延喜ノ初朝拜ナキトキハ殿上ノ公卿以下清涼殿ニテ朝拜ス之ヲ小朝拜ト謂フ西宮記、北山抄、公事根源五年詔シテ其私禮ニ屬スルヲ以テ之ヲ罷ム十九年臣僚ノ請ニ因リテ之ヲ復ス西宮記、亮壽記一條帝正曆以後大朝拜賀ノ儀廢シ唯小朝拜ヲ行フノミ公事根源、年中行事、歌合應仁以後京師擾亂廷臣多ク遁走シ百司朝セス小朝拜モ亦或ハ行ヒ或ハ廢ス應仁略記、足利家譜、親長記、池藤曆後陽成帝以後海内平定シ復廢セス十三朝紀聞、皇代紀事四方拜 宇多帝寛平中始メテ之ヲ行ヒ江家次第、公事根源醍醐帝延喜ニ至リ遂ニ定式ト爲ル其儀元日寅一刻天皇朝服清涼殿東庭ノ御坐ニ就キ香ヲ上リ再拜咒文ヲ唱ス唯山陵ハ四拜ノ禮ヲ行フ延喜式、四宮記、江家次第、北山抄、江家次第是日大臣以下モ亦四方拜ヲ行フ公事根源應仁以後或ハ行ヒ或ハ廢シ應仁略記、池藤曆後陽成帝ヨリ舊ニ復ス皇代紀聞、十三朝

朝觀 天皇太上皇皇太后ヲ省スルヲ謂フ嵯峨帝即位ノ歲八月始メテ太上天

皇ニ親ス、朝覲是ニ始マル、類聚國史、公事根源、仁明帝承和元年正月二日天皇後太上天
 二朝ス、此後多ク正月二日若クハ三四日ヲ用フ、嘉祥三年正月四日太上天
 二朝ス、後記、日本後世亦正月二日ヲ用ヒ或ハ吉日ヲ擇ヒ之ヲ行フ、廣中抄、皇太
 子モ亦朝覲ノ儀アリ、多ク三日ヲ用フ、其行啓ノ儀常ノ如シ、小右記、左經、南北
 戰爭ヲ經テ、稱光帝應永中後龜山上皇ニ親シ、池原爾後此儀遂ニ廢シ、德川氏
 ノ時ニ至リ、唯東山帝元祿六年四月朝覲ノ儀アリシノミ、一本皇胤、仁孝帝天
 保十一年光格上皇疾アリ、帝之ヲ親セント欲シ、命ヲ幕府ニ傳フ、幕府聽カス、
 帝乃テ女與ニ御シ、潛ニ宮ヲ出テ朝覲ス、今日又當時ノ勢ヲ見ルヘシ、皇后朝
 賀ヲ受クルコト、淳和帝天長五年正月皇太子以下始メテ皇后宮ニ拜賀シ、後
 遂ニ定制ト爲ル、皇太子モ亦同七年始メテ朝賀ヲ受ク、類聚國史、清和帝貞觀ノ儀
 凡中宮、東宮、朝賀ヲ受クル、例正月二日ヲ用フ、貞觀、醍醐帝延喜式ヲ定ムルニ
 及ヒテ、其制大ニ備ハル、延喜、而シテ後世拜賀ノ禮廢ス、只大饗ヲ行フノミ、北
抄朝廷衰替以後、大饗モ亦開ユルナシ、
 視告朔 毎月一日天皇大極殿ニ御シ、前月ノ公文ヲ進奏セシムル儀ニシテ、天
 武帝以後之ヲ行フ、蓋シ唐朝每朔ノ賀ニ倣ヘルナリ、日本書記、類聚國史、令義
 嵯峨帝弘仁ノ制、孟月軒ニ臨ミ朔ヲ視ル、延喜、凡告朔正月ハ三日ヲ用フ、公事
根源

宇多帝寬平以後復行ハス、年中、行事

冬至 冬至百官ノ賀ヲ受クル、聖武帝神龜二年ニ始マル、類聚日本紀、桓武帝延曆
 三年十一月戊戌朔且冬至、詔シテ王公已下ニ物ヲ賜フ、類聚日本紀、其後朔且冬至ナ
 レハ、則テ賀ヲ受ク、其日天皇紫宸殿ニ御シ、百官ニ宴ヲ賜ヒ、公卿表賀ス、類聚
 後世之ニ因リ、之ヲ朔且旬ト謂フ、天皇南殿ニ御シ、陰陽寮曆ヲ奏ス、餘ハ舊儀
 ノ如シ、江東、次第光格帝天明六年十一月朔且日南至、詔シテ旬節ヲ修ス、是ヨリ先
 キ此典久シク廢シ、百官ノ賀表ヲ上ルノミ、是ニ至リテ之ヲ復ス、公卿、禮、
三朝、
 宴會 神代既ニ百机飲食ノ儀アリ、日本書記、其後享宴ノ事往々史ニ見ユ、凡ソ
 宴會上世之ヲ豐樂又豐明ト謂ヒ、多クハ祭事ニ因リテ之ヲ行フ、古事記、日本
貞觀、文武帝ニ至リ、正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七月七日、十一月
儀式、新嘗ヲ定メテ節日トナシ、令ニ著ス、令、後世更ニ正月十七日、七月二十五日、
 九月九日ヲ加フ、延喜、凡宴會ノ制、節宴アリ、旬宴アリ、内宴アリ、曲宴アリ、類聚
三代、子日ニ曲宴スルヲ子日宴ト曰ヒ、類聚國史、其旬初ニ於テスルヲ旬ト謂
實錄、後日本 四月十月朔ニ於テスルヲ二孟旬ト曰フ、類聚國史、後世天子即位初
ヒ、メテ萬機ニ臨ミ、因テ羣臣ヲ宴スル、之ヲ萬機旬ト謂フ、公事凡宴會ハ初メ天

武帝大極殿ニ設ケ、日本書紀其後内裏ニ宴シ、續日本書紀嵯峨帝ニ至リテ豊樂殿ヲ用フ、類聚國史淳和帝始メテ紫宸殿ニ宴シ、貞觀以後之ニ因ル、然レトモ式文猶豊樂殿ヲ用フト稱スルハ、蓋シ舊文ニ仍リテ改メサルノミ、其内宴ハ仁壽殿ニ設ケ、類聚國史後世王室衰替ニ及ヒテ、宴會復舉行セサルモノ多ク、應仁以後ニ至リテハ、費用給セス、即位元會ノ宴節モ尙且ツ廢スルコトアルニ至ル、續日本書紀、類聚國史、御湯殿日記、慶長元和以後稍復行ス、孝亮記、公卿補任、續日本書紀、御湯殿日記、明治維新ニ及ヒ、古今ノ宜ヲ制シ、内外ノ典ヲ考ヘ、大ニ宴會ノ式ヲ改メ、頗ル洋禮ヲ用井、時ヲ以テ皇族貴顯ノ賜宴アリ、其夫人ヲモ同伴スルヲ禮トス、大演習視閱ノ時ノ如キハ、地方ノ名士富豪ノ農商ヲモ召シテ、大ニ宴會ヲ開カル、ニ至レリ、元日節會 正月元日天皇群臣ノ賀ヲ受ケ、畢リテ豊樂殿ニ御シ群臣ヲ宴ス、之ヲ元會ト謂フ、其儀弘仁中ニ定マル、是日氷樣奏腹赤奏アリ、又吉野國柘歌笛ヲ奏シ贊ヲ獻ス、大歌所雅樂寮モ亦各、入リテ歌ヲ奏ス、禮畢リテ還御ス、若シ元日卯ニ值レハ、又卯杖ヲ獻スルノ儀ヲ行フ、内裏式、光仁帝天應以往ハ、縱ヒ廢朝ト雖トモ、元日必ス會セリ、桓武帝延曆以來ハ、朝賀ヲ受クル日宴ヲ賜フ、若シ三日ヲ經テ風雨止マラサレハ、朝ヲ受ケスト雖トモ、猶宴饗アリ、其中宮東宮ノ宴饗ハ、正月二日ヲ用フ、延喜式、之ヲ二宮ノ饗宴ト謂フ、後大饗ト稱ス、類聚國史

西宮 其儀延喜ニ至リテ備ハル、延喜式、後世群臣拜禮訖リテ、饗ヲ玄輝門ノ東西廊ニ行フ、先中宮次ニ東宮、並ニ三獻ノ儀アリ、公事、大臣モ亦大饗ヲ行フ、藤原氏長者ハ、例朱罌臺盤ヲ用井、西宮、其他ノ大臣ハ、赤木黒柿ノ机ヲ用フ、江家次第、上帝天曆九年詔シテ、忌月ヲ以テ正月ノ節會ヲ停ム、年中行、太政官奏シテ之ヲ行フ、但音樂ヲ舉ケス、本朝文粹、冷泉帝安和以後復音樂ヲ舉ク、年中行、後世王室式微應仁以後ニ至テ、百司朝セス、費用給セサルヲ以テ、遂ニ廢ス、親長記、長興、長享延徳ノ交、稍復興シテ又廢シ、親長記、元長、文龜二年僅ニ之ヲ復シ、宣風記、又行ハサル十數年、永正十四年更ニ復行フ、爾後或ハ行ヒ或ハ廢ス、宣風記、文祿、慶長以後恒典稍闕クルコトナシ、御湯殿日記、孝亮記、續日本書紀、御湯殿日記、明治中興ニ及ヒ、新年宴會ヲ行ヒ、恒例ト爲ス、官令治、奉表

氷樣奏 仁德帝始メテ氷室ヲ置キ、氷樣奏此ニ原ス、日本書紀、元日朝賀宮内省氷ノ厚薄ヲ奏ス、其儀弘仁ニ定マリ、内裏式、後之ニ因ル、貞觀儀式、腹赤奏 景行帝肥後ニ行幸ス、時ニ吉備人朝勝見腹赤魚ヲ獻ス、是ヨリ腹赤ノ奏起ル、續日本書紀、年中行、元日朝賀宮内省氷樣ト共ニ之ヲ奏ス、其儀弘仁ニ定マリ、内裏式、貞觀延喜皆之ニ因ル、貞觀儀式、後世廢シテ行ハレズ、獻卯杖儀 正月上卯、東宮及ヒ大舍人兵衛府杖ヲ獻スル、之ヲ殿杖ト謂フ、文德

公事 根源 皆楨楯桃梅椿等枝ヲ用フ、貞觀儀式、延喜式、其儀持統帝ノ時ニ始マル、日本書紀、公事根源、其制天應ニ定マリ、式、内裏、貞觀以後之ニ因ル、貞觀儀式、延喜式、後世作物所モ亦御杖ヲ獻ス、江家次第、後世廢シテ行ハレヌ、

青馬節會 正月七日天皇豐樂殿ニ御シ青馬ヲ見ル、因リテ群臣ニ宴ヲ賜フ儀ナリ、類聚國史、公事根源、景行帝始メテ正月七日ヲ以テ宴ヲ設ケ、日本書紀、天武帝以後遂ニ定制ト爲ル、令、後撰、光仁帝寶龜六年楊梅院ニ御シ宴ヲ五位以上ニ賜フ、内

廐青馬ヲ進メ、兵部省五位以上ノ裝馬ヲ進ム、因リテ之ヲ青馬節ト謂フ、年中抄、伊呂波字類抄、公事根源、桓武帝延暦十八年豐樂院未タ成ラサルヲ以テ、權ニ殿ヲ龍尾道上ニ造リ、葺クニ彩帛ヲ以テシ、帝臨御五位以上ヲ宴ス、後撰、日本書紀、其儀弘仁中ニ定マル、吉日天皇豐樂殿ニ御シ先ツ叙位ヲ行ヒ、左右馬寮青馬ヲ引キ訖リテ

群臣ヲ宴ス、式、内裏、後世紫宸殿ニ於テ之ヲ行フ、江家次第、應仁以來資用給セサルヲ以テ或ハ輟メテ行ハス、拾芥記、文祿慶長以後復舉ケテ恒典ト爲ス、孝亮記、進御新儀 正月十五日ヲ用フ、其儀天武帝ノ時ニ起ル、日本書紀、大寶ノ時文武官進

ムル所ノ薪ノ數ヲ定ム、令、後撰、貞觀中其儀ヲ定メ宮内省ニ於テ之ヲ行ヒ、畢リテ饌及ヒ粥ヲ給フ、貞觀儀式、後之ニ因ル、延喜式、八野宮年中行等、公事根源、踏歌節會 正月十六日天皇豐樂殿ニ御シ宴ヲ群臣ニ賜ヒ、踏歌ヲ奏ス、故ニ名

ク、内裏式、三初メ天武帝此日ヲ以テ群臣ヲ宴シ、日本書紀、持統帝詔シテ定制ト爲シ、始メテ宮人踏歌ヲ奏ス、日本書紀、類聚國史、天平以後群臣モ亦踏歌ス、續日本書紀、延暦十四

年踏歌ノ詩章ハ、載セテ類聚國史ニアリ、大同中此節ヲ停メ、弘仁ニ至リテ群臣ノ踏歌ハ舊ニ依リテ行ハス、内裏式、貞觀儀式、其後諒闇及ヒ忌月ハ之ヲ停ム、三代日本書紀、應仁以來舊儀皆廢ス、觀長記、後陽成帝慶長七年二月十六日復踏歌節ヲ行フ、公卿補任、

大射 正月十七日天皇豐樂殿ニ御シ群臣諸衛ノ射ヲ觀ルノ儀ナリ、日本書紀、内裏式、貞觀儀式、之ヲ射禮ト謂フ、公事根源、平城帝以往觀射ノ事史ニ見ユ、然トモ其儀詳ナラス、月日モ亦定マレルコトナシ、日本書紀、嵯峨帝弘仁中其制定マリ、式、貞觀以後之ニ從フ、當日射記訖リテ五位已上ニ饌ヲ賜フ、貞觀儀式、諸衛射

盡サ、ルモノハ詔シテ明日ヲ以テ之ヲ行フ、延喜式、之ヲ射遺ト謂フ、江家次第、又賭射禮アリ、正月十八日ヲ用フ、文德實錄、三代、近衛府兵衛府ノ射手ヲ定メ、左右大將之ヲ奏ス、射訖リテ大將射手ヲ饗ス、之ヲ還饗ト謂フ、公事根源、又侍臣

ノ賭射アリ、之ヲ殿上賭射ト謂フ、臨時ニ之ヲ行フ、公事根源、十月五日、天皇武德殿ニ御シテ射場始ヲ行フ、江家次第、應仁以後此儀開ユルコトナシ、

禊飲 三月三日文人ヲ召シ詩ヲ賦セシメ、宴ヲ賜フ、又曲水宴ト曰フ、類聚國史、顯宗

帝ノ時ニ起ル、日本書紀、公事根文武帝五年此日ヲ以テ群臣ヲ宴シ、本紀、日遂ニ
 着シテ節日ト爲ス、令義聖武帝以後或ハ上巳ヲ用ヒ、或ハ三日ヲ用フ、本紀、日平
 城帝大同三年詔シテ先帝及ヒ皇太后ノ忌月ヲ以テ此節ヲ停ム、類聚、宇多帝
 寬平二年三月三日、復曲水宴ヲ設ケ、侍臣ヲ召シテ詩ヲ賦セシム、本紀、日宇多帝
 村上帝沿テ之ヲ繼ク、西宮足利氏ノ時ニ及ヒテ、此日必ス鬪雞ヲ觀ル、本紀、日而シテ
 應仁以後暫ク廢シ、文明七年三月三日之ヲ復シ、本紀、日爾後恒例トナス、宣又
 花宴節アリ、嵯峨帝弘仁三年ニ始マル、後因リテ定制ト爲ス、朝廷モ亦因リテ其
 ニ廢ス、德川氏ノ時ニ至リ、幕府三日ヲ定メテ節日ト爲ス、朝廷モ亦因リテ其
 儀ヲ行フ、當時年中行明治中興ニ及ヒテ之ヲ廢ス、官令
 走馬節 又端午節ト謂フ、類聚推古帝十九年五月五日藥ヲ菟田野ニ採ル、日本
 是レ端午節ノ始ナリ、公事天智帝四年此日ヲ以テ群臣ヲ宴ス、日本文武帝ニ
 至リテ着シテ節日ト爲シ、令義五位以上ノ走馬ヲ觀ル、後以テ例ト爲ス、本紀、日
 嵯峨帝弘仁中其儀ヲ定ム、其日車駕武德殿ニ御シ之ヲ行フ、中務宮内菖蒲草
 ナ進メ、女藏人續命縷此間之ヲ稱ヲ執テ、參議以上ニ賜ヒ、次テ群臣ニ饌ヲ賜
 フ、次ニ走馬ヲ奏シ、射ヲ行ヒ、競馬訖リテ退出シ、明日又武德殿ニ御シ、走馬ヲ
 觀ル、式、內淳和天皇天長元年皇太后ノ忌月ヲ以テ、五日節ヲ廢ス、公卿奏議シ

テ、騎射ノ儀、移シテ之ヲ重陽ニ行ハント請フ、之ニ從フ、尋テ改メテ四月二十
 七日ヲ用フ、類聚仁明帝即位舊ニ復ス、承和九年勅シテ衛府六位以下ノ甲冑
 ニ金銀泥ヲ裝フヲ聽シ、五位以上ノ裝馬ハ金銀ヲ用フ、但簿泥ヲ禁ス、後、日本
 醍醐帝延喜ノ制之ニ因リ、親王以下走馬ヲ進ムル數ヲ定ム、延喜初メ天長六
 年四月武德殿ニ御シ、馬寮及ヒ近畿諸國ノ貢馬ヲ觀ル、其後定制ト爲シ、類聚
 凡五日節前七日車駕武德殿ニ御シ、御馬ヲ蒐閱シ、延喜以テ節會ニ供ス、
 類聚之ヲ駒率ト謂フ、貞觀其儀後世遂ニ廢ス、年中行後土御門帝長
 享二年五月五日菖蒲節ヲ停ム、是ヨリ復行ハレス、本紀而シテ德川氏ノ時ニ
 及ヒ、幕府之ヲ復シテ節日ト爲シ、朝廷モ亦因リテ恒例トナス、當時年中行明
 治中興ニ及ヒテ遂ニ廢ス、官令
 相撲節 文武帝始メテ七月七日ヲ以テ節日ト爲シ、令義聖武帝天平六年是日
 ナ以テ相撲ヲ觀ル、本紀、日後例ト爲ス、故ニ相撲節ト謂フ、內裏嵯峨帝弘仁
 中其儀ヲ定ム、前一月左右相撲司ヲ任シ、親王ヲ以テ別當ト爲ス、延喜當
 日乘輿神泉苑ノ閣ニ御シ、相撲戲ヲ觀ル、暮ニ至リテ罷ム、明日紫宸殿ニ御シ、
 又相撲ヲ觀ル、一ニ前日ノ如シ、凡相撲勝者ハ亂聲及ヒ舞樂ヲ奏シ、內裏其負
 者ハ八月ニ至リ輸物ヲ獻ス、類聚清和帝貞觀九年七月二十五日紫宸殿ニ御

シ相撲ヲ觀ル、三代實錄後廢シテ行ハレヌ、高倉帝承安四年復行ヒ、百鍊抄後遂ニ廢ス、官令治

菊花宴 又重陽宴ト謂フ、九月九日ニ之ヲ行フ、類聚國史、內裏式、公事根源天武帝八年始メテ此日ヲ以テ朝嬪ニ幸シ、騎射ヲ觀ル、十三年又此日ヲ以テ宴ヲ設ク、日本書紀持統帝以後天武帝ノ忌日ヲ以テ、此節廢シテ行ハス、日本書紀平城帝大同二年詔シテ之ヲ復シ、乃チ神泉苑ニ御シ、群臣ノ射ヲ觀ル、類聚國史嵯峨帝弘仁三年詔シテ、九日ノ諸儀一ニ三月三日節ニ準セシム、政事要畧五年九月節會ノ數ニ加ヘス、臨時ニ文藻アルモノヲ撰定シテ之ヲ行フ、類聚國史尋テ其儀ヲ定メ、神泉苑乾臨閣ヲ用井、其日天皇之ニ御ス、式、內裏貞觀以後之ニ從フ、延喜式、式但天長八年以後ハ紫宸殿ニ行フ、類聚國史醍醐帝復神泉苑ニ設ク、延喜式村上帝天曆四年十月五日ヲ以テ殘菊節ヲ置キ、其儀重陽ニ準ス、政事要畧冷泉帝安和元年復九日節ヲ置キ、政事要畧其後遂ニ廢ス、柱史鈔、年而シテ德川氏ノ時ニ至リ、此日ヲ以テ節日ト爲シ、朝廷モ亦因リテ恒例ト爲ス、當時年中行事明治中興ニ及ヒテ遂ニ廢ス、官令治

新嘗節會 十一月新嘗會ノ後天皇豐樂殿ニ御シ群臣ヲ宴ス、內裏式其儀祭祀志ニ詳ナリ、

釋奠 天智帝始メテ庠序ヲ設ケ、儀風大寶ニ至リテ大學國學ノ制ヲ定メ、每歲

春秋二仲上丁ノ日ヲ以テ先聖孔宣父ニ釋奠ス、令錄桓武帝延曆中伴與部連家守ノ議ヲ用ヒ、先聖ノ位ヲ南向ニ定ム、日本書紀清和帝貞觀ノ制、先師顔子先賢関子ヲ加ヘ、貞觀雜式、類聚三代格上丁ノ日國忌及ヒ祈年日蝕ニ當レハ、改メテ中丁ヲ用ヒ、諒闇ハ之ヲ停ム、小野宮年中行事若シ享日園禱神春日、大原野祭ノ前ニアリ、及ヒ其祭日ニ當レハ、三牲及ヒ兎ヲ用フルヲ停メ、魚ヲ以テ之ニ代フ、三代實錄、延喜式

初メ桓武帝詔シテ所司ニ三牲ノ全體ヲ供セシム、三代實錄醍醐帝延喜ノ制、八哲ヲ加ヘ從祀ス、凡享ニ預カル官ハ散齋三日、致齋二日、學官及ヒ諸學生等皆清齋シ、其日大學頭先ツ享ス、是ヲ初獻ト謂フ、次ニ助亞獻、次ニ博士終獻、皆初獻ノ如シ、禮畢リテ出テ都堂ニ就キ論議アリ、畢リテ宴ヲ賜ヒ、文人ヲシテ詩ヲ獻セシム、仲秋釋奠ノ明日、侍講博士等ヲ紫宸殿ニ延テ論義セシム、之ヲ內論義ト謂フ、延喜式後一條帝以後釋奠ノ禮漸ク衰ヘ、務メテ簡略ニ從フ、藤原齊信藤原賴長相繼テ舊制ニ復スルヲ請フ、然レトモ議遂ニ行ハレヌ、百鍊抄、江家次郎

後三條帝延久四年大學寮ノ請ニ因リ、大江匡房紀成季等ニ詔シ、先聖先師及ヒ九哲ノ像ヲ修セシム、江家次郎堀河帝承徳三年祭器ヲ修ス、朝野群載鳥羽帝保安三年廟堂倒レテ禮ヲ行フヲ得ス、議シテ南廳ノ座ヲ用フ、百鍊抄近衛帝仁平中釋奠

本議ヲ行フ、其後復略禮ヲ用フ、壬生官制高倉帝治承元年大學寮災スルヲ以テ、太政官廳ニ行フ、玉海、百其後遂ニ定制ト爲ル、山槐記、唯内論義後朱雀帝以後廢シテ行ハレヌ、建武年中、行後宇多帝弘安十年大學寮ヲ修シ、新ニ先聖先師九哲ノ像ヲ寫シ、廟堂器物ヲ修飾シ、抄、新釋奠ノ禮ヲ行フ、釋奠、供舊制皇太子國學ニ釋奠スルコト、天平以後廢絶シ、仁明帝ノ時ニ至リ、皇太子之ヲ復セント請フ、後拾遺、往、生、傳、延喜以後其儀復廢ス、北山抄、江諸國學モ亦釋奠ヲ行フ、貞觀二年是ヨリ先キ諸國式禮定準ナシ、是ニ至リテ勅シテ式ヲ七道諸國ニ頒ツ、三代、其制從祀ナク、儀略大學ニ準シ、器數職掌並ニ減スルアリ、延喜後世王室衰頽、舊儀多ク舉セス、而シテ享德康正ノ際此儀僅ニ存シ、康正應仁以後遂ニ廢絶シ、東山帝ノ時ニ至リ、嘗テ釋奠ヲ復セント欲シ、命シテ累世傳フル所ノ孔子ノ像十哲圖ヲ祕庫ヨリ出サシム、然レトモ尋テ晏駕シ、事竟ニ寢ム、紀、小、説、十光格帝寬政元年八月勅シテ、孔聖ニ釋奠ス、十三朝釋奠ハ歷朝ノ大禮ナリシカ、明治ニ至リ遂ニ廢ス、

郊祀 桓武帝延曆四年十一月始メテ天神ヲ交野柏原ニ祀ル、我國古來郊天ノ禮ナシ、是ニ至リテ始メテ起ル、蓋シ周漢ノ制ニ效フルナリ、六年十一月藤原朝臣繼繩ヲ遣ハシ、復天神ヲ交野ニ祭ル、配スルニ光仁天皇ヲ以テス、其祭文

全ク漢體ヲ用フ、本紀、日文德帝齊衡三年十一月藤原良相清原岑成ヲ遣ハシ、郊天ヲ交野柏原ニ行ヒ、帝御名ヲ祝文ニ自署ス、文德是後郊祀史ニ見ル所ナシ、任官 之ヲ除目ト謂フ、正月ニ於テスルヲ縣召除目ト謂フ、外官ヲ任スル儀ナリ、三月ニ於テスルヲ司召除目ト謂フ、左京諸司ヲ任スル儀ナリ、司召除目後世之ヲ秋ニ行フ、故ニ秋除目ト稱シ、縣召除目モ亦春除目ト謂フ、江、東、大、傳、臨時ニ行フヲ小除目ト謂ヒ、又臨時除目ト稱ス、官、職、凡任官ノ儀、弘仁中定マリ、内、貞觀ノ制之ニ因ル、其儀中務宣命ヲ置キ、大臣式部兵部二省ヲシテ、除目ノ簿ニ依リ之ヲ授ク、若シ叙位任官同日ナレハ、則チ先叙位ヲ行フ、貞觀叙位ノ儀、其成選應ニ叙位スヘキモノハ、二月十一日大臣親シク自ラ點定ス、之ヲ列見ト謂ヒ、四月七日成選ニ從ヒ位階ヲ擬シ之ヲ奏ス、之ヲ擬階ノ奏ト謂フ、而シテ十五日ニ至リ、朝座ニ就テ叙位ヲ行フ、其太政官長上ノ考文ハ、八月十日一日大臣ニ申シ、曹司廳ニ就テ考選ス、延喜之ヲ定考ト謂フ、後之ニ因ル、貞觀其儀弘仁ノ制、天皇紫宸殿ノ南廂ニ御シ、中務卿三位以上ヲ升叙シ、延喜輔五位以上ヲ升叙ス、式、後世隔年之ヲ行ヒ、復定日ナシ、西、宮、記、保元平治以來叙位任官ノ儀モ亦唯虛禮ニ過キス、源、平、盛、衰、記、保元平治物語、南、北、爭、亂ヲ經テ、應仁以後其儀終ニ廢絶ス、文明七年正月二十五日縣召除目ヲ行フ、後

復廢シ、大永二年ニ至リテ復ス、ニ水蓋シ大抵將軍兼國ノ時特ニ費用ヲ獻シ
之ヲ行フナリ、親長記、ニ水其後或ハ行ヒ或ハ廢ス、公卿補任叙位亦廢シ、天文
十七年二月僅ニ小叙位ヲ行フ、補任德川氏ノ時ニ及ヒテ、武臣ノ官位ハ皆公
卿ノ員外ト爲シ、幕府ノ執奏ニ因リテ之ヲ叙任ス、孝亮記、國史實錄、十三朝紀聞明治中興ニ
及ヒ、叙任規則ヲ制定シ、專ラ人才登庸ノ道ヲ啓ク、官令沿
國忌 持統帝丁亥年天武帝ノ國忌齋ヲ京師ノ諸寺ニ設クルニ始マル、日本書紀、蓋勝
抄、明年春詔シテ自今以後近代ノ天皇ノ崩日ヲ以テ國忌トナス、伊呂波大寶
ノ制、國忌ノ日輟朝一日、令桓武帝延曆十年是ヨリ先キ國忌稍多シ、是ニ至
リ太政官ノ奏ニ依リ、制シテ親盡ノ忌ハ、一ニ省除ニ從ハシム、本紀、日清和帝以
後九陵國忌ヲ置キ、親盡クレハ迭除スルユト十陵ノ制ノ如シ、三代實錄、日本
抄、延喜ノ制、天智帝ノ國忌ヲ崇福寺ニ、光仁帝仁明帝ヲ東寺ニ、桓武帝文德帝
光孝帝ヲ西寺ニ置キ、其日治部以下諸司ノ官人寺ニ赴キ事ヲ供ス、延喜後世
ニ至ルニ及ヒテ、天子率ネ皆遺制シテ國忌ヲ停ム、日本紀、凡國忌世々隨ヒ
テ廢置ス、江家次第、江但シ天智、光仁、桓武、仁明、光孝、醍醐六帝ノ國忌ハ、歷世除
カス、江家次第、伊呂波王政維新主トシテ崇祖報本ノ禮ヲ修メ、神武天皇孝明天
皇ノ忌日ヲ以テ祭日ニ定メ、其餘歷代ノ皇靈ヲ神殿ニ合祀セラル、憲法類編、官

荷前幣 每年季冬諸國當年所進ノ調物ヲ以テ山陵及ヒ皇親外戚大臣ノ墓ニ
奉ス、之ヲ荷前幣ト曰フ、令文武帝始メテ著シテ永制ト爲シ、諸陵司
之ヲ掌ル、令凡陵ニ遠陵近陵ノ制アリ、時ニ隨ヒテ加除シ、其幣數ヲ定ム、諸
墓モ亦此ニ準ス、三代實錄清和帝詔シテ山階天智田原應基後田原光仁大枝
高野柏原長岡八島楊梅深草田邑凡
十陵、多武峰墓大臣正一位淡海公藤原朝臣不比等ノ墓ト、宇治墓、文德、大
是ヲ近陵近墓ト爲ス、其日乘輿建禮門外ノ幄座ニ出御シ、禮拜シテ
幣ヲ班ツ、若シ諒闇ニハ、則テ車駕御セス、其餘諸陵ノ奉幣正倉院ニ就キ、使者
幣ヲ受ク、其後十陵八墓加除一ナラス、但山階後田原、柏原
アリ、但近墓ヲ増シテ八ト爲シ、諸皇親及ヒ外親ノ墳墓諸國ニ在ルモノ無慮
三十六並ニ遠墓ト爲ス、其後十陵八墓加除一ナラス、但山階後田原、柏原
八島、深草、後田邑、後山階、陵、及ヒ多武峰墓、歷世除カス、四宮記、江後世ノ儀、天皇
建禮門ニ御セス、有司ヲシテ事ヲ行ハシム、江家次第崇德帝天治中、近陵十遠陵七
十七及ヒ外戚墓三十六ヲ定メ、皆荷前幣ヲ奉ス、朝野保元平治ノ亂ヨリ此禮
モ蓋シ絶エタリ、治承正治ノ間ニ至リテ、其遠陵百舌鳥、耳原、中陵ノ如キ、三島

藍野、山科、田原、柏原、深草諸陵、及ヒ源氏愛宕墓十餘所ノミ、僅ニ給田補頂、及ヒ下司等ノ職ヲ置キ、毎歲節日ヲ以テ酒果米菜等ノ物ヲ供シ、其中陵藍野ハ則チ二季ノ初祭ヲ修シ、特ニ鳥魚ヲ供ス、諸陵雜事ヲ存シ、應武年中行奉、北朝元年、荷前幣ヲ停止シ、爾後遂ニ廢絶ス、國本山陵 凡列聖祖宗ヲ祭ルノ禮、太神宮ヲ除クノ外、蓋シ皆之ヲ山陵ニ行フ、但上世考フ所ナシ、日本書紀、續日本書紀、令義解、日天武帝兵ヲ稱クルヤ、使ヲ神武帝陵ニ遣ハシ、馬及ヒ兵器ヲ獻シ、即位七年、越智ニ幸シ、後岡本天皇ノ陵ヲ拜シ、九年、復其陵ヲ祭ル、日本書紀文武帝二年、直廣參師宿禰馬手ヲ遣ハシ、新羅ノ調ヲ大内ノ山陵ニ獻ス、續日本書紀爾後天下ニ事アリ、及ヒ外蕃ノ入朝、每ニ使ヲ諸陵ニ遣ハシ、之ヲ告ケ、弓劍幣物ヲ獻シ、之ヲ祭ル、續日本書紀、日本後紀其每歲季冬幣ヲ諸陵ニ進ムルヲ荷前幣ト謂フ、即チ上ニ見ユルカ如シ、淳和帝立テ、即位ヲ山陵ニ告ケ、後以テ例ト爲シ、日本書紀宇多帝始メテ正旦ヲ以テ、山陵ヲ遙拜シ、四拜ノ禮ヲ行フ、後恒典ト爲ス、西宮初メ貞觀ノ制、近陵遠陵ヲ定メ、季冬ノ幣ヲ頒ツ、凡ソ十陵ヲ近ト爲シ、餘ハ皆遠ト爲ス、貞觀儀式、三代實錄延喜ノ制之ニ因リ、其遠陵ノ幣物ハ、近陵ニ視ルニ殺クコトアリ、延喜式嵯峨帝弘仁中山陵使荷前使、往々事ヲ闕ク者アリ、是ニ至リ制シテ、自後闕事者ハ、節會ニ預カルヲ得サラシム、村上帝天曆元年勅シ

テ闕使者ハ解任セシム、然レトモ積弊竟ニ革ムルコトアタハス、類聚符、後世災異アレハ則チ僅ニ山陵使ヲ發スルノミ、而シテ或ハ行ヒ或ハ廢ス、續內應仁以後天下爭亂、山陵荒廢、往々其所在ヲ失フ、享保三年十二月初、德川綱吉大ニ諸陵ヲ修ス、然レトモ不審少カラス、是ニ至リテ、德川吉宗人ヲ遣ハシ、悉ク山陵ノ所在ヲ檢シ、之ヲ圖寫シ、或ハ疊石ヲ修シ、或ハ屏欄ヲ作り、數年ニシテ畢ル、山陵志、十三年、三朝紀、四明治中興ニ及ヒ、宮内省ニ諸陵寮ヲ置キ、山陵ノ所在ヲ究明シ、荒廢ヲ修理シ、大ニ崇祖ノ典ヲ興ス、官令、沿革大難 文武帝慶雲三年十二月始メテ土牛ヲ作り、大難ヲ行フ、續日本書紀嵯峨帝弘仁ノ制、豫メ方相、侏子ヲ定メ、晦日夜、群臣各桃弓葦矢ヲ執リ、入リテ殿庭ニ立ツ、方相先ツ儼聲ヲ作シ、戈ヲ以テ楯ヲ擊ツ、群臣相承和シ、遂ニ惡鬼ヲ逐ヒ、宮城門外ニ至リ、京職接引シ、鼓譟シテ出テ、郭外ニ至リテ止ム、內裏貞觀以後之ニ從フ、貞觀儀、後式延喜ノ制、陰陽寮土牛及ヒ偶人ヲ諸門ニ立テ、立春ニ至リテ乃チ徹ス、延喜式後世追儼、有司ナシテ事ヲ行ハシメ、天子御セス、北山抄近年廢シテ行ハレス、
臨時 即位禮 初メ天祖ノ位ヲ皇孫ニ傳フル、授クルニ三種ノ寶器ヲ以テシ、永ク以

テ天璽ト爲シ、因リテ天兒屋命天太玉命ニ勅シ、殿上ニ侍衛シ、天忍日命ヲシテ儀仗ヲ備ヘシム。日本書紀、古語拾遺、神武帝即位ニ及ヒ、三器ヲ正殿ニ奉安シ、天宮命天種子命ヲシテ、祭典ヲ修メ、道臣命可美眞手命ヲシテ、儀仗ヲ建テシムル、一ニ神代ノ故事ノ如クス。舊時本紀、古語拾遺、爾後天璽鏡劍ヲ大統授受ノ寶器ト爲シ、而シテ四氏ノ後、皆其職ヲ世襲シ、石上榎井氏矛楯ヲ建テ、大伴佐伯氏宮門ヲ掌ル、而シテ中臣氏天神壽詞ヲ奏シ、齋部氏天璽鏡劍ヲ奉スルノ禮、最モ重典ト爲ス。日本書紀、續日、本紀、古語拾遺、文武帝之ヲ令ニ著シ、令、後朝儀益備ハリ、貞觀ニ至リテ其制定マル、其儀當日諸衛大儀ヲ服シ、大儀仗ヲ建テ、天皇冕服高御座ニ御シ、内侍二人劔璽ヲ奉シテ御座ノ左ニ置ク、天皇笏ヲ端シテ南面シ、大夫制ヲ宣ス、是ニ於テ群官再拜舞蹈シ、武官旃ヲ振テ萬歲ヲ稱フ、次テ叙位ヲ行ヒ、畢リテ天皇殿ノ後房ニ入ル、貞觀儀式、内裏式、延喜式、北山抄、初メ皇極帝四年位ヲ輕皇太子ニ讓ル、是ヨリ讓位ノ禮始マル、日本書紀、而シテ又光仁桓武平城帝以後、踐阼、即テ即位ト時月ヲ隔テ、儀ヲ異ニスルニ至リ、遂ニ例ト爲ル、日本書紀、踐阼ノ儀ハ紫宸殿ニ、即位ノ禮ハ大極殿ニ行フ、貞觀儀式、蓋シ即位ハ則テ登極ヲ宣告スルノ禮ニシテ、踐阼ハ則テ神器ヲ傳承スルノ儀ナリ、而シテ讓位ノ儀亦貞觀中ニ至リテ定マル、其日天皇紫宸殿ニ御シ、皇太子モ亦入ル、乃テ讓位ノ事ヲ宣ス

皇太子階ヲ降り拜舞シ、步行シテ坊ニ還ル、内侍節劍ヲ執リテ扈從シ、少納言傳國ノ璽櫃及ヒ鈴印鑰物ヲ奉ス、貞觀儀式、後世之ニ因ル、延喜式、江元明帝以後、大極殿ヲ用井、續日本書紀、踐阼ノ儀ハ紫宸殿ニ行フ、貞觀儀式、陽成帝大極殿災ニ罹ルヲ以テ、豐樂殿ニ即位シ、三代實錄、冷泉帝ハ紫宸殿ヲ用井、百鍊抄、後三條帝ハ太政官廳ヲ用井、一記要記、百鍊抄、安德帝ハ紫宸殿ニ、後鳥羽帝又太政官廳ニ行ヒシヨリ、後遂ニ例ト爲ス、抄、百鍊抄、抑皇位ノ繼承、最モ神器ノ授受ヲ重ンス、而シテ大化大寶以後、朝禮多ク唐制ヲ用井、日本書紀、上世ノ諸儀皆之ヲ大嘗祭ニ行ヒ、令義解、貞觀儀式、踐阼ノ日、唯大臣以下劔璽ヲ奉シ之ヲ進リ、即位ニハ則テ内侍劔璽ノ畫ヲ御座ニ置ク、西宮記、江家次第、北山抄、後鳥羽帝立テ、將ニ即位ノ禮ヲ行ハントス、時ニ安德帝神器ヲ擁シテ西狩ス、右大臣藤原兼實建言ス、國家ノ制必ス劔璽ヲ受ケ、以テ大統ヲ續ク、劔璽ナクシテ位ニ即クコト、上古已來未ダ曾テアラスト、又言フ、劔璽ヲ傳ヘスシテ位ニ即クハ、必ス後世ノ亂ヲ啓カント、聽カス、玉海、遂ニ神器ナクシテ即位ノ禮ヲ行フ、實ニ古今ノ大變ナリ、玉海、平家物語、元弘建武ノ際、天子蒙塵、備ニ艱難ヲ嘗ムト雖トモ、實ニ神器ヲ奉シテ失フコトナシ、北主新神器ヲ假用シ、以テ天璽ト爲シ、即位ヲ行フニ至ル、是ヨリ皇統分レテ兩宗ト爲リ、南北戰爭天下大ニ亂ル、太平記、神皇正統記、後龜山帝神器ヲ後小松

帝ニ傳フルニ及ヒテ始メテ一統ニ復ス後京都荒廢王室式微舊儀禮制皆廢
ス、應仁記、重福應仁後柏原帝ノ立ツヤ府庫耗竭大禮ヲ行フアタハサルモノ
二十年、前内大臣藤原實隆深ク之ヲ憂ヒ、本願寺ノ僧光兼ニ諭シ、經費ヲ奉ラ
シム、光兼乃チ金一萬兩ヲ獻ス、是ニ於テ初メテ大禮ヲ遂クルヲ得、池澤後奈
良帝立テテ十年、初メテ大禮ヲ行フ、亦大内義隆其費用ヲ供スルニヨレリ、皇
代器記、大毛利元就正親町帝ノ踐阼久シク大禮ヲ行ハサルヲ歎シ、請ヒテ之
内家譜、大ヲ修ス、御湯殿上日記、言王室衰微ノ極ト雖トモ、未タ嘗テ即位ノ禮ヲ廢スル
コトアララス、織田豊臣二氏ヲ經テ徳川氏ニ至リ、海内遂ニ一ニ歸シ、爾後舊典
ニ復シ、綱紀頗ル張ル、總見記、豐隆、皇年代器記、親王今上天皇慶應三年正月九
日踐阼シ、明年八月二十七日即位ノ禮ヲ行ハル、其儀古今ヲ酌量シ、時ニ隨ヒ
宜ヲ制シ、唐様ノ服制ヲ廢シ、典禮大ニ備ハル、嘉永明治年間、德法類編、明治
二十二年皇室典範ヲ定メラル、ニ及ヒ、即位ノ禮ハ京都ニ於テ行ハル、コ
トヲ規定セラレタリ、皇室
冠禮 清和帝幼冲ヲ以テ大統ヲ受ケ、即位ノ後始メテ元服ヲ加フ、天皇冠禮是
ヨリ起ル、三代實錄、時ニ大江音人唐禮ヲ參酌シ、其儀ヲ修定ス、中右當日天皇
紫宸殿ニ御シ、太政大臣御冠ヲ加ヘ、大納言髮ヲ理ム、明日天皇紫宸殿ニ御シ

宴ヲ群臣ニ賜フ、中納言壽詞ヲ奏シ、群臣皆萬歳ヲ唱ヘ、再拜舞蹈ス、三代實錄、
後之ニ因ル、中右皇太子ノ冠禮、元明帝和銅ヨリ以來、初メテ之ヲ行フ、後紀、仁
明帝承和五年皇太子紫宸殿ニ冠シ、三加ノ禮ヲ行フ、續日本後紀、後後其制ヲ
定ム、初メ延喜ノ制、唐禮ニ依リテ三祝ヲ用ヒ、應和ノ儀之ニ從フ、其後一祝ヲ
用フ、北山抄皇子冠禮、崇峻帝三年厩戸皇子始メテ元服ヲ加フ、扶桑略記、聖其儀
傳ハラス、醍醐帝昌泰元年齊世親王元服ヲ加フ、日本其祝辭載セテ本朝文粹
ニアリ、
冊立皇后皇太子 皇祖神武帝ニ始マル、而シテ其儀聞ユルコトナシ、蓋シ神武
帝事代主神ノ女ヲ納レテ太后ト爲ス、太后ハ即チ嫡后ナリ、日本後世天皇即
位、必ス皇后皇太子ヲ冊立ス、日本書紀、續日今傳フル所ノ制、貞觀ヨリ定マル、
當日式部建禮門前ニ詣リ、刀禰ヲ序列シ、冊立ノ事ヲ宣制ス、明日内侍制ヲ宣
シ、百官拜舞ス、皇太子亦拜舞シテ出ツ、貞觀新儀ハ既ニ冊シ畢リテ、即チ官臣
職司ヲ任シ、使ヲ遣ハシ山陵ニ告ク、新儀後水尾帝寬永元年、女御源和子ヲ立
テ皇后ト爲シ、中宮ト稱ス、初メ後村上帝以來、歷世皇后冊立ヲ行ハス、唯女御
ヲ以テ居ルモノ十一代是ニ至リテ此禮ヲ復ス、皇年代器今上天皇即位以來
皇后皇太子ノ儀、古今ヲ折衷シ、時ニ隨ヒ宜ヲ制シ、禮典大ニ備ハル、太政官日誌、

日本書紀卷之二十一

五

賜節刀 太古天照太神天稚彥命ヲシテ中國ヲ征セシメ賜フニ弓矢ヲ以テス、
 神武天皇天日別命ヲシテ伊勢ヲ平ラケシメ賜フニ標劍ヲ以テス、日本書紀、伊勢風土記、
 其後歷世征夷討賊ノ任ヲ授クル毎ニ必ス印綬劍矛斧鉞ノ類ヲ賜フ、日本書紀、
古事記、文武帝大寶ノ制、大將出征ニハ賜フニ節刀ヲ以テス、令儀、後之ニ因ル賜
 節刀ノ儀、貞觀中之ヲ定メ、大臣宣制シテ、勅書節刀ヲ賜フ、將軍拜舞シテ出ツ、
 師ヲ班スニ及ヒテ、節刀ヲ進ル、其儀初ノ如ク、大臣制ヲ承ケテ之ヲ受ク、貞觀、
 凡ソ大將ノ出征、節刀ヲ受クレハ、反リテ家ニ宿スルヲ得ス、令儀、旋師ノ日未
 タ至ラサル一驛、神祇官ヲ遣ハシ、破襖シ、然ル後使ヲ遣ハシ、郊勞ス、貞觀、朱雀
 帝天慶三年重テ其儀ヲ定ム、而シテ大略舊ニ仍ル、北山抄、其後治承ノ亂ニ及
 ヒ、平維盛ニ命シテ源賴朝ヲ討タシム、時ニ此禮久シク廢ス、乃チ平正盛源義
 親ヲ討ナシ、故事ニ依リ、唯驛鈴ヲ賜フ、平家物語、源平盛衰記、賴朝征夷大將軍ニ拜セラ
 ル、ヨリ、遂ニ其家ノ世職ト爲リ、爾後此儀モ亦廢ス、玉海、此後久シク廢シ、建
 武中興ノ時、足利尊氏ヲ討スルニ其儀アリ、太平記、天正中豐臣秀吉ノ東征ニ當
 リ、其儀行ハル、豐後、大關記、明治元年幕軍ノ入犯スルヤ、嘉彰親王ヲ大將軍ニ任シ
 錦旗節刀ヲ賜ヒ、又熾仁親王ヲ征東大總督ニ任シ、錦旗節刀ヲ賜ヒ、之ヲ討ス、
 功ヲ奏シ復命シテ、錦旗節刀ヲ進ル、稀世ノ盛事タリ、明治、遣唐使モ亦節刀ヲ

賜フ、其儀前ニ同シ、貞觀、事ハ外交志ニ詳ナリ、
 蕃使朝貢 仁德帝十二年高麗入貢ス、使者ヲ朝堂ニ饗ス、饗蕃使初メテ見ユ、其
 後三韓隋唐ノ使來朝スル毎ニ、裝騎裝船ヲ以ツテ之レヲ迎ヘ、導者ヲシテ使
 者ヲ引カシメ、館ヲ築キ饗ヲ賜ハル、日本書紀、文武帝ニ至リ、始メテ玄蕃寮ヲ置キ、
 以テ蕃使ノ辭見、宴饗、送迎及ヒ、鴻臚館ノ事ヲ掌ラシム、令儀、弘仁中詔シテ其
 儀ヲ定メ、天皇大極殿ニ御シテ朝貢ヲ受ケ、謁ヲ賜ヒ、之ヲ饗ス、式、延長已後
 其禮廢ス、日本書紀、其辭見、宴饗及ヒ、使節往來ノ事ハ、並ニ外交志ノ條ニ詳ナリ、
 大喪 神代既ニ殯宮ヲ興シ、供奉七日夜、發輦ニ及ヒ、竹箒ヲ以テ宮中ヲ掃ヒ、喪
 ナ終リテ、即チ祓除ヲ行フ儀アリ、日本書紀、古事記、神武帝以後、大喪必ス一年若ク
 ハ二三年ニシテ葬ル、其喪事ヲ重ニスルコトヲ見ルヘシ、日本書紀、上古世朴禮簡
 ニシテ、其詳ナルコト得テ聞クヘカラス、續日本書紀、類聚三、代、格、類、垂仁帝以後、始メテ從葬
 ニ埴輪ヲ用井ル、是後土部日本書紀、石作部姓、等ノ職アリ、世々凶儀ヲ掌ル、
令儀、景行帝以後、始メテ挽歌アリ、古事記、反正帝ノ喪、始メテ殯宮大夫ヲ置キ、重
 臣ヲ以テ之ト爲ス、日本書紀、文武帝令ヲ定ムルニ及ヒ、治部省ヲシテ凶儀ヲ掌ラ
 シメ、其屬ニ諸陵喪儀ノ二司アリ、皆喪事ヲ掌リ、土部ハ諸陵ニ隸ス、令儀、是後
 制度益備ハル、凡ソ始メテ崩スルトキ、裝束作造方相、養役夫、作路等ノ司ヲ任

シ使ヲ遣ハシ三關ヲ守リ文武百官及ヒ天下諸國ヲシテ素服哀ヲ舉ケシム、未發引ニ至ラサル數日所司誅人ヲ率井テ誅ヲ奏シ諡ヲ奉ス、日本後紀、桓武帝延曆八年太后高野氏崩ス葬司ヲ置キ誅ヲ奏シ諡ヲ奉シ哀ヲ舉クルコト、天皇ノ故事ノ如シ、明年皇后藤原氏崩ス亦並ニ太后ノ制ノ如シ、日本後紀、世太政官ノ請ニ因リ土師氏ノ專ヲ凶儀ニ預カルヲ停メ、殯宮御膳誅人長ノ如キ、普ク所司ヲ擇ヒ之ニ充テシム、類聚三清和帝貞觀ノ制凡ソ國ニ不諱アレハ、諸司凶服シ、朝集院前ニ列立シ、再拜座シテ哀ヲ舉クルコト三、凡九タヒ音ヲ舉ケテ止ム、毎日三次發引ニ至リテ止ム、儀式元明帝ノ崩スル遺詔シテ薄葬セシメ、葬司ヲ置カス、輜車ノ具金玉ヲ鏤飾スルヲ禁ス、日本後紀、日後嵯峨淳和仁明、文德帝皆遺制シテ薄葬セシメ、文德實錄、日本後紀大喪アル毎ニ臨時ニ取舍シテ復定制ナシ、中右記、左記、小右記初メ持統帝ノ大葬火化ヲ行ヒ、聖武帝佛式ヲ用井シヨリ、古制漸ク變シ、歷朝大喪及ヒ皇太后ノ喪皆薄葬ヲ以テ美事ト爲シ、日本後紀因循沿襲シテ、朱雀帝已後ニ至リテハ、復山陵ヲ置カス、扶桑略記、或ハ遺骨ヲ一塔ニ藏メ、以テ山陵ニ擬シ、葬儀モ亦專ラ僧徒ノ掌ル所トナル、日本後紀、百抄、帝王編年記、山樞記、中右記、明月記、平家物語、中後土御門帝明應九年九月帝土御門殿黑戸ニ崩ス、凶事記、宣胤記、皇年代畧記是時ニ當リテ天下騷亂資料供セス、靈柩黑戸ニ在ルコト四旬

十一月ニ至リ始メテ葬ル、皇胤紹運錄、三後光明帝ノ崩スルヤ、朝儀猶舊典ニ依リ、火浴ノ設ヲ爲ス、魚戸八兵衛アリ竊ニ之ヲ聞キ、大ニ哭シテ曰ク、淑慮固ヨリ浮屠ヲ疾ミ、火浴ヲ廢シ葬埋ヲ復セント欲ス、今其終ヲ奉送スル、何ソ火スルコトヲ爲シ、野臣敢テ之ヲ諫ム、聽カレサレハ死センノミト、乃テ公卿有司ノ家ニ奔走シ、直ニ火葬ヲ廢シ、帝ノ意ニ從ハシコトヲ請ヒ、號泣シテ退カス、朝廷其志ニ感シ、遂ニ葬埋ヲ復ス、國朝舊章錄、承應遺事明治中興ニ至リ、一切佛儀ヲ停メ、神式ヲ用ヒテ其禮ヲ定ム、
喪葬 上古大臣ノ葬、笛及ヒ青赤幡ヲ用井、妻子飯ヲ筒ニ盛リ、水ヲ盥ニ盛リ、捧持シテ之ニ隨フ、日本書紀、萬葉集、仙臺萬葉抄然レトモ其詳ナルコト知ルニ由ナシ、孝德帝大化二年詔シテ其制ヲ定ム、凡王以上ハ其葬時輜車ヲ用井、上臣ハ輿ヲ肩シテ行ク、庶人ハ亡ニ隨ヒテ收埋シ、一日停メス、凡王以下庶民ニ至ル殯ヲ營ムヲ得ス、凡畿内及ヒ諸國葬地ヲ定メ、各處ニ散シ埋ムルヲ得サラシム、其他殉人藏寶等ノ事、一切禁絶ス、日本書紀大寶ノ制、親王以下三位以上ハ、治部ヲシテ喪事ヲ監護シ、土部ヲ遣ハシテ贊禮シ、輜車或ハ方相ヲ賜ヒ、太政大臣ハ發喪五日、以下之ニ準ス、凡三位以上及ヒ創祖氏宗ニ非サレハ、墓ヲ營ムヲ得ス、凡喪葬禮ヲ備フルコトアタハサレハ、賈ハ賤ニ同シクスルヲ得、賤ノ賈ニ同シクス

ルコトヲ得ス、令桓武帝延曆中豪富ノ市人等送葬制ニ踰エ、妄ニ隊伍ヲ陳シ、幡鐘ヲ設ケ、貴賤差ナシ、且ツ既ニ窆スルノ後、酣醉シテ家ニ歸ルモノアリ、風教ヲ害スルコト太甚シキヲ以テ、勅シテ之ヲ嚴禁ス、類聚三醍醐帝ニ至リテ、俗又奢侈ヲ尙ヒ、禮制漸ク濫ニ、喪ニ遇フノ家、競ヒテ齋供ヲ設ク、三善清行上疏シテ之ヲ禁スルヲ請フ、本朝後式ヲ定メ、親王及ヒ大臣薨スレハ、裝束司山作司ヲ任シ、哀ヲ三日内ニ發シ、諸司事ヲ理スル常ノ如シ、但獄ヲ問ヒ刑ヲ行フヲ得ス、延喜後世ノ制大臣已上薨スル時ハ、使ヲ遣ハシテ三關ヲ守ラシム、日本紀外記然レトモ、持統帝ノ喪火葬ヲ行ヒシヨリ、世々相承ケ、其流俗復葬埋セス、諸臣喪葬モ、亦多ク火葬ヲ行フ、扶桑略日本紀後世朝廷衰頽セシヨリ、舊儀復行ハレス、明治中興ニ及ヒ、初メ火葬ヲ禁シ、尋テ其禁ヲ解キ、葬儀ハ神官僧侶教導職ヲシテ之ヲ掌ラシム、官令而シテ國家ノ元勳ハ時ニ國葬ヲ賜フ、官報

天子凶服 大寶ノ制、天皇本服二等以上ノ親ノ喪ニハ、錫苧ヲ服シ、三等以下及ヒ諸臣ノ喪ニハ、帛衣ヲ除キ、雜色ヲ通用ス、令貞觀ノ制之ニ因ル、北山抄凡錫苧ハ細布ノ淺黒色ヲ用フ、令後世ノ制、喪ノ冠ハ、緇纓袍ハ、關腋ノ黒布索帶布袴ヲ用フ、右記玉海、通シテ之ヲ素服ト謂フ、西宮記玉海、國本、其輕服ハ無

文ノ冠ヲ用井、西宮桓武帝即位ノ歲十二月太上皇崩ス、公卿奏シテ萬機ヲ總斷セシコトヲ請フ、詔シテ允サス、明年七月復奏シテ服ヲ釋クヲ請ヒ、始メテ之ニ從ヒ、大祓ヲ行フ、本紀凡祓禊シテ喪ヲ除クコト、神代ニ昉マル、蓋シ上世已ニ定制ト爲ス、而シテ或ハ大喪佛法ヲ用井ルヨリ、古制中廢シ、是ニ至リテ之ヲ復ス、大日本史嘉祥三年仁明帝崩ス、喪服ノ期日ヲ以テ月ニ易ヘ、十三日ニシテ除ス、是ニ至リテ月ニ易フルノ制ヲ定ム、然レトモ猶心喪ヲ服シ、期年ノ間宴ヲ設ケ樂ヲ作シ及ヒ美服ヲ用井ルヲ禁ス、文德世之ニ從フ、三代實錄其素服倚廬ニ御スルモノ十三日ニシテ、本殿ニ還御シ、本紀黒椽衣ヲ服シ、以テ諒闇ヲ終フ、玉海殿上ノ侍臣モ亦特旨ニ因リテ、黒椽衣ヲ服ス、三代實錄

諸臣凶服 重服ハ、錫苧ヲ用井、輕ハ、鈍色衣ヲ用井、政事後世重服ハ、緇纓ノ冠、黒椽衣、中角ノ帶、黒漆ノ劍、赤ノ蹈ヲ用井、輕服ハ、無文ノ冠、位袍、黒ノ表袴、襪ヲ用井、重服ヲ除スルノ後一月ハ、輕服ヲ着ク、心喪ニハ、無文ノ冠、若クハ、綾ノ冠、青朽葉ノ綾ノ袍、青鈍ノ袴ヲ用井、童殿上ノ者ハ、重服ニ、黒椽ノ縫腋ヲ用井ル、四宮初メ應和以往、輕服ハ、赤練ノ下襲、青鈍ノ表袴ヲ通用ス、一條帝ノ時ニ至リ、輕重俱ニ鈍色ヲ用井ル、識者之ヲ非トス、政事文武帝始テ忌服ノ制ヲ定メ、其

親疎ニ從ヒ短ハ七日ヨリ長キハ一年ニ及フ重服ニ遇ヘハ弔セス賀セス宴ニ預カラス凶服シテ公門ニ入ラス但シ奪情從公ノモノハ朝參ニハ位色ヲ服シ家ニ在リテハ喪服ニ從フ凡職事官父母ノ喪ニ遭ヘハ並ニ解官シ自餘ハ皆暇ヲ給フ亦其忌服ニ從ヒ月日長短アリ令義延喜ノ制妾夫ノ爲ニ期ヲ服シ妾ニハ服セス延喜爾後歷世之ニ因リ改ムルコトナシ法曹至要抄拾芥抄中御門帝享保四年幕府奏シテ喪服ノ制ヲ改ム青標紙服忌令然レトモ舊制ニ依リ大同小異アルノミ明治中興ニ及ヒ專ヲ武家ノ制ニ從フ

輟朝 文武帝大寶元年之ヲ定ム凡天皇二等已上ノ親及ヒ外祖父母右大臣已上若クハ散一位ノ喪ニハ天皇事ヲ視サル三日三等親百官ノ三位已上ノ喪ニハ天皇事ヲ視サルコト一日令義村上天曆三年陽成帝崩ス淳和帝ノ故事ニ遵ヒ輟朝五日日本紀華山一條二帝ノ喪之ニ因ル小右凡輟朝ニハ簾ヲ垂レ音奏警蹕ヲ止ム天子未タ朝ニ蒞マサレハ神事ヲ除クノ外或ハ議奏スルコトヲ得北山抄禁曆抄凡宗社山陵ノ災ハ皆輟朝五日三代實錄禁曆抄爾後歷世之ニ因ル歷代皇記皇年代略記明治中興ニ及ヒ其元勳ノ薨スル特ニ之ヲ行ハル

弔喪 景行帝ノ時磐鹿六弔命薨ス帝藤河別命武男心命ヲ遣ハシ之ヲ弔シ葬儀一ニ皇子ノ式ニ准セシム政事要略弔喪ノ儀蓋シ是ヨリ始マル文武帝大寶ノ

制京官三位以上父母祖父母及ヒ妻ノ喪ニ遭ヒ四位父母ノ喪ニ遭ヒ五位已上身喪スレハ并ニ奏聞シテ使ヲ遣ハシ弔セシム令義貞觀ノ制使者其家ニ就テ品位ヲ贈リ其他亡者ノ品位ニ隨ヒ臨時ニ之ヲ定ム貞觀儀式後世ノ儀贈位ハ葬地ニ就テ制ヲ宣ス北山抄其後奏聞ノ儀廢ス外記日記然レトモ國家ノ元勳ハ或ハ帝親シク其家ニ幸ス日本紀蓋シ特典ニシテ常制ニアラサルナリ

賜諡 天武帝四年大三輪眞上田子人君卒ス諡ヲ賜ハリ大三輪眞上田迎君ト曰フ賜諡始メテ此ニ見ユ日本紀元正帝養老四年藤原不比等ニ太政大臣ヲ贈リ文忠ト諡ス諡號二字ニ定ムルモノ此ニ始マル公卿補任其後藤原氏太政大臣ニ任セラレ官ニ在リテ薨スルモノ皆諡ヲ賜ハル日本紀藤原中後一條帝長元二年太政大臣公季薨ス諡ヲ賜ヒテ仁義ト曰フ日本紀爾後復賜諡ナシ多太瓦後醍醐帝ノ時ニ至リテ藤原師賢ニ太政大臣ヲ贈リ諡シテ文貞ト曰フ新業和歌集明治維新後故内大臣三條實萬ヲ追諡シテ文成ト曰フ蓋シ特例ナリ此後行ハレス

賻贈 大寶ノ制職事官ノ薨卒皆賻贈アリ皆其本位本官ニ依リテ給シ各差アリ若シ身王事ニ死スルモノハ皆職事官ノ例ニ依ル其特旨物ヲ賜ハル常制ニ拘ハラズ凡賻物從職共ニ給スヘキハ多キニ從フ官人征行ニ從ヒ或ハ使

人所在ニシテ身亡スルモノハ、皆殯殮ノ調度ヲ給フ、令義解、桓武帝延曆八年
是ヨリ先キ外官ノ賻物當國ノ正稅ヲ以テ之ヲ給ス、是ニ至リテ勅シテ新任
未タ赴任セスシテ身亡スルモノハ、舊ニ依リテ京庫ノ物ヲ給シ、永ク恒例ト
ナサシム、令義解、政 清和帝貞觀十二年、是ヨリ先キ外官ノ賻物太宰及ヒ管國
ハ兼ネテ殯殮料ヲ給シ、又兼テ葬料ヲ給ス、是ニ至リテ殯殮料及ヒ葬料ハ
並ニ停止ニ從フ、三代實錄、政 延喜ノ制、凡賻物ヲ給スヘキモノハ、喪家官ニ申シ、
官符ヲ左京職ニ下シ、穀倉院物ヲ以テ之ヲ給ス、初メ賻物料施藥院ニ藏ス、天
長四年詔シテ之ヲ罷メ、穀倉院ニ藏ス、政 後世王室式微蓋シ舊制復行ハレ
ス、明治中興ニ及ヒ、職事官ノ薨卒贈賻、皆金幣ヲ賜ハリ、官位ニ從ヒテ各、差ア
リ、官

雜儀

儀衛ノ制 其興ル尙シ、皇祖瓊々杵尊始メテ日向ノ高千穂ノ峰ニ降ルヤ、天祖
手置帆負命、彥狹知命、天目一箇命諸神ヲシテ、御笠楯矛刀斧等ノ物ヲ作り、以
テ儀仗ニ具ヘ、天兒屋命、天太玉命二神ニ詔シテ、殿内ニ侍衛シ、天押日命、天津
久米命ヲシテ、弓矢及ヒ鳴鏑帶劍ヲ執リ、前列ニ並立セシム、日本書紀、古語
武帝即位ニ及ヒテ、道臣命、大久米命、其久米部ヲ率井テ、宮門ヲ衛護シ、可眞手

命内物部ヲ率井テ儀衛ヲ嚴ニス、古語拾遺、高事本紀 道臣命ノ後ヲ大伴氏佐伯氏ト曰
ヒ、世々左右門衛ヲ掌ル、姓氏錄、古語拾遺 可美眞手命ノ後ヲ物部氏ト曰ヒ、其族ニ石
上榎井二氏アリ、又世々儀仗ヲ掌ル、高事本紀、觀日 大寶ノ制、衛門及ヒ左右衛
士、左右兵衛ノ五府アリ、皆禁衛ヲ掌リ、車駕出幸スレハ、衛士兵衛前後ニ導衛
シ、元日朔日若クハ聚集及ヒ蕃客宴會辭見アレハ、并ニ儀仗ヲ立テ、令義解 始メ
テ鳥幢及ヒ日月諸幡ヲ設ク、觀日 後世之ニ因ル、內裏式、貞觀 稱德帝ヨリ嵯峨
帝ニ至ル、衛府ノ制頗ル沿革アリ、令義解、事 官制ノ條下ニ詳ナリ、儀衛ノ制
弘仁以後亦改定アリ、延喜ノ制分ナテ大儀、中儀、小儀ト爲シ、六衛府以下ノ服
制、及ヒ幡幢ノ數各、差アリ、延喜 後世王室式微、禮典擧カラス、舊儀悉ク廢ス、慶
長元和以來、朝綱稍復ス、然レトモ曠昔ノ盛復企及スヘカラス、皇代書記、續
三代一覽、十 明治中興ニ及ヒ、儀衛ノ制時ニ隨ヒ宜ニ合シ、泰西ノ制ヲ參酌シ
大ニ改定ス、報官

行幸鹵簿ノ制 凡車駕出幸前數日前後次第司ヲ任シ、諸司百官扈從シ、衛士兵
衛前後ニ導衛ス、貞觀儀式、延喜式 其車駕初メテ宮ヲ出ツル、近衛將監御劍印鈴ヲ取
リ、近衛ヲ率井テ之ヲ奉ス、其駕國界及ヒ山川道路ノ曲ヲ經レハ、今來隼人吠
聲ヲ發ス、延喜 凡行幸大嘗會御輿鹵簿諸社行幸等、鹵簿ノ數各、差アリ、而シテ

御禊最モ嚴肅ナリ、貞觀儀式、延喜式、二中記、皇太后皇后行啓ノ制、延喜式ニ定
 ムル所、并ニ行幸ニ准ス、拾芥抄、新儀式、四宮記、一條帝正曆以後、其儀甚盛ナリ、外記日記、又伊勢
 齋内親王ノ祓除及ヒ伊勢ニ赴ク儀、延喜ニ定ムル其賀茂齋内親王モ亦之ニ
 准ス、延喜式、後世王室衰微舊儀復舉カラス、皇代事記、神皇正統記、維新中興
 ニ及ヒ、車駕出幸及ヒ皇太后、皇后、皇太子行啓皆旗章ヲ定メ、儀仗鹵簿ノ制、頗
 ル泰西ノ儀ヲ參酌シ、大ニ舊制ヲ改定ス、官報
 車駕從者ノ制、文武帝大寶中ニ定マリ、大納言以上儀仗アリ、合義聖武帝天平
 十八年ノ制、一位ハ從者十二人、五位以上之ニ准シテ差アリ、六位以下ハ二人
 トス、續日本紀延喜ノ制之ニ因ル、但シ親王及ヒ左右大臣十四人、參議以上之ニ准
 シテ差アリ、市人ハ雜摺色ヲ以テ從者ノ衣ト爲シ、及ヒ從者四人以上ヲ許サ
 ス、延喜式後世車副ノ數ヲ定メ損益アリ、弘安禮節圓融帝天延三年頃年諸祭使好ミ
 テ多數ヲ率井、或ハ七八十人、或ハ五六十人、弓箭ヲ帶シ綾羅ヲ服ス、是ニ至リ、
 勅シテ式條載スル所ニ依リテ定員ニ從ハシム、一條帝正曆元年行使典侍前
 驅後車年來益、多ク綺紈ヲ服シ羅繡ヲ裝ヒ、一車ノ費、殆ト十家ノ産ヲ逾ユ、是
 ニ於テ勅シテ、車ハ五輛ヲ限リ、騎ハ八人ニ過クルコトナカラシム、政事長保
 三年太政官ノ奏ニ依リ、番上及ヒ院宮王臣家ノ雜色ノ騎馬ヲ禁ス、但シ三局

史生左右衛門府生ノ檢非違使ヲ帶スルモノ、近衛ノ看督長タルモノハ、制ノ
 限ニアラス、新抄格順德帝建曆二年諸司衛官ノ車ニ乘リ騎馬ヲ從フルヲ禁
 ス、又公卿供奉ニ騎馬スルモノ、當色ノ舍人二人ヲ從フルヲ得、玉
 ハ二人ヲ從フルヲ得、玉
 隨身ノ制、凡隨身ハ衛府ノ舍人ヲ用フ、其攝政關白ハ、特ニ内舍人ヲ給ス、若シ
 中少將臨時ニ私人ヲ用フルモノ、之ヲ小隨身ト謂フ、公卿補任、山槐記、其數太
 上皇以下并ニ差アリ、弘安禮節後世又損益アリ、拾芥抄凡隨身ノ裝束、官人以下
 常儀ニハ蠻繪ノ褐衣襖袴、番長ハ狩袴、近衛ハ白襖袴ヲ用ヒ、并ニ細纓冠綏ヲ
 着ケ、弓箭ヲ執リ劍ヲ帶ス、但シ近衛ハ左右各、蠻繪及ヒ狩袴劍帶ノ色ヲ異ニ
 ス、拾芥抄、物具裝束抄、其節會拜賀行幸等ニハ、服色亦異レリ、拾芥抄
 朝儀班席、大寶ノ制、文武職事散官朝參ノ行立、各位次ニ依リテ席ヲ爲ス、合義
 延喜ノ制、朝賀ニハ參議及ヒ三位以上官秩ニ依リ、六位以下ハ諸節會ニハ位
 次ニ依リ、申政ノ時、ハ序スルニ官秩ヲ以テス、延喜式凡朝堂ノ座、貞觀中定マリ、
貞觀式延喜ノ制之ニ因ル、延休堂ハ親王、昌福堂ハ太政大臣、左右大臣、含章堂ハ
 大納言、中納言、參議、其他承光明禮、合嘉、顯章、延祿、暉章、康樂、修式、永寧、諸堂、凡在
 京ノ文官皆朝座ニ就ク、但シ神祇官中官春官左右京職等ノ諸司、及ヒ諸武官

ハ朝座ナシ、凡朝座ヲ設クルハ、三月ヨリ十一月ニ至ル、唯曹司ハ常ニ之ヲ設ク、延喜式

朝參ノ制 推古帝十二年皇太子厩戸憲法ヲ制シ、凡群卿百僚ヲシテ早朝晏退

セシム、是歲制ス、凡宮門ヲ出入スルモノハ、兩手地ニ據リ、跪キテ榻ヲ踰エ、即

テ立ツ、其後朝參ノ制屢沿革アリ、日本書紀大寶ノ制、凡京官皆開門前ニ朝シ、閉門

後ニ退ク、外官ハ即テ日出ニ朝シ、後午ニ退ク、凡文武官初位以上、毎月朔殿庭

ニ朝會ス、之ヲ朔朝ト謂フ、其常日ハ則テ皆廳座ニ就ク、令義解桓武帝延曆二

十三年勅ス、左右大辨八省卿彈正尹准參議以上ハ、開門後朝參スルヲ聽ス、日本書紀

貞觀ノ制之ニ因リ、自餘ノ諸司ハ開門前坐ニ就キ、開門後各常政ヲ行フ、其

殿階昇降ノ儀、執務ノ制皆定マル、貞觀儀式

百官相見禮 天智帝三年詔シテ、始メテ行路相避クル禮ヲ定メ、持統帝即位、又

詔シテ朝堂座上親王大臣ニ見ユルノ禮ヲ定ム、日本書紀文武帝大寶ノ制、四位ハ

一位ヲ拜シ、五位ハ三位ヲ拜シ、六位ハ四位ヲ拜シ、七位ハ五位ヲ拜ス、但シ元

日ハ親王以下ヲ拜スルヲ得ス、凡三位以下親王ニ路ニ遇ヘハ皆下馬シ、餘ハ

拜位ニ准ス、其下ヲサルモノハ皆馬ヲ歛メテ側ニ立ツ、今注嵯峨帝弘仁中更

ニ朝堂百官相見ノ禮ヲ定メ、其制頗ル備ハル、日本書紀仁明帝承和十年制シテ彈

正京職巡檢ノ日下馬ノ法ヲ定メ、後日本書紀清和帝貞觀十二年百官ノ無位二世

王ニ遇フノ禮ヲ制ス、三代實錄延喜ノ制舊ニ依リテ益備ハル、延喜式後世ノ制凡親

王大臣車上ニ相遇ヘハ、各車ヲ駐メ前驅ハ下ル、參議親王大臣ニ逢ヒ、及ヒ納

言以下親王ニ逢ヘハ、牛ヲ脱シ榻ヲ立ツ、四位以下公卿ニ逢ヘハ、車ヲ停メ、五

位大臣ニ逢ヘハ下ル、然レトモ定制トナサス、其後禮制漸ク變シ、因循俗ヲ爲

シ、復一定ノ法ナシ、西宮記後宇多帝弘安中公卿議シテ禮節ヲ定メ、大ニ舊制ヲ

復ス、弘安禮節足利氏ノ時ニ至リテ、禮節大ニ壞レ、武人跋扈シ、馬上御幸ニ逢フモ

亦下拜セス、土岐賴遠ノ如キ前驅ヲ呵嘖シ、遂ニ乘輿ヲ射、輓ヲ折リ、輻ヲ破ル

ニ至ル、是ヨリ公卿騎馬ノ者ヲ見レハ、乃テ遽ニ車ヲ下ル、故ニ武人益、朝廷ヲ

蔑視シ、唯將軍ヲ敬スルヲ知ルノミ、太平記此ヨリ天下喪亂、朝廷ノ禮益、失シ、百

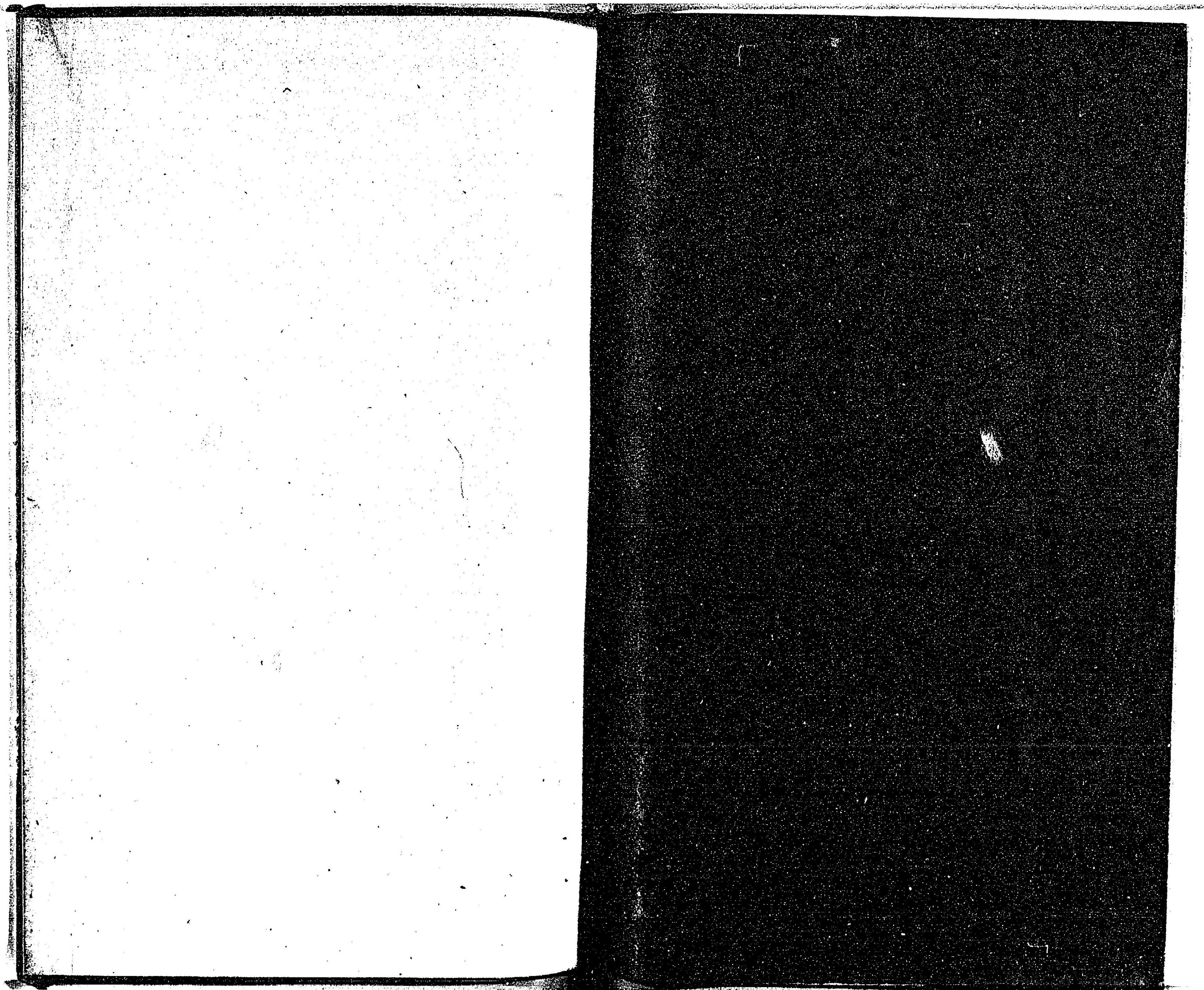
官相見ノ禮モ殆ント其式ヲ失セシカ、元和已來稍舊式ニ復セリ、明治中興ニ

及ヒ、洋式ニ效ヒ、其儀太々簡ニシテ、大ニ古制ト異ナレリ、

110
10
60

卷表要		誤		正		枚表要		誤		正	
十九	十六	十二	九	八	五	一	五	一	二	五	二
○可眞手命	○後睦峨	○外交志ノ條	○左京	○親長紀	○行ハス	○日本書記	○ナ折レ	○將師	○家道	○新武目	○新式目
○可眞手命	○其後睦峨	○外交志	○在京	○親長紀	○行ハレム	○日本書記ニ下之	○ナ折衷シ	○將帥	○歌道	○新式目	○昭
二十	十七	十二	八	五	二	四	二	三	二	一	二
○其賀茂	○其流俗復器埋セ	○世々	○本議	○續日本紀	○太上天皇	○公事根本	○輝候	○第五	○桃文	○本府	○桃文
○賀茂	○復器埋ノ禮ヲ用	○世々	○本儀	○續日本紀ニ下之	○太上天皇	○公事根源ニ下之	○輝候	○第五	○桃文	○幕府	○倒置
十九	十三	十	九	六	二	五	三	四	三	二	一
○扶桑畧紀	○續日後紀	○效フル	○駒率	○親閑	○又文ノ未タ	○爲サシ	○爲サシ	○流徒	○他民	○其大	○景勝等
○扶桑畧紀ニ下之	○續日本紀	○效ヘル	○駒率	○親閑	○禮文ノ未タ	○爲サシ	○爲サシ	○流徒	○他氏	○其後大	○景勝

平安通志卷之二十四





110
合10
60

平安通志

七八

